

有田・小田部

第29集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第538集

1997

福岡市教育委員会

正誤表

第538集 有田・小田部 29

P	誤	正
1	S X (構築物)	S X (土壙墓)
5	85	81
39	遺物写真番号 25	遺物写真番号 24
48	土壙墓 S X14 (北から)	土壙墓 S X04 (北から)
75	遺物番号 116	遺物番号 110

有田・小田部

第29集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第538集



1997

福岡市教育委員会



有田・小田部周辺航空写真（平成 5 年撮影）

*写真掲載については国土地理院の
許可を得た。



第78次調査区全景（南から）



第78次調査 弥生時代住居跡SC02・03（東から）

序 文

玄界灘に面した福岡市は、豊かな自然環境と歴史的な遺産に恵まれています。しかし、近年の福岡市は著しい都市化によってその姿を変貌しつつあります。

早良平野は、大陸との交流の中で古くから栄え、そのために遺跡も多く存在している地域ですが、福岡市の市街地拡大と共にこの地域においても都市基盤の整備がすすめられ、これに伴い埋蔵文化財の発掘調査も増加しているところです。

福岡市教育委員会では、この地域における各種の開発事業に伴い、失なわれゆく埋蔵文化財の保存と保護措置に努めているところです。

この中でも有田遺跡は、「有田・小田部」と呼ばれる台地上に立地しており、従来の調査では、旧石器時代から江戸時代までの重要な遺構・遺物を発見しています。特に弥生時代はじめの環濠は、博多区所在の板付遺跡に匹敵するもので、早良平野における弥生時代の始まりと稻作の状況を知る重要な資料となっています。

本書は、昭和58年度に発掘調査を行った有田遺跡第78・79次調査の成果について報告するものです。今回の調査では、弥生時代前期の貯蔵穴や住居跡、律令時代の柵跡、戦国時代の濠などの遺構を発見しました。これらの遺構とその出土遺物は早良平野における弥生時代から戦国時代までの歴史的な事件・事実を知る重要な手懸かりになるものと考えられます。

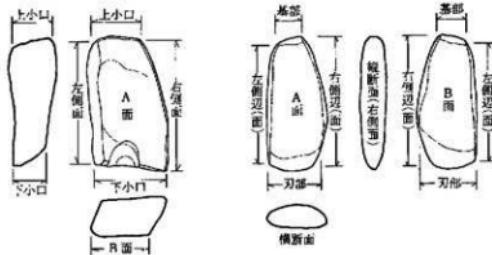
本書が、市民の埋蔵文化財に対するご理解と認識をより深める一助となり、また、研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 町田 英俊

例　　言

- (1) 本書は、福岡市早良区有田・小田部・南庄地域内における住宅開発に伴い、福岡市教育委員会が、昭和58年度において国庫補助を得て実施した緊急発掘調査報告書である。
- (2) 本書には、昭和58年度に実施した第78・79次調査について収録する。
- (3) 本書では、有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見做し、広義の有田遺跡と呼称する。
- (4) 発掘調査は、井澤洋一・松村道博が担当した。
- (5) 本書に掲載した遺構実測図は、井澤、松村、谷沢仁、辻哲也、渡辺武子、清原ユリ子、金子由利子が実測した。
- (6) 本書に掲載した遺物実測図は、牛房綾子、池田孝弘、田中昭子が実測した。石器、陶磁器については器械実測を行い、廣密香、吉田扶希子が担当した。
- (7) 遺構・遺物の製図は、主に牛房、廣密が行い、石器の製図等は井澤が担当した。
- (8) 遺構の写真撮影は、井澤、松村が分担して行い、遺物の撮影は、牛房が行った。
- (9) 本書に掲載した遺構一覧表は、牛房が、遺物の一覧表は牛房、廣密、池田孝弘が作成した。
- (10) 本書作成にあたっては、福田小菊、多田映子、西口キミ子の協力を得た。
- (11) 遺構番号は、発掘調査中に於いて検出した順に通し番号をふり、整理作業の段階において遺構略号を遺構番号の頭に付けた。遺構の略号として用いたのは、SC（住居跡）、SK（土壙）、SU（貯蔵穴）、SX（構築物）、SB（擅立柱建物）、SA（櫛）、SP（小穴）である。
- (12) 本書の遺物番号は、遺構の種類毎に通し番号で示し、挿図・図版番号と一致させている。
- (13) 本書に用いた方位は磁北である。
- (14) 本報告にかかるる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- (15) 本書の執筆は、井澤が担当し、編集は調査員の協力を得て井澤が行った。



本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査組織	1
(1) 昭和58年度の調査組織（第78・79次調査）	1
(2) 平成8年度資料整理	2
第2章 有田・小田部の歴史	7
(1) 立地・歴史的環境	7
(2) 文献資料	7
第3章 第78次調査	9
1. 地形と概要	11
(1) 立地	11
(2) 概要	13
2. 造構・遺物説明	14
(1) 住居跡（SC）	14
(2) 住居跡出土遺物	21
(3) 土壙（SK）	23
(4) 土壙出土遺物	27
(5) 貯藏穴（SU）	27
(6) 貯藏穴出土遺物	35
(7) 土壙墓（SX）	49
(8) 土壙墓出土遺物	49
(9) 掘立柱建物	51
(10) 楼（SA）	52
(11) 古代から近世の溝（SD）	56
(12) 溝出土遺物	63
(13) Pit（SP）,表土出土遺物	77
3.まとめ	78
第4章 第79次調査	95
1. 地形と概要	97
(1) 立地	97
(2) 概要	97
2. 造構・遺物説明	97
(1) 掘立柱建物（S B）	97
(2) 出土遺物	100
3.まとめ	101

挿 図 目 次

Fig. 1	有田・小田部周辺の遺跡（縮尺1/25,000）	V
Fig. 2	有田・小田部台地と発掘調査地点（縮尺1/8,000）	5
Fig. 3	調査地点位置図（縮尺1/8,000）	6
Fig. 4	調査地点、及び中世溝配置図（縮尺1/3,000）	8
Fig. 5	第78次調査地点位置図（縮尺1/400）	11
Fig. 6	第78次調査遺構配置図（縮尺1/200）	13
Fig. 7	第78次調査住居跡配置図（縮尺1/300）	14
Fig. 8	住居跡SC01・04・05、上擴SK11実測図（縮尺1/20・1/40・1/80）	15
Fig. 9	住居跡SC02・03実測図（縮尺1/20・1/80）	16
Fig. 10	住居跡SC01～03出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）	20
Fig. 11	第78次調査土壤・貯蔵穴配置図（縮尺1/300）	23
Fig. 12	土壤SK01・09・13・17実測図（縮尺1/40）	24
Fig. 13	土壤SK09出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）	26
Fig. 14	貯蔵穴SU02・03・06・12実測図（縮尺1/40）	28
Fig. 15	貯蔵穴SU05実測図（縮尺1/40）	31
Fig. 16	貯蔵穴SU07・08実測図（縮尺1/40）	32
Fig. 17	貯蔵穴SU02・03出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）	35
Fig. 18	貯蔵穴SU05出土遺物実測図（縮尺1/3）	37
Fig. 19	貯蔵穴SU05・06出土遺物実測図（縮尺1/3）	38
Fig. 20	貯蔵穴SU07出土遺物実測図①（縮尺1/3）	41
Fig. 21	貯蔵穴SU07出土遺物実測図②（縮尺1/3）	42
Fig. 22	貯蔵穴SU07出土遺物実測図③（縮尺1/1・1/3）	44
Fig. 23	貯蔵穴SU08出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）	46
Fig. 24	貯蔵穴SU10出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）	47
Fig. 25	第78次調査土壤幕配置図（縮尺1/300）	49
Fig. 26	土壤墓SX04・15・16実測図（縮尺1/30）	50
Fig. 27	土壤墓SX04・15出土遺物実測図（縮尺1/3）	50
Fig. 28	第78次調査掘立柱建物・柵配置図（縮尺1/300）	51
Fig. 29	掘立柱建物SB01・02実測図（縮尺1/80）	52
Fig. 30	柵SA01実測図（縮尺1/60）	55
Fig. 31	第78次調査溝配置図（縮尺1/300）	56
Fig. 32	溝SD01土層断面実測図（縮尺1/40）	57
Fig. 33	溝SD02・08土層断面実測図（縮尺1/20・1/40）	58
Fig. 34	溝SD01出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）	64
Fig. 35	溝SD02出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）	65
Fig. 36	溝SD03～05出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）	66
Fig. 37	溝SD08出土遺物実測図①（縮尺1/3）	70

Fig. 38	溝SD08出土遺物実測図②（縮尺1/3・1/6）	71
Fig. 39	溝SD08出土遺物実測図③（縮尺1/3）	73
Fig. 40	溝SD08出土遺物実測図④（縮尺1/3）	74
Fig. 41	溝SD08出土遺物実測図⑤（縮尺1/3）	75
Fig. 42	Pit、表土出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）	77
Fig. 43	第77・78・100・101・107次遺構配置図（縮尺1/600）	80
Fig. 44	第79次調査地点位置図（縮尺1/300）	96
Fig. 45	第79次調査遺構配置図（縮尺1/100）	98
Fig. 46	第63・79次調査掘立柱建物SB02・08・09実測図（縮尺1/80）	99
Fig. 47	SP02出土遺物実測図（縮尺1/3）	100
Fig. 48	第63・79次調査遺構配置図（縮尺1/100）	102

表 目 次

Tab. 1	第78次調査住居跡一覧表	21
Tab. 2	第78次調査掘立柱建物一覧表	51
Tab. 3	第78次調査遺構一覧表	81
Tab. 4	第78次調査遺物一覧表	83
Tab. 5	第78次調査軒丸瓦計測表	90
Tab. 6	第78次調査軒平瓦計測表	90
Tab. 7	第78次調査丸瓦計測表	90
Tab. 8	第78次調査平瓦計測表	90
Tab. 9	第78次調査瓦塙計測表	90
Tab. 10	第78次調査石製品一覧表	91
Tab. 11	第78次調査玉類計測表	94
Tab. 12	第63・79次調査掘立柱建物一覧表	100



1. 西新町遺跡 2. 藤崎遺跡 3. 原遺跡 4. 原続後遺跡 5. 飯倉遺跡 6. 飯倉原遺跡
7. 下隈遺跡 8. 鶴町遺跡 9. 原深町遺跡 10. 有田七田前遺跡 11. 橋本復田遺跡

Fig. 1 有田・小田部周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市は、昭和50年までに1市30町村が合併した都市で、面積は約336.81㎢を測る。平野部は、大きく分けると福岡平野と早良平野からなっている。有田・小田部地区は、福岡市の西部地域に広がる早良平野のほぼ中央部の台地上に位置し、この台地の面積は約70万㎡を測る。この地域は、かつては福岡市近郊の農村地帯であった。昭和47年に、福岡市が政令指定都市に指定された以降、九州経済の中核都市としてめざましく発展すると共に、人口の集中にしたがって福岡市の西部地域は、道路網の整備や地下鉄の開通によって、住宅化が著しく進められているところである。有田・小田部地区も同様に過日の田園・畑作地域の面影はなく、現在では高層アパートが林立した状況にある。

福岡市教育委員会では、昭和50年より有田・小田部地区のこれらの開発に対処し、発掘調査を実施しており、平成7年度末までに180件を数える。多くは個人専用住宅であったが、近年は学校建設、市営住宅の改築などの公共事業や大型の民間開発事業も含まれている。

本書では、個人専用住宅及び、店舗付住宅など国庫補助の対象事業として発掘調査を実施した昭和58年度の発掘調査のうち第78・79次調査の成果について報告するものである。

2. 発掘調査組織

(1) 昭和58年度の調査組織（第78・79次調査）

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第2係

調査責任 文化部文化課長 生田征生

埋蔵文化財第2係長 折尾学

庶務担当 間崎洋一

調査担当 井澤洋一、松村道博

調査員 谷沢仁（現 佐賀県大和町教育委員会）、辻哲也（別府大学）

調査協力者 松尾和雄、真子康次郎、高浜謙一、結城茂巳、座親秀文、西原達也、海田龍生、
武田秀司、合屋龍介、松尾正明、下野敏夫、伊庭秀子、緒方マサヨ、金子由利子、
清原ユリ子、坂口フミ子、佐藤テル子、柴田勝子、柴田幸子、柴田春代、柴田タツ子、
庄野崎ヒデ子、土斐崎初枝、砥綿千江子、西尾たつよ、平井和子、堀川ヒロ子、
松井フユ子、松井邦子、松尾玲子、有富いつ子、米嶋チズヨ、日野良子、末松信子、
中村千里、後藤ミサヲ、吉岡田鶴子、宮原邦江、砥上志華子、木村伸子、吉田祝子、
原花千代、江口洋子、合屋文子、坂田まさ子、結城律子、渡辺武子、森みえ子、
浜口由美子、川田初、川田久子、吉川タエ、佐藤ヒサエ、島田まり子
西南大学歴史探求会

資料整理 原秋代、池田洋子、深堀博了、元田明子、内尾トミ子、仲前智江子、永井和子、
友田妙子、小江英美子、大田けい子、久門みちよ、山下仁美

(2) 平成8年度資料整理

整理主体 福岡市教育委員会

整理担当 文化部埋蔵文化財課

庶務担当 埋蔵文化財課第1係 内野保基

整理報告 埋蔵文化財課主任文化財主事 井澤洋一

調査員 池田孝弘、吉田扶希子、牛房綾子、廣畠香

作業員 多田映子、田中昭子、西口キミ子、福田小菊

(有田遺跡第78次調査)

遺跡調査番号		8306		遺跡略号		ART-78	
地番		有田2丁目20-2		分布地図番号		原82	
開発面積	411m ²	調査対象面積		411m ²	調査面積	398m ²	
調査期間		昭和58年5月23日～7月21日					

(有田遺跡第79次調査)

遺跡調査番号		8307		遺跡略号		ART-79	
地番		小田部1丁目225-1,2		分布地図番号		室見81	
開発面積	143m ²	調査対象面積		143m ²	調査面積	116m ²	
調査期間		昭和58年6月9日～6月15日					



有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）



有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）

※写真掲載については国土地理院の
許可を得た。

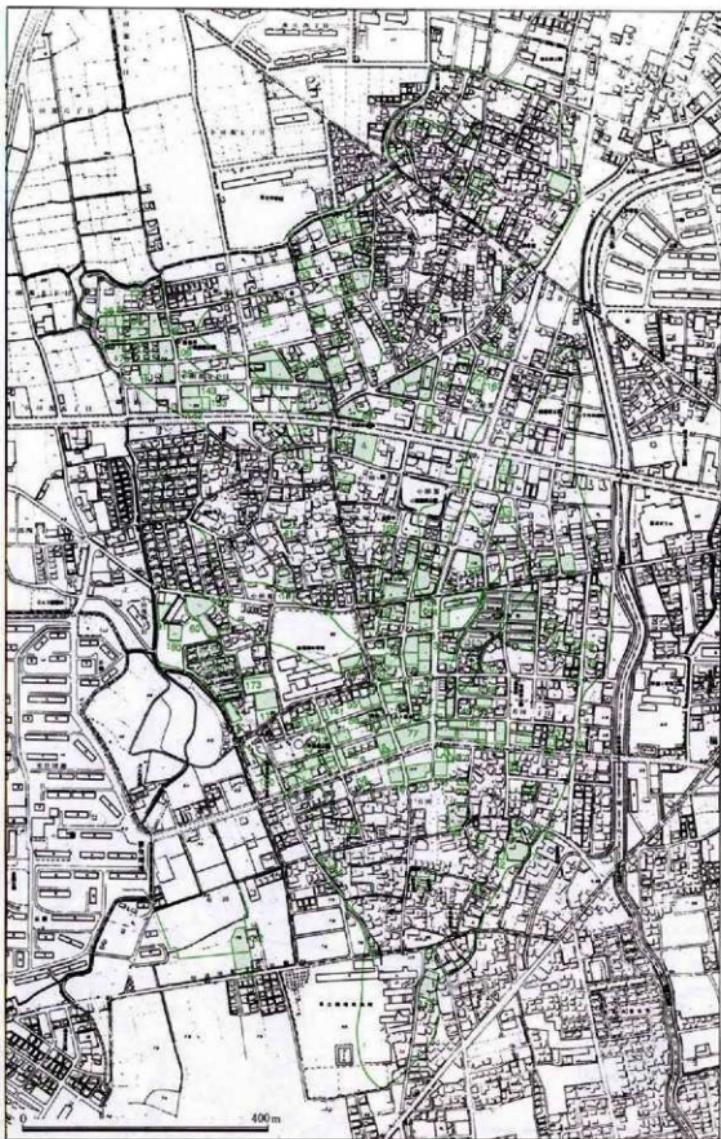


Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点 (縮尺1/8,000) △数字は、調査次数を表す。

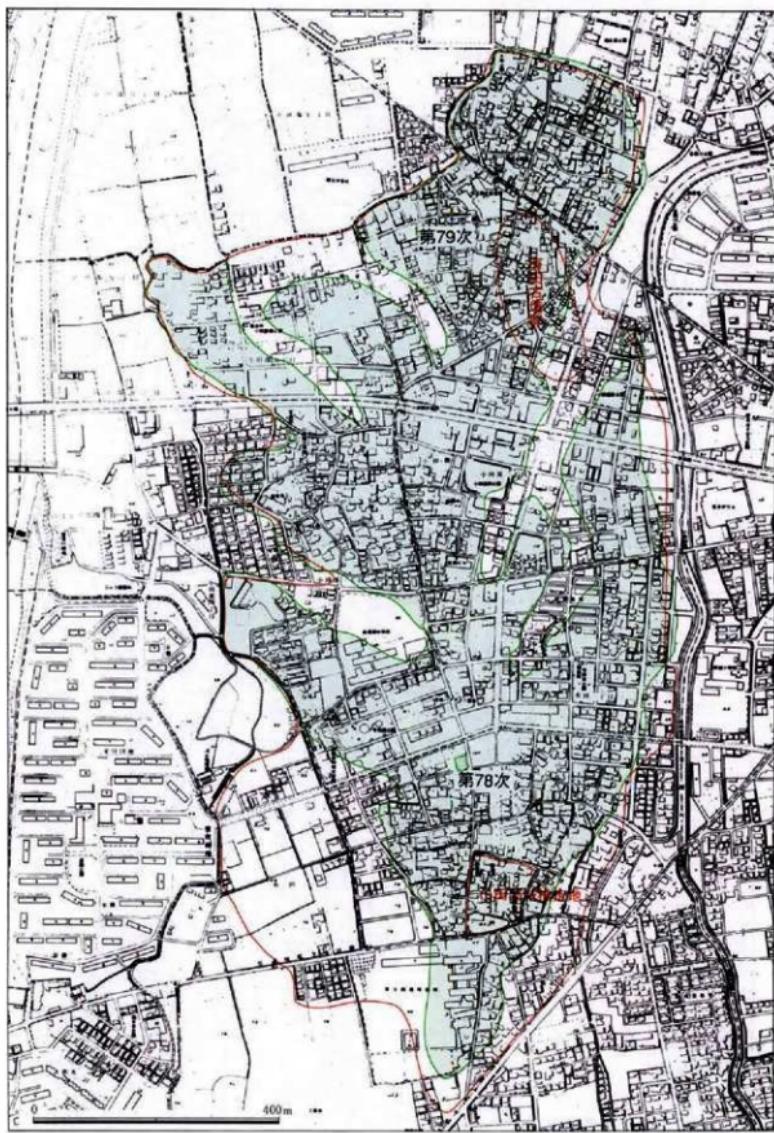


Fig. 3 調査地点位置図 (縮尺1/8,000)

■ 台地範囲
■ 遊跡範囲

「筑前國續風土記拾遺」

○天皇御首御首 小田部氏の旗子として祭りし社といふ。其傳にから縁
所有。ドに見えたる小田部氏の里城甚なり。

和名抄に此處に田部郡あり。此村は其遺名なるべし。日本紀實行天皇

五十七年に諸國に田部を置れしよし見えたり。名づけたる字子也。其傳にから縁

有田も本は此村より別れたり。（古事記） 有田も本は此村より別れたり。

村の西に宇見川有。源流は内山川也。北流して大河原川也。南より北江

原村に入て、左に在原を行は肥前川也。源流の道なり。右の小路を直に

西に行は、此村の松原原を下りて対岸川を渡り、肥前川の南を經て下山

門村に至る。是天正の比の佐原也。秀吉公名護屋陣の時、此道を經

過し給し故に今に太閤道といふ。

村西口に在。真宗西傳多方行寺と云ひ也。

教善寺

村西口に在。真宗西傳多方行寺と云ひ也。

「早良郡志」

村社小野神社 舌社は、有田字馬場にあつて、祭神は玉依姫命火

火出見事御靈主兼不合掌である。例祭は九月十九日にし、境内五百

石二十二三坪、社地十三坪、明治五年十一月三日、村社に定められた。氏

子六十五石、境内の曾根神社は、明治十五年一月二十日子天神屋敷か

ら遷したのである。小田部氏の守護として祭つた社と云つて居る。

當社の西面に、反そ振りの百間と云ふ所がある。往々本社の祭田で

火出見事御靈主兼不合掌である。例祭は九月十九日にし、境内五百

石二十二三坪、社地十三坪、明治五年十一月三日、村社に定められた。氏

子六十五石、境内の曾根神社は、明治十五年一月二十日子天神屋敷か

ら遷したのである。小田部氏の守護として祭つた社と云つて居る。

曾根山は、小田部字吉城にあつて、曾根山と號し、真宗

二の觀音堂は吉城堂と、宇東堂ととにあつたのを明治十四年七月廿四

年内に各一向堂である。曾根山は、明治八年十月三十日、

真宗西傳多方行寺は有田字馬場にあつて、曾根山と號し、真宗西傳

七七年生子一千五坪あるて、種代は三十五石。

小田部氏事 小田部子立石と謂ふ所に、小田部氏の墓云ふものがあ

る。二段切石を重ねてあるも鐵の見るべきものがない。里人は田原と

由来未詳。

實業會
村南に在。鹿児也。所生上佐美命 神功皇后 鹿特天皇也といへり。

由來未詳。

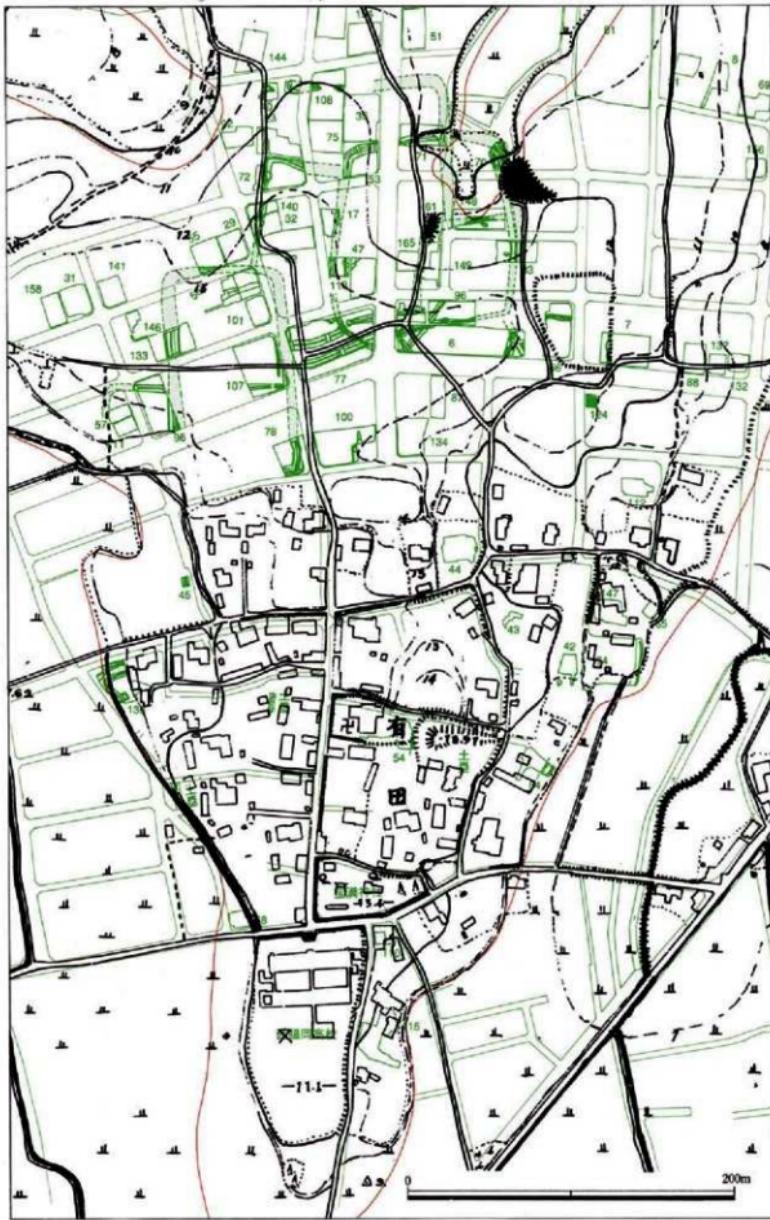


Fig. 4 調査地点、及び中世溝配置図（縮尺1/3,000）

*地形図は昭和16年作製、緑数字は調査次数を示す。

- 台地の範囲
- 現在の区画線及び調査地点
- 中世溝又は塗

第3章

有田遺跡 第78次調査



発掘作業風景（南から）

第3章 第78次調査 (調査番号 8306)

1. 地形と概要

(1) 立地

当該地は、福岡市早良区有田2丁目20-2に所在し、発掘調査面積は、398m²である。

有田地区の台地平坦地のほぼ中央にあって、標高12~14mを測る高所に位置する。この地域は、北東側と北西側から小谷が切り込むため、幅120mの狭長なくびれ部を形成している。当該調査地点においては、近年、大型の掘立柱建物が数多く検出されており、これらのこととは当該地の西側約1~2kmに位置する橋本地域が古代額田駅家に推定されていることや、更に、文献上において8世紀中頃には早良郡司として大領三宅連、少領早良勝等の郡司層の存在が記されていることから、有田・小田部地区においても古代早良郡の官衙遺構が存在することを充分に推定させる。

戦国時代の有田・小田部地区は交通の要衝に位置しており、「筑前国續風土記」、「筑前国續風土記拾遺」などに伝承として「小田部城・堀ノ内城」の存在が伝えられている。

当該地の周辺では、第1・2・19・29・32・17・55・56・77・89次調査を実施し、この地域における縄文時代以降の遺跡構成の全容を把握しつつある。又、昭和41~43年には、区画整理事業に伴い予



Fig. 5 第78次調査地点位置図 (縮尺1/400)



第78次調査区遠景（東から）



第78次調査区全景（南から）

備調査、第1・2次調査が九州大学によって実施されており、縄文時代晚期から奈良時代までの遺構が発見されている。特に第77次調査地点は、当該地の北側に位置しており、ここで検出した縄文時代晚期の溝や律令時代の掘立柱建物、戦国時代の溝などは、今回の調査で検出した溝、貯蔵穴、樋等の遺構に直接的に関係する遺構である。

(2) 概 要

今回の調査では、東側の第77次調査の調査成果を参考に、古墳時代の集落の把握、掘立柱建物群の規模の確認、16世紀代の濠の延長部分の確認等を目的に発掘調査を行った。

表上は耕作土で、深さ約15cmを測る。耕作土の下は褐色ローム層が形成されており、遺構はこの上面において検出できる。

遺構は、弥生時代の住居跡2軒・貯蔵穴8基、古墳時代前期住居跡2軒・土壙4基、奈良時代～平安時代の掘立柱建物2棟・溝1条・樋1条、中世の土塙墓3基・濠1条、江戸時代の溝2条等を検出した。

弥生時代の竪穴住居跡は、いずれも円形プランであるが、2棟が切りあっているところから建て替えと考えられる。古墳時代の竪穴住居跡は、ベッドを有しており、4世紀中頃～5世紀初め頃を考えられる。いずれも弥生時代住居跡SC01・03と切りあっているため全体の形は明確ではない。

弥生時代の貯蔵穴は、今までのところ、この遺跡においては検出例は少なく、第3・66次調査においてわずかに4基程発見されているのみである。立地的に見て環状に配置されていた可能性があ

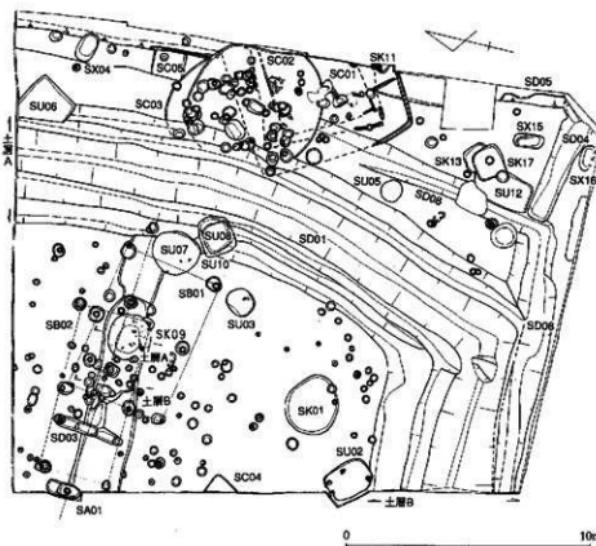


Fig. 6 第78次調査 遺構配置図 (縮尺1/200)

る。

律令時代の柵は、当該地の北側に位置する第77・107次調査で検出した掘立柱建物群を囲繞する柵と関連するもので、1町または、半町の方形区画を形成するものと考えられる。

中世の土塹墓は、この一帯で多く発見されているところから、この時期の墓地の存在を裏付けている。溝の内、溝SD01は幅4~6m、深さ約2mを測るもので、第77次調査の濠に接続する。他の調査地点の遺物等から16世紀前半が考えられる。この濠は、矩形に曲がる溝の形状を呈しており、中世城郭の曲輪に関連するものであろう。

2. 遺構・遺物説明

(1) 住居跡 (SC)

弥生時代と古墳時代の住居跡を合わせて5軒検出した。住居跡SC01~04は、東側の境界地にあり、且つ、調査区を南北に走る溝SD01のために堅穴住居跡は削平を受けて遺存状態は悪く、全体形は不明である。住居跡SC05は、西側境界地に所在する。

SC01 (Fig. 8) 調査区東側の境界地に位置する。上面の削平が著しく、且つ溝SD01に切られるため全体形は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈するものと考えらる。西壁内側にコの字形のベットが設けられている。現状の規模は南北の長さは5.4m、東西の長さは4.7m、壁の現存高は16cmである。

周溝は、南北から東西方向の周壁下とベット下に遺存している。ベット下の周溝は、方向の違う溝が2条存在しているので、2軒の切り合い、もしくは建て替えが考えられる。周壁下の溝幅は12~24cm、深さ16cm、ベット下の周溝は幅14cm、深さ4cmを測る。

東西壁の東側境界地には出入口の土壙SK11が存在する。この土壙内からは土師器の壺・甕等が出土した。炉跡状の遺構はベットの北側に位置し、浅く、不定形である。長径48cmを測る。主柱の柱穴はP89が相当するものと考えられる。住居跡の覆土は、黒色粘質土である。

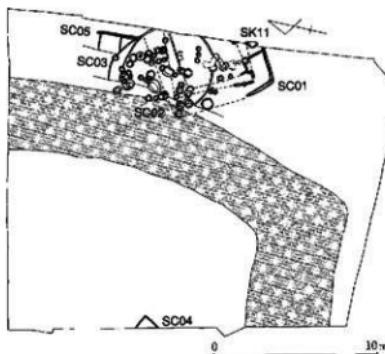


Fig. 7 第78次調査 住居跡配置図 (縮尺1/300)

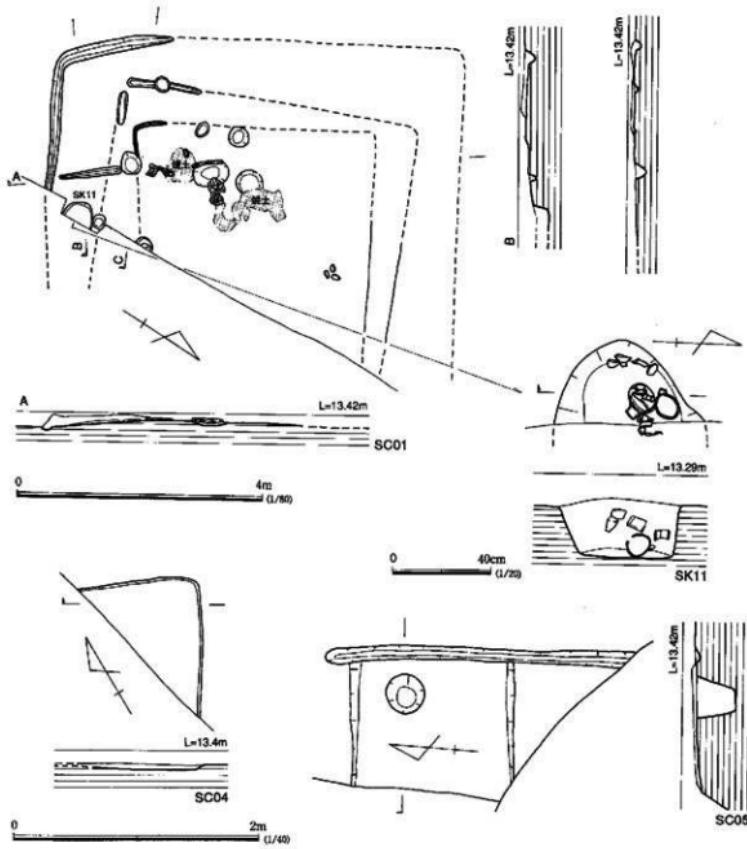


Fig. 8 住居跡SC01・04・05、土壙SK11実測図 (縮尺1/20・1/40・1/80)

SC02・03 (Fig. 9) 調査区東側の境界地に位置し、一部が地区外にかかっている。又、溝SD01に住居跡の西側を切られるため全体形はいびつな形状を示している。上面の削平は著しく、壁の遺存状態は悪い。2軒は切り合い関係にあり、建て替えと考えられるが、遺存状態が悪いため前後関係は不明であった。覆土内の中央よりには炭化物が分布していた。

SC02の規模は南北方向の最大径が約5.3mを測る。周壁の高さは16~32cm残っていた。住居跡の中央には隅丸長方形を呈した土壙SP110が存在する。長さ70cm、深さ15cmを測り、両小口には各々1箇所の柱穴が存在する。この柱穴は松菊里型の住居跡に特徴的な楕円柱と考えられる。柱穴の直径は30cm、深さ50cmを測る。主柱は規模・深さからP 1~P 4の柱穴が相当するものと考えられる。炉跡・

焼土は不明である。

SC03は周壁の一部を残しているにすぎないが、SC02と重複する範囲において環状に配置された柱穴群が存在し、しかもこれらの柱穴は、SC03の周壁もしくは周壁の復元線に沿って存在することからSC03に所属する柱穴群と考えることが可能である。よって、この住居跡は最大径約6.0mの規模を測るもので、多数の柱穴の存在から数回に亘る建て替えが行われたものと推定できる。

住居跡の中央に位置するSP66は、この住居跡に伴う土壤と考えられ、平面形は隅丸長方形を呈し、長さ90cm、深さ42cmを測る。この土壤もSC02に伴う土壤SP110と同じく、両側の小口付近に各々1箇所の柱穴が存在する。この柱穴も松葉里型の住居跡の棟持柱と考えられる。主柱は重複状況から5本以上で構成されることが推測される。

遺物は、覆土から突帯文土器片、弥生前期壺形土器片、投弾、打製石器等が出土した。

以上のことから、これらの住居跡は松葉里型住居跡に特徴的な棟持柱を有し、しかも突帯文土器片、弥生前期の土器片が出土していることから古相の時期を示すものと考えられる。又、主柱の数が古相から新相に従って増加する傾向が有るといわれているところから、SC03はSC02より後出する時期の住居跡であろう。

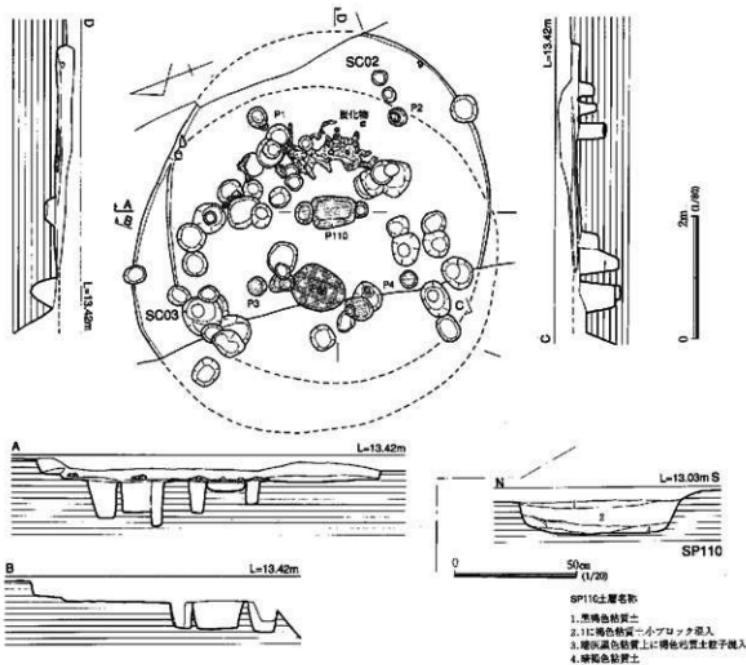
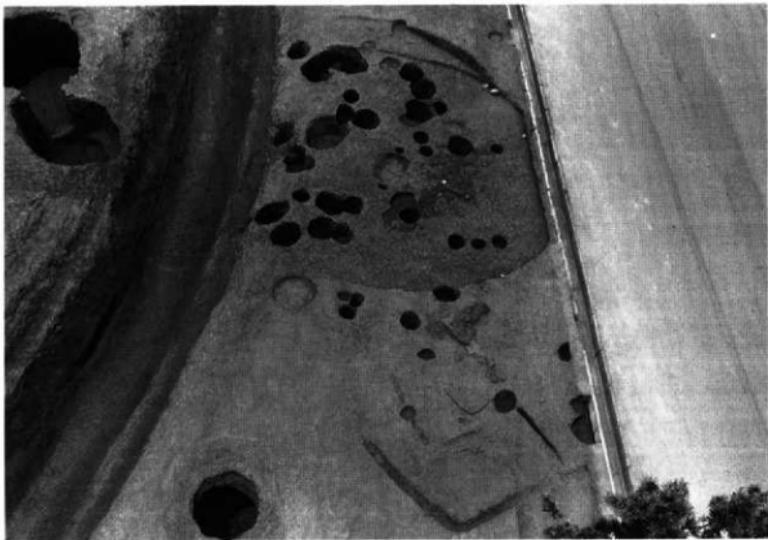
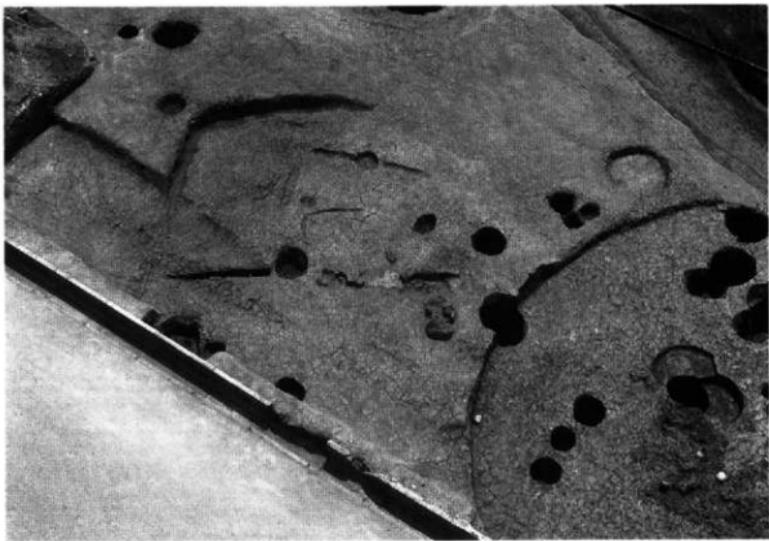


Fig. 9 住居跡SC02・SC03実測図 (縮尺1/20・1/80)



住居跡SC01-03（南から）



住居跡SC01（北東から）

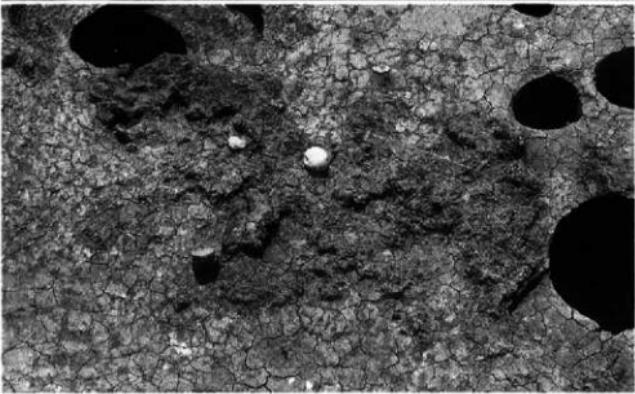
土壙SK11（西から）

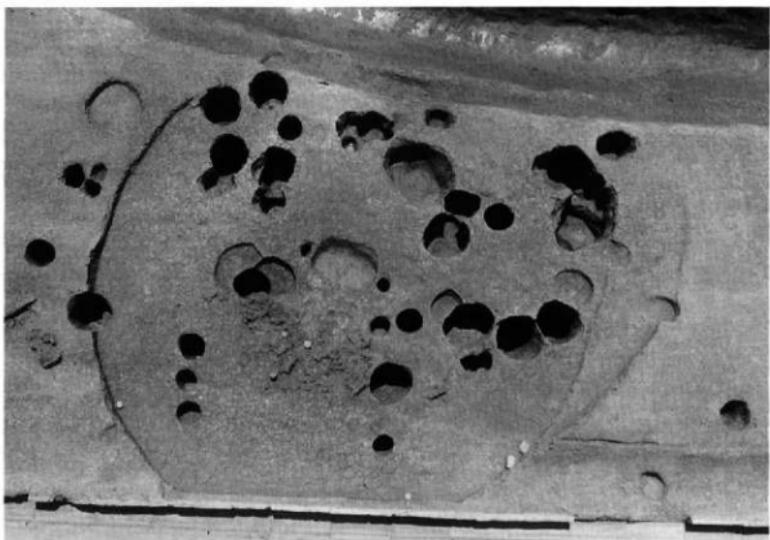


土壙SK11遺物出土状態（南から）



住居跡SC02内炭化物出土状態（東から）





住居跡SC02・03（東から）



上 住居跡SC02内土壤SP110（西から）

左 住居跡SC02内土壤SP110（西から）

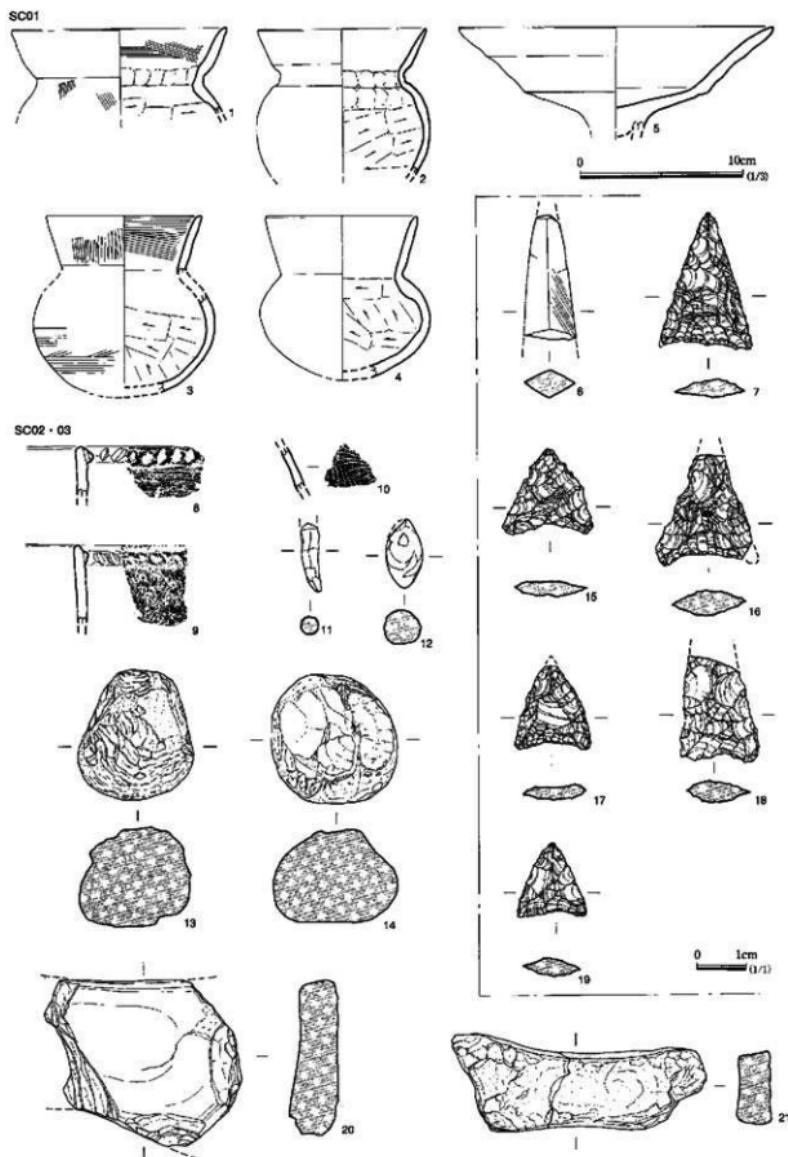


Fig.10 住居跡SC01～03出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）

SC04 (Fig. 8) 調査区北西側の境界地に位置するため一部を検出するにとどまった。又、著しい削平を受けている。全体形は不明であるが、平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。現存長は110cmを測る。壁は垂直に近い傾斜をもち、現存高は4cmである。周溝は存在しない。

SC05 (Fig. 8) 調査区東側の境界地で検出した。溝SD01に切られ、削平が著しく遺存状態は悪い。全体形は不明であるが、南北方向に周溝が遺存している。平面形は、隅丸長方形を呈するものと考えられ、且つ、内壁に沿ってベッドを有するものと考えられる。規模は東壁の現存長2.5m、幅1.2m、周溝の幅12cm、深さ3cm、ベッドの幅134cm、高さ3cmである。柱穴は検出できなかった。

覆土は黒色粘質土である。覆土からは古墳時代の土師器片が出土した。

Tab. 1 第78次調査住居跡一覧表

遺構名	平面形	計測値			柱穴 有無	火災痕跡 有無	位 置	出 土 遺 物	時代	備 考	
		現存長	現存幅	壁高さ							
SC01	隅丸 長方形	540+*	540+*	16	○	×	○	中央部南寄りに押 跡	弥生土器、丹後土器、土師器高杯・壺・小壺・小型 丸底壺・壺、瓦石・石斧・石錐、黒曜石製石器	古墳	コの字型ベット。高さ 4cm。床に火化物残る
SC02	円形	復原径 530		15-32	○	×	○	中央部に土塙	表白式土器、弥生土器・壺・丹後土器、土師器、白磁、 土製品、瓦石、瓦石、石斧、黒曜石製石器	弥生	SC01に削平される 東側の床に火化物残る
SC03	円形	復原径 600	-	-	○	×	○	中央部に土塙	表白式土器、弥生土器・壺・丹後土器、土師器、白磁、 土製品、瓦石、瓦石、石斧、玄武岩片、黒曜石製石器	弥生	SC02と重複する
SC04	隅丸 長方形	110+*	540+*	4	×	×	×		縄文土器、弥生土器、土師器、黒曜石		西側境界地
SC05	隅丸 長方形	250+*	540+*	-	×	×	×		土師器	古墳	ベットを有する 東側境界地

(2) 住居跡出土遺物 (Fig.10)

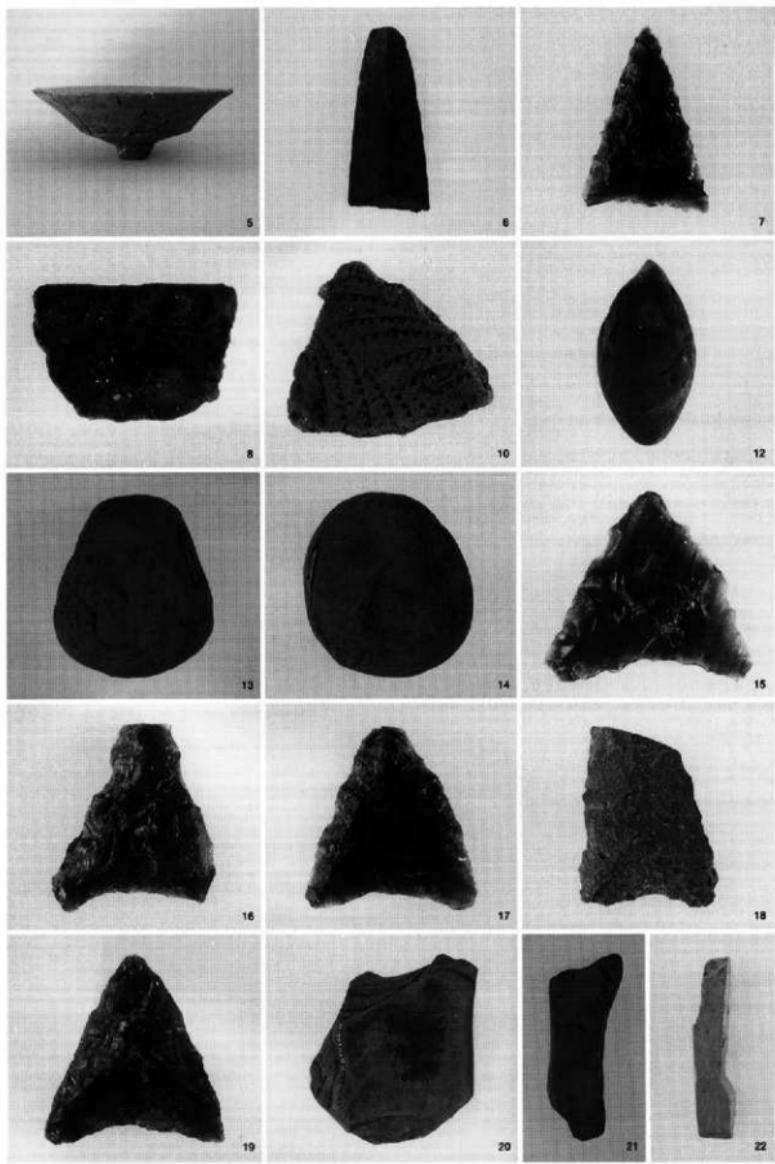
SC01出土遺物 (1~7) 1~5は、土師器で、3~5は出入口の土塙SK11から出土した。1は二重口縁壺、2~4は小型丸底壺、5は高杯の壺部である。1の壺口縁部は内湾する。体部外面はケテハケ、内面はヘラケグリ調整である。山陰系の土器である。2~4の壺の体部は、球体を呈し、内面の調整は、2がヘラケグリ調整である。5の高杯は全体に磨滅しているが、外面はナデ調整である。底部と体部の境の後が強い。6~7は弥生時代の石器で、いずれも住居跡SC02・03からの流れ込みである。6は柳葉形の有柄磨製石器である。7は黒曜石製の打製石器である。

SC02・03出土遺物 (8~21) 8~9は、突堤文土器の壺で、口縁部外面に小さく低い刻目突帯を貼り付けている。10は、弥生土器の壺形土器の肩部片で、外面に貝殻痕跡を用いて重弧文を描いている。前期後半の時期である。11は、棒状の土製品で、用途は不明である。12は、投弾、15~19は、打製石器、13~14は、玄武岩製の敲石、20~21は、砥石である。



住居跡SC01出土遺物

*数字は、実測図の番号に一致する。



住居跡SC01~03出土遺物

*数字は、実測図の番号に一致する。
22はSC03出土。

(3) 土 壤 (SK)

調査区内を戦国時代の溝SD01が矩形に貫いているため、土壌の遺存状態は悪いが、合わせて4基を検出した。土壌は、全て褐色ローム層に掘り込まれている。出土遺物から弥生時代以降に属するものと思われる。

SK01 (Fig.12) 調査区西側に位置する。上面は著しい削平を受けて、遺存状態は悪い。上面の平面形は不整円形である。断面形は逆梯形状であるが、底面には起伏がある。最大長245cm、幅214cm、底面の最大径228cm、深さ13cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。

遺物は夜白式土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

SK09 (Fig.12) 上面は削平を受けており、且つ、溝SD02、樋SA01、掘立柱建物SB01・02と切り合った関係にある。上面の平面形は不整隅丸方形で、底面は不整円形を呈している。断面形は船底状で、壁は緩い傾斜で立ち上がる。最大長185cm、最大幅178cm、底面の最大径115cm、深さは31cmを測る。

覆土は黒灰色粘質土を主体としている。土壌の底面付近では土器が多く出土した。

遺物は弥生土器、土師器、高坏、須恵器高坏、壺、ガラス小玉が出土した。

SK13 (Fig.12) 調査区の南東側に位置する。上面は削平を受けている。且つ、土壌SK15を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、長さ110cm、幅100cm、深さ44cmを測る。断面形は逆梯形を呈している。掘立柱建物の柱穴掘方の可能性がある。覆土は黒褐色粘質土である。

遺物は夜白式土器、弥生土器等が出土した。

SK17 (Fig.12) 調査区の南東側に位置する。上面は著しい削平を受けており、且つ、土壌SK13に切られている。平面形は隅丸方形を呈し、断面形は逆梯形である。最大長126cm、幅123cm、深さ10cmを測る。土壌中央に、直径32cmを測るPitが存在するので、大型建物の柱穴の可能性がある。

覆土は黒褐色粘質土である。遺物の出土はない。

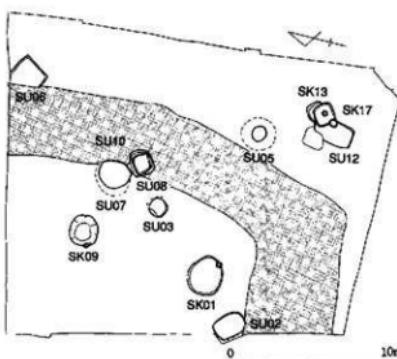


Fig.11 第78次調査 土壌・貯蔵穴配置図 (縮尺1/300)

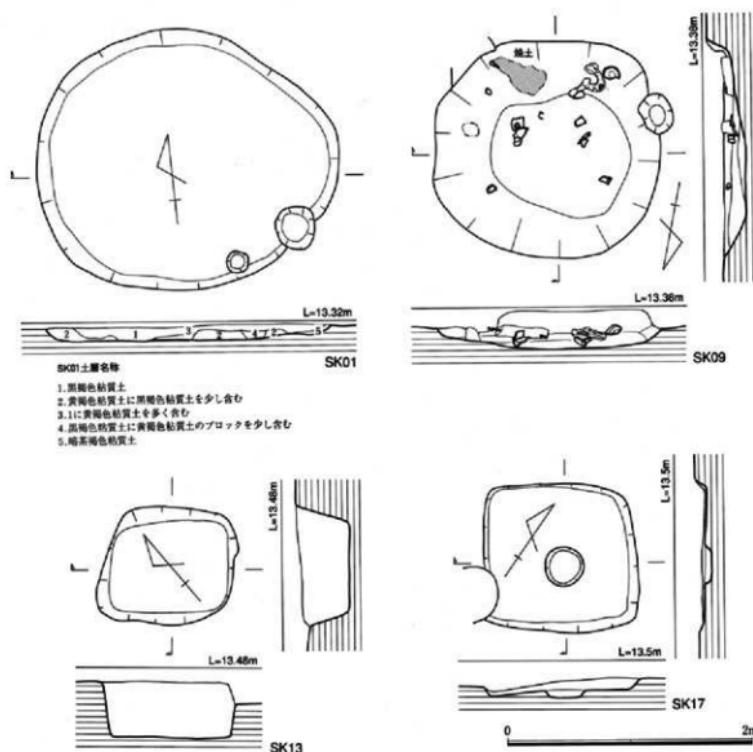
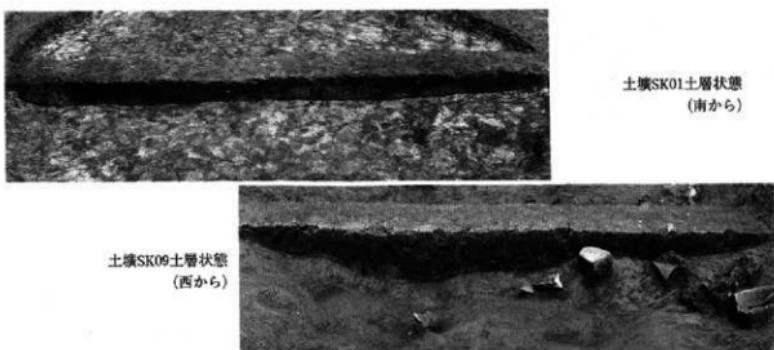
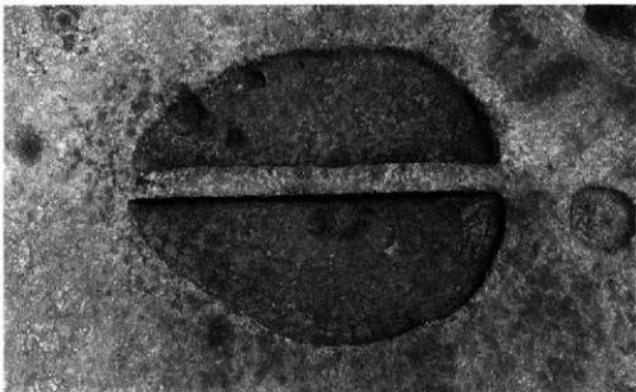


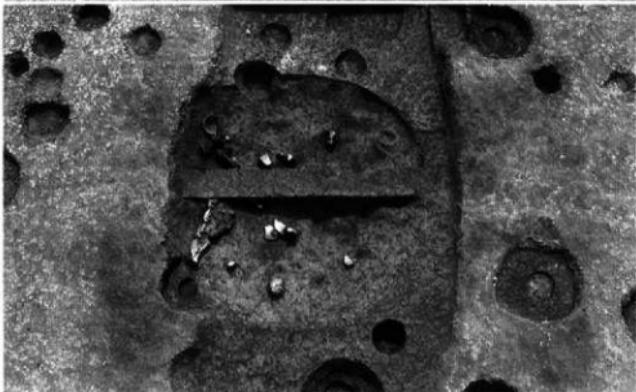
Fig.12 土壌SK01・09・13・17実測図（縮尺1/40）



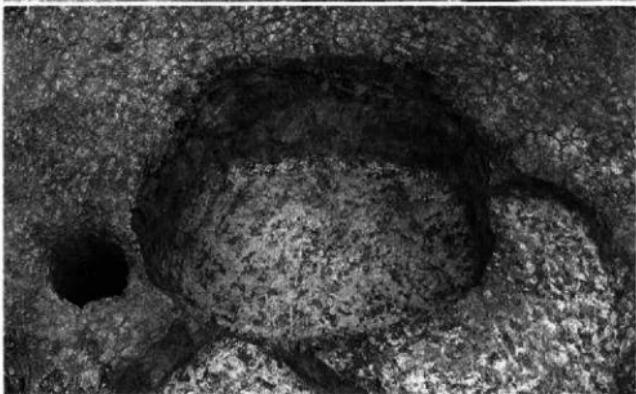
土壤SK1 (北から)

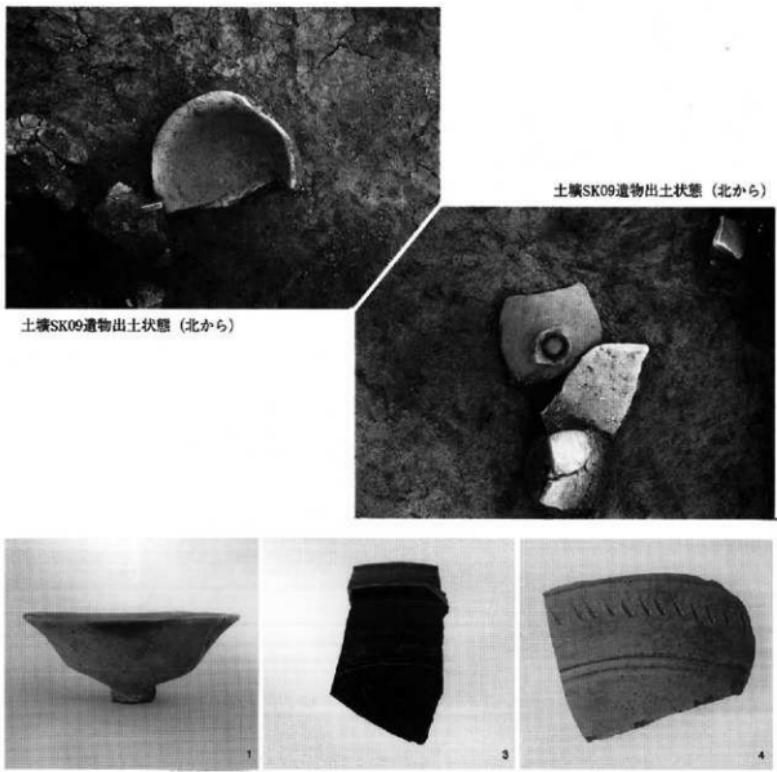


土壤SK2 (東から)



土壤SK3 (南西から)





*数字は、実測図の番号に一致する。

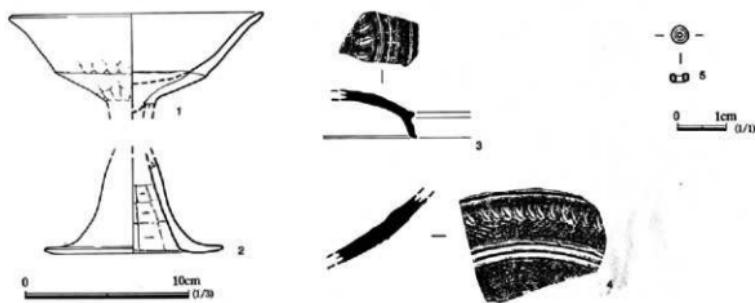


Fig. 13 土壤SK09出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）

(4) 土壙出土遺物 (Fig.13)

SK09出土遺物 (1~5) 1・2は土師器、3・4は須恵器である。1・2は高坏で、1は坏部、2は脚部である。坏は底部と体部の境の後が丸みを持っている。脚部は強く外反する。筒部内面はヘラケズリ調整である。3は坏蓋で、体部外面に沈線と刻み目を施している。4は器台の坏部片で、外面下位に3条の沈線を、上位には小さな突帯を施し、沈線と突帯の間に貝殻腹縁による斜めのヘラ刻みを施している。5はガラス小玉で、緑色である。

(5) 貯蔵穴 (SU)

戦国時代の溝SD01が貯蔵穴群の中央を貫いているため、遺存状態は悪いが、合わせて7基を検出した。貯蔵穴の平面形状には、長方形と不規則円形の2種類があり、全て褐色ローム層面に掘り込まれている。出土遺物から弥生時代前期に属するものと思われる。

SU02 (Fig.14) 調査区西南側に位置する。上面は削平を受けており、且つ、溝SD01に一部を切られているため、遺存状態は悪い。上面の平面形は隅丸長方形である。断面形はやや袋状を呈した梯形状で、底面は平坦である。上面は最大長185cm、幅137cmを、底面は最大径188cm、深さ29cmを測る。覆土は、黒灰色粘質土を主体としている。

遺物は、夜臼式土器壺・鉢・弥生土器鉢・壺・丹塗十器、打製石鋸、種子が出土している。

SU03 (Fig.14) 上面は削平を受けている。上面の平面形は不整隅丸方形で、底面も不整隅丸方形を呈している。断面形は、側壁の一部が袋状を呈した箱形である。最大長115cm、最大幅100cm、底面の最大長120cm、幅105cm、深さは87cmを測る。

覆土は、黒褐色粘質土を主体としている。土壤の底面付近では土器が多く出土した。

遺物は、弥生土器壺・丹塗土器、砥石、黒曜石等が出土した。

SU05 (Fig.15) 調査区の東南側に位置する。上面は削平を受けている。且つ、溝SD01に切られている。上面と底面の平面形は不整円形を、断面形は4段になったフラスク形を呈している。出入口の首部が狭く、内部が広くなる構造である。上面の直径は90cm、底面の直径は209cm、深さ145cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。

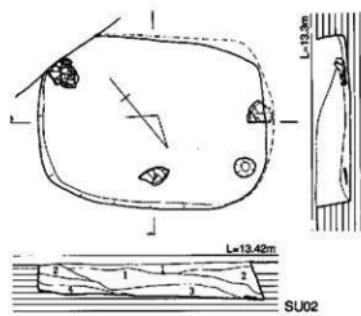
遺物は、夜臼式土器壺・弥生土器壺・壺・丹塗土器、紡錘車、投彈、石庖丁、磨製石斧、石錘、敲石、磨石、炭化米、炭化物、骨等が出土した。

SU06 (Fig.14) 調査区の北東側の境界地に位置するため全体形は不明である。上面は削平を受けて、且つ、溝SD01に半分程切られている。平面形は隅丸長方形を、断面形は逆梯形を呈し、底面は平坦である。最大長200cm、幅190cm、深さ64cmを測る。

覆土は、黄褐色粘質土及び、黒灰色粘質土を主体としている。

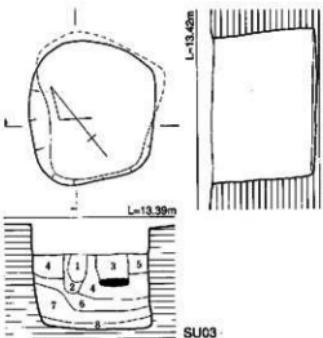
遺物は、夜臼式土器壺・弥生土器壺・高坏・黒曜石等が出土した。

SU07 (Fig.16) 調査区のほぼ中央に位置し、SU08と連結している。上面は削平を受けており、且つ、溝SD01とSD02に切られている。SD01は東側の上部を著しく削っている。上面と底面の平面形は不整円形を、断面形は袋状になった逆梯形を呈している。出入口の首部が狭く、内部は西側の壁が強く内傾するが、東側の壁はほぼ垂直にたちあがっている。上面の最大径は182cm、底面の最大径は240cm、深さ155cmを測る。土壤の南東部壁にSU08へ通じる連絡通路が設けられている。この通路

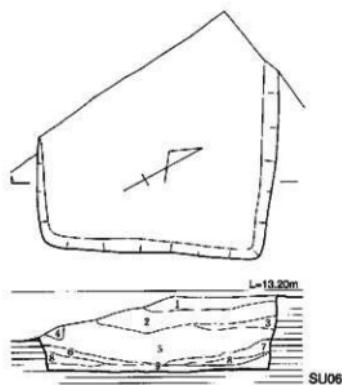


SU02土層名称

1. 黒灰色粘質土
2. やや赤色帶びた黒灰色粘質土に褐色粘質土ブロック少く含む
3. 黒色粘質土
4. 褐褐色粘質土に褐色粘質土ブロック多く含む

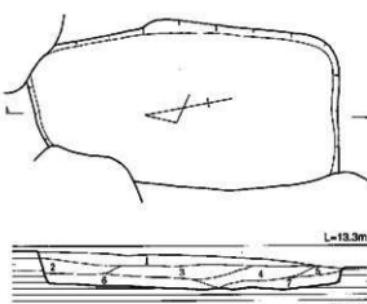


SU03



SU06土層名称

1. 黒褐色粘質土に褐灰色粘質土ブロック含む
2. 褐褐色粘質土に褐色粘質土ブロック多く含む
3. 黑色粘質土に褐色粘質土ブロック多く含む
4. 褐灰色粘質土
5. 褐灰色粘質土に褐色粘質土ブロック含む
6. 褐褐色粘質土
7. 4.5に黑色粘質土ブロック含む
8. 黑色粘質土に褐褐色粘質土ブロック含む
9. 褐褐色粘質土



SU12土層名称

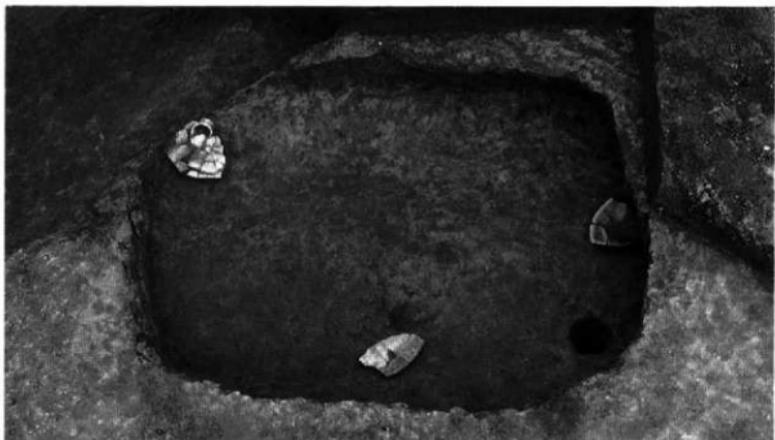
1. 黑色粘質土に褐色粘質土ブロック少しある
2. 褐褐色粘質土に褐色粘質土少しある
3. 褐褐色粘質土に褐色粘質土ブロック混入
4. 3.に褐色粘質土やや混入
5. 黑色粘質土に褐色粘質土ブロック混入
6. 褐褐色粘質土に褐色粘質土ブロック混入
7. 6より褐色粘質土のブロック多く含む
8. 7より多い

SU12土層名称

1. 褐褐色粘質土に褐色粘質土小ブロック含む
2. 1.に褐色粘質土小ブロック多く混入
3. 褐褐色粘質土に褐色粘質土小ブロック混入
4. 3.に褐色粘質土大ブロック混入
5. 5Km
6. 6.より褐色粘質土が強い
7. 6に限る

0 2m

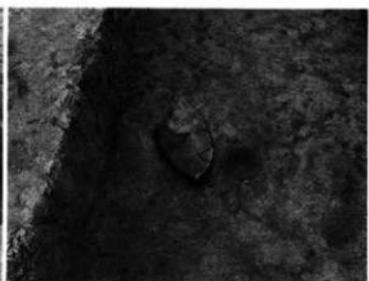
Fig.14 診査穴SU02・03・06・12実測図 (縮尺1/40)



貯蔵穴SU02（北東から）



貯蔵穴SU02土層状態（東から）



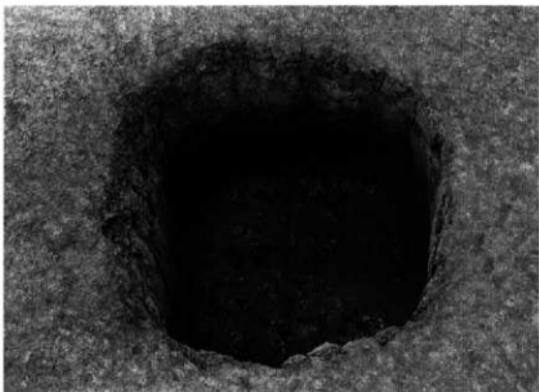
貯蔵穴SU02内遺物出土状態（北から）



貯蔵穴SU02内遺物出土状態（南東から）



貯蔵穴SU02内遺物出土状態（南西から）



貯藏穴SU03（南から）



貯藏穴SU05（南から）



貯藏穴SU06（北から）

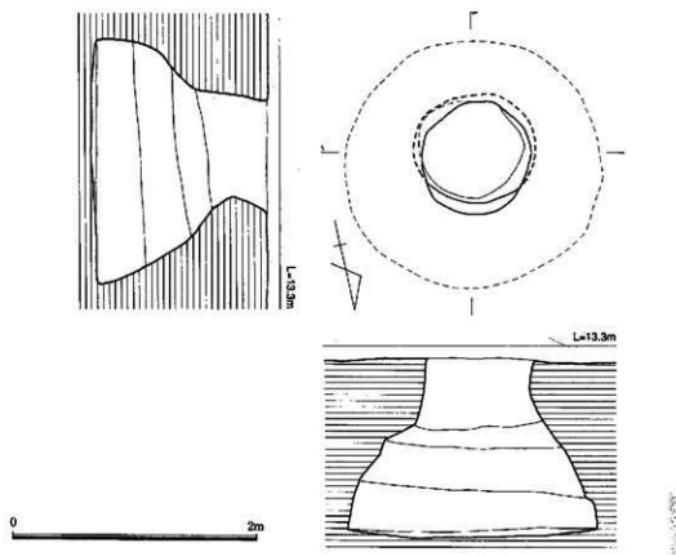


Fig.15 貯藏穴SU05実測図（縮尺1/40）

は幅68cm、深さ83cmを測る。

覆土は黒灰色粘質土、及び黄褐色粘質土である。

遺物は、夜臼式土器壺・鉢、弥生土器壺・鉢・壺・丹塗土器、磨製石斧、打製石鎌等が出土した。
SU08 (Fig.16) 調査区のほぼ中央に位置し、SU07と連結している。上面は削平を受けており、且つ、溝SD01に切られている。SD01は東側の上部を著しく削っている。上部の平面形は不整隅丸長方形を、底面は不整方形を呈している。断面形は、下位の東側が2段になった逆梯形で、底面は平坦である。

上面の最大長165cm、最大幅137cm、深さ137cmを測る。北側壁の中央にはSU07へ通じる入口が設けられている。連絡口の間口の大きさは、高さ66cm、幅55cmである。

覆土は、黒褐色粘質土、及び黄褐色粘質土を主体としている。

遺物は、夜臼式土器壺、弥生土器壺・鉢・壺・丹塗土器、石庖丁、磨製石斧、打製石鎌、磨石、砥石、黒曜石等が出土した。

SU10 (Fig.16) 貯藏穴SD07とSD08を連絡する通路状の土壤である。当初は切り合い関係が不明なため別個の造構としたが、発掘作業の過程で、SU07とSU08を接続する土壤と見做した。規模は、長さ68cm、幅40cm、深さ83cmを測る。

遺物は、弥生土器壺、黒曜石などが出土している。

SU12 (Fig.14) 調査区の東南側に位置する。上面は削平と搅乱を受けている。且つ、溝SD08と土壤SK13・17に切られている。上面と底面の平面形は隅丸長方形を、断面形は逆梯形を呈し、底面は平坦である。最大長255cm、幅135cm、底面の最大長249cm、深さ30cmを測る。覆土は黒褐色粘質土を主体としている。

遺物は、弥生土器、黒曜石等が出土した。

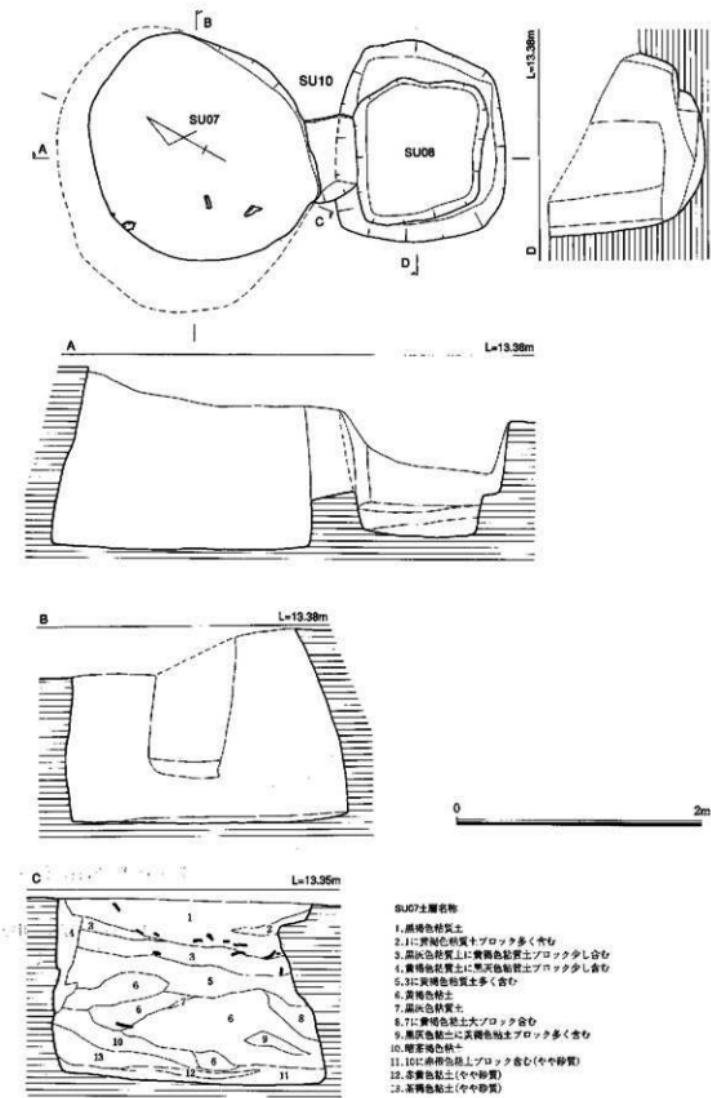


Fig.16 貯藏穴SU07・08実測図 (縮尺1/40)



貯蔵穴SU07・08（北東から）



貯蔵穴SU07土層状態
(北から)



貯蔵穴SU08遺物出土状態
(南西から)



貯蔵穴SU08遺物出土状態
(北東から)



貯蔵穴SU12 (西から)



貯蔵穴SU12土層状態 (西から)

(6) 貯蔵穴出土遺物 (Fig.17~24)

SU02出土遺物 (Fig.17-1~10) 1~5は突帯文系土器で、甕である。6・7は弥生土器で、6は壺、7は鉢である。2~5の口縁部外面には小さい刻目突帯を貼り付けている。1は復原高18.7cmを測る。口縁部突帯が小さく、磨滅しているが、刻目を施す。体部内外面は磨滅している。底部は厚みを持ており、端部は張り出す。7の口縁部は、緩やかに外反するが、口縁部に刻目がない。外面下位に煤が付着している。内面はナブ調整で、底部に条痕がある。6の口縁部は、緩やかに外反しているが、頸部との境には強い段をもたず、沈線状の区画線を施す。8~10は、黒曜石製の打製石器である。8・10は未製品で、10は剥片鐵である。

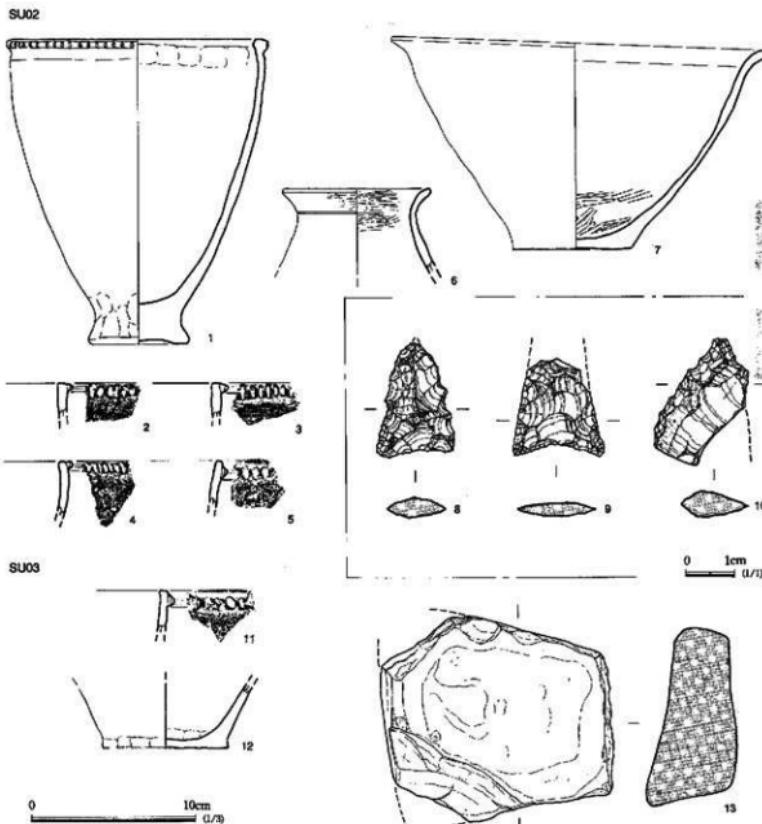
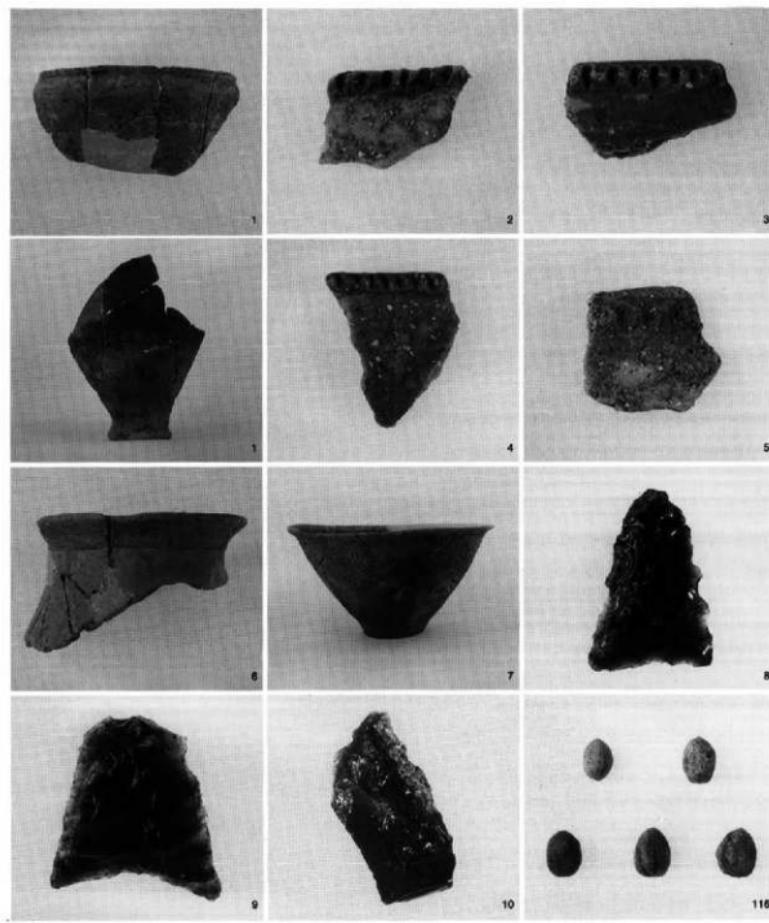


Fig.17 貯蔵穴SU02・03出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3)



貯蔵穴SU02出土遺物

*数字は、実測図の番号に一致する
116は、SU02出土の種子

SU03出土遺物 (Fig.17-11~13) 11は突帯文系土器で、刻目突帯を有している。12は弥生土器の底部である。13は砂岩製の砥石である。

SU05出土遺物 (Fig.18-14~30, Fig.19-31~46) 14・18は突帯文系土器で、14は壺、18は鉢である。15~17・19~30は弥生土器で、15~17・19~22は壺、23~30は臺である。14の口縁端部外側には小さい刻目突帯を貼り付けている。18は上げ底である。15~17の口縁部は外反するが、17の屈折は強い。口縁端部には刻み目がない。19の底部は高く、上げ底である。15・16・19・21・22の外側はタテ

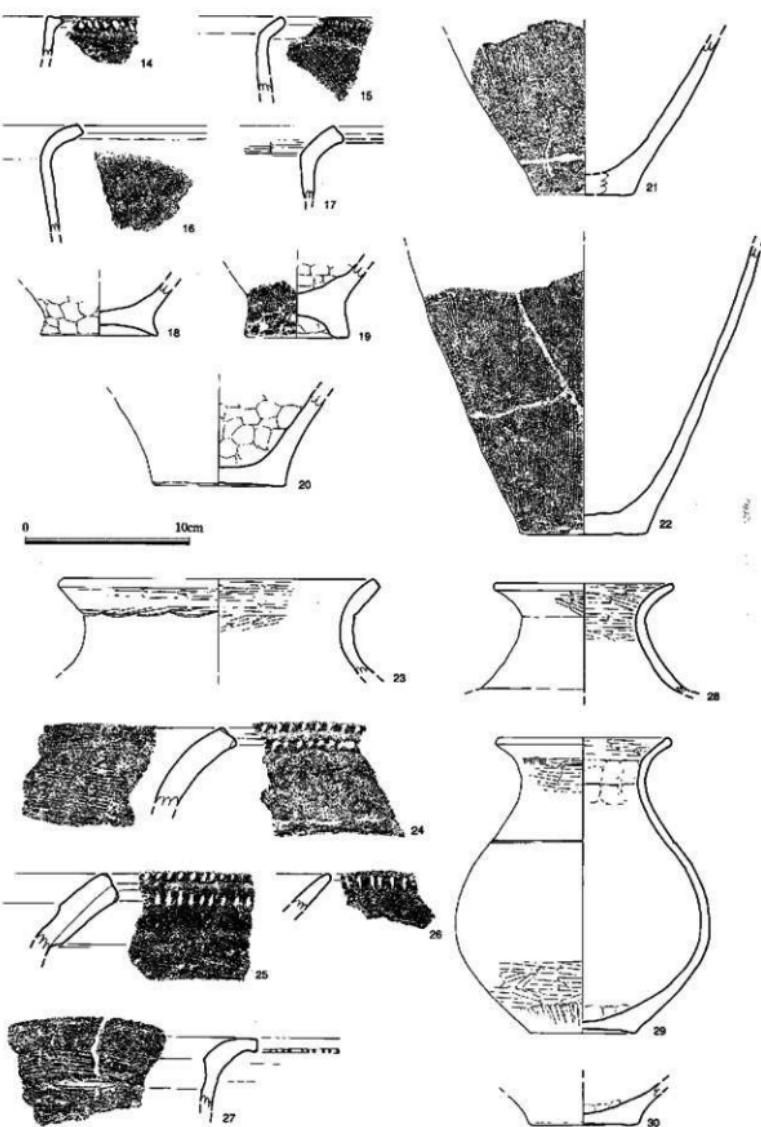
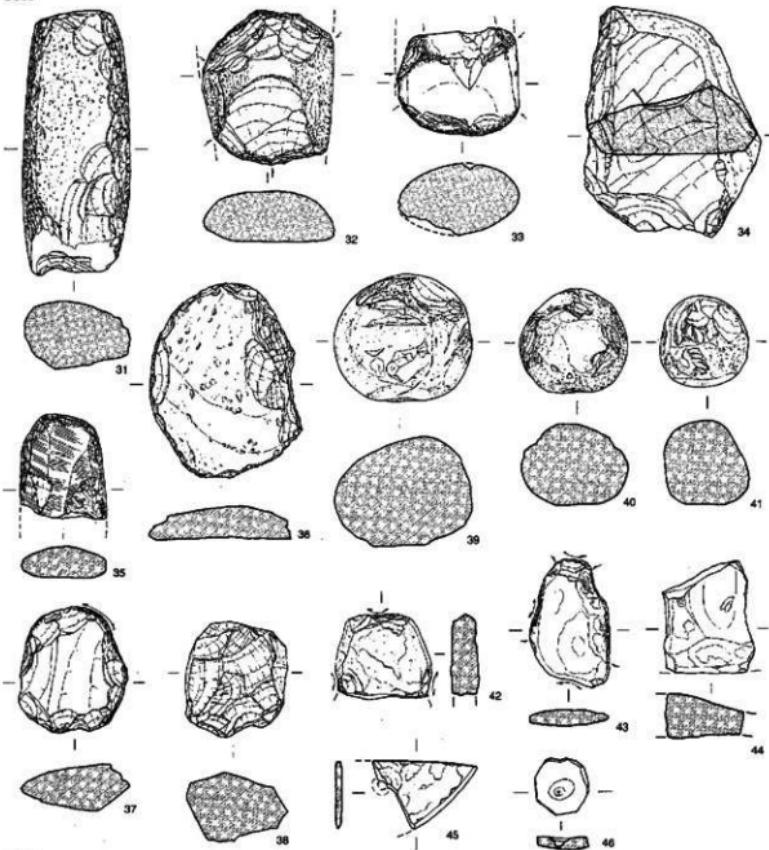
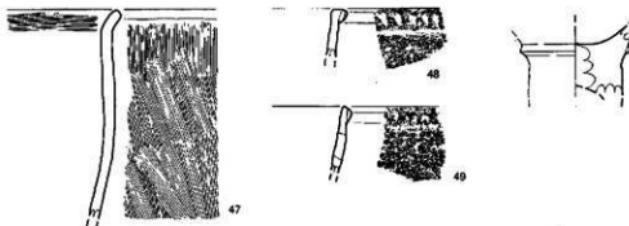


Fig.18 贮藏穴SU05出土遺物実面図 (縮尺1/3)

SU05

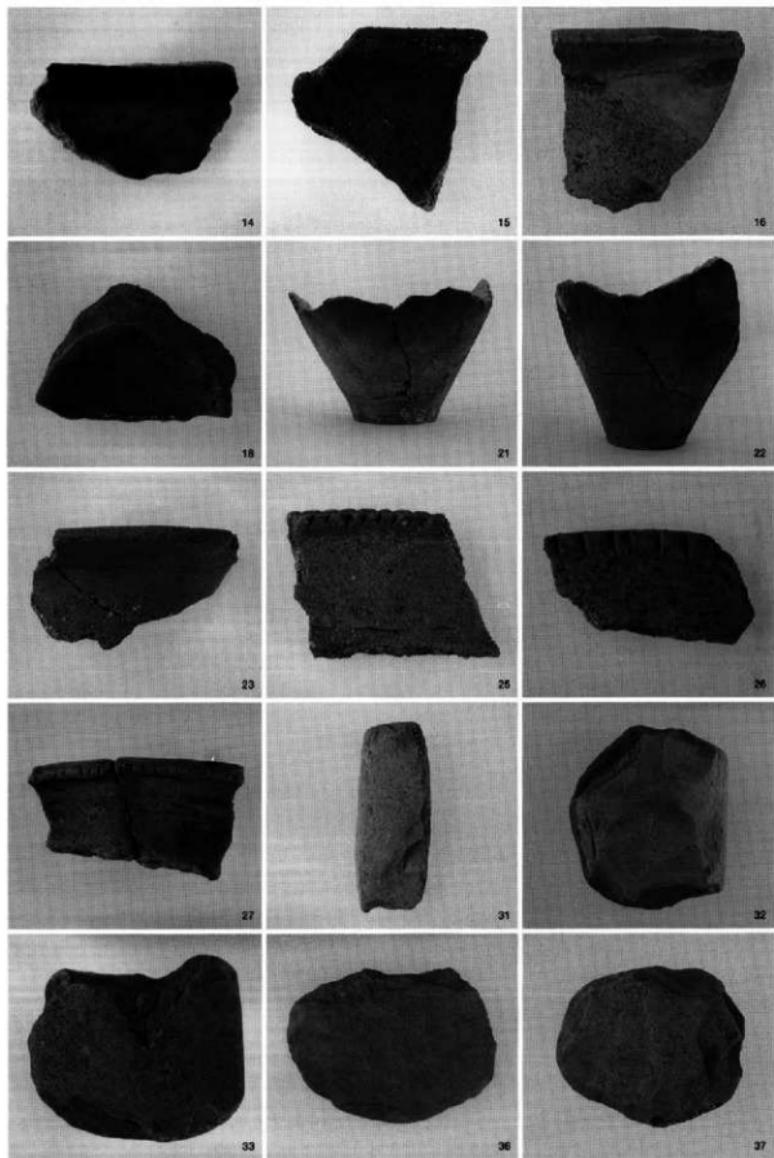


SU06



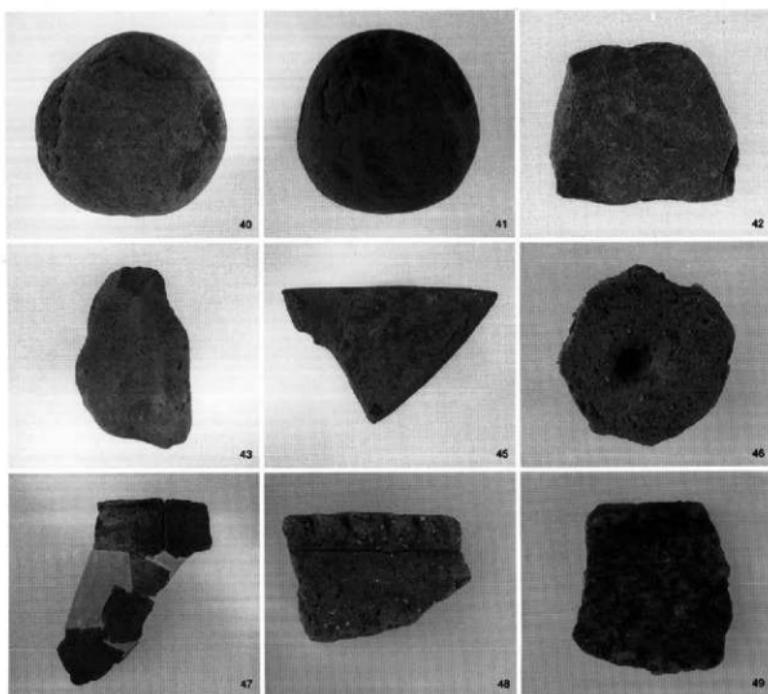
0 10cm

Fig. 19 贯藏穴SU05・06出土遺物実測図 (縮尺1/3)



貯蔵穴SC05出土遺物

*数字は、実測図の番号に一致する。



貯藏穴SU05～06出土遺物

*数字は、実測図の番号に一致する。

ハケ調整で、17の口縁部内面はヨコハケ調整、体部内面はナデ調整である。24～27は大型の壺で、25・27は外反した口縁部の内側に粘土を張り付けて、肥厚させている。口縁端部に刻み目がある。23・28・29の口縁部は、如意形に外反しているが、23は口縁部外面を肥厚させて、頸部との間に段を形成する。29は頸部との境に段がなく、緩やかに外反する。又、頸部と胴部の境には強い段をもたず、沈線を1条施す。頸部外面の一部にタテハケ痕がある。

31～45は石製品である。31～36は石斧で、玄武岩製である。32・33は破損品を再加工途中である。33は敲石に転用している。31・32・34～36は石斧未製品であるが、34は縦長削片の一側刃を打製加工、36は横長削片の縁刃を打製加工している。37～41は敲石で、玄武岩をもちいている。42・43は玄武岩製の石錘、45は石庖丁、44は砥石である。46は土製品で、不整円形に加工し、裏側からの穿孔途中である。

SU06出土遺物 (Fig.19-47～50) 48・49は突帯文系土器の壺である。47は弥生土器の壺である。

48・49の口縁端部外面には低く、小さい刻目突帯を貼り付けている。47の口縁部は緩やかに小さく外反する。内面はナデ調整で、外面にはタテハケ調整痕がある。

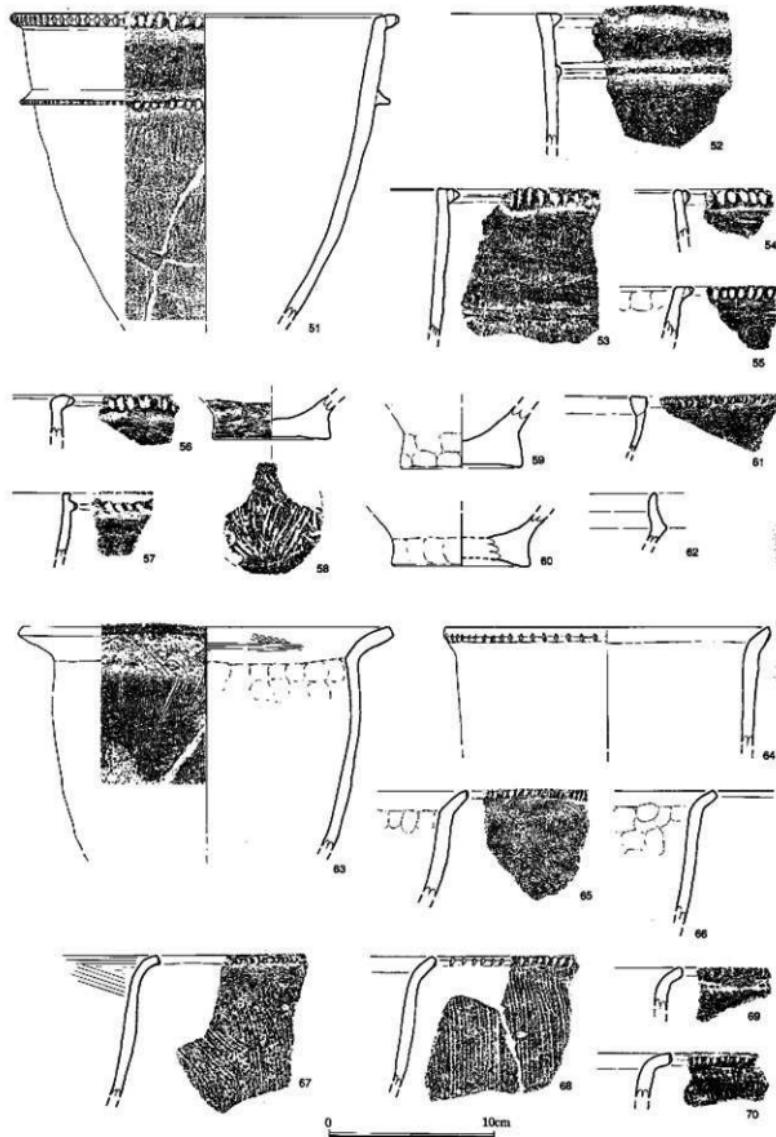


Fig.20 贮藏穴SU07出土遺物実測図① (縮尺1/3)

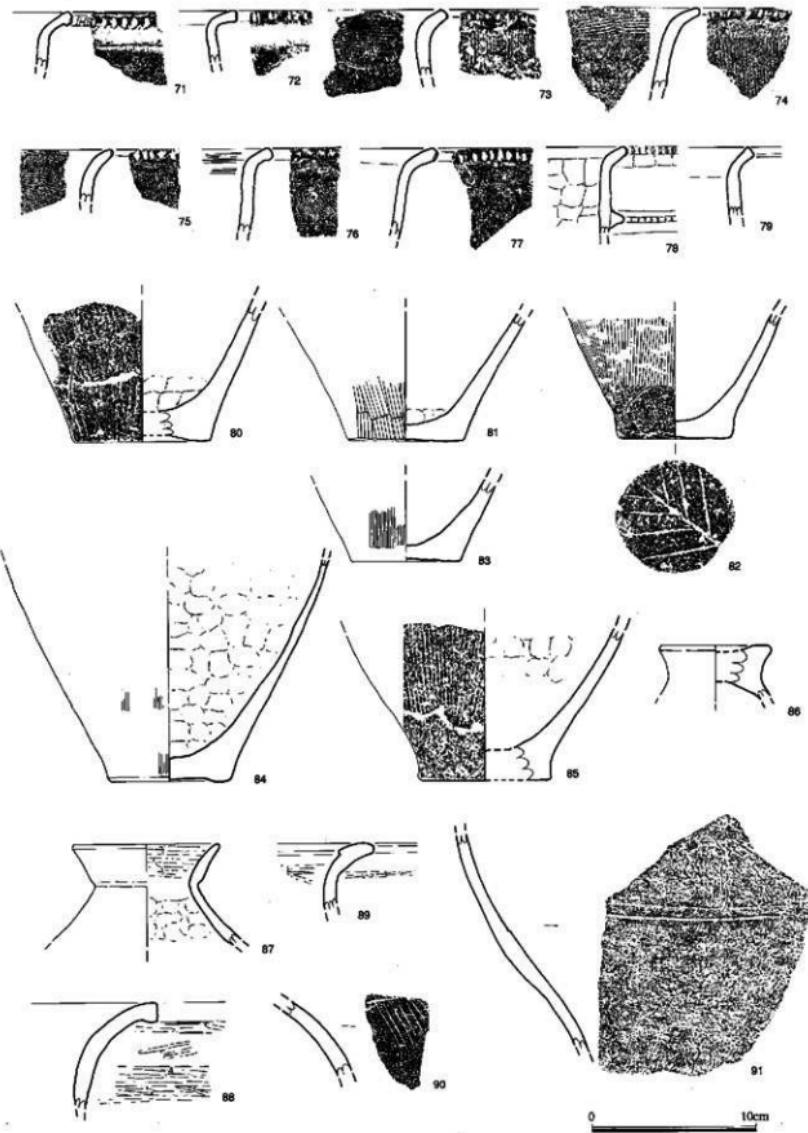
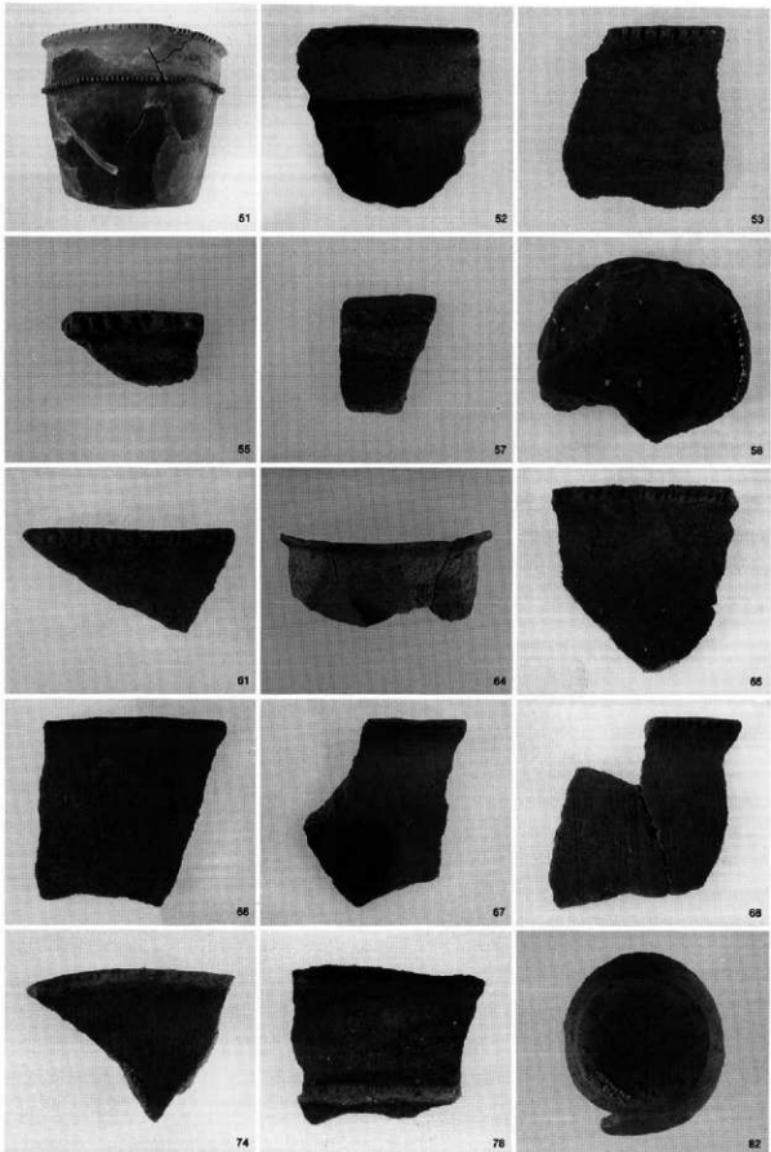
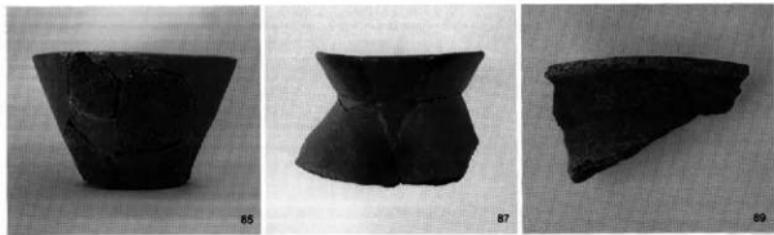


Fig.21 記載穴SU07出土遺物実測図② (縮尺1/3)



貯蔵穴SU07出土遺物①

*数字は、実測図の番号に一致する。



貯藏穴SU07出土遺物②

※数字は、実測図の番号に一致する。

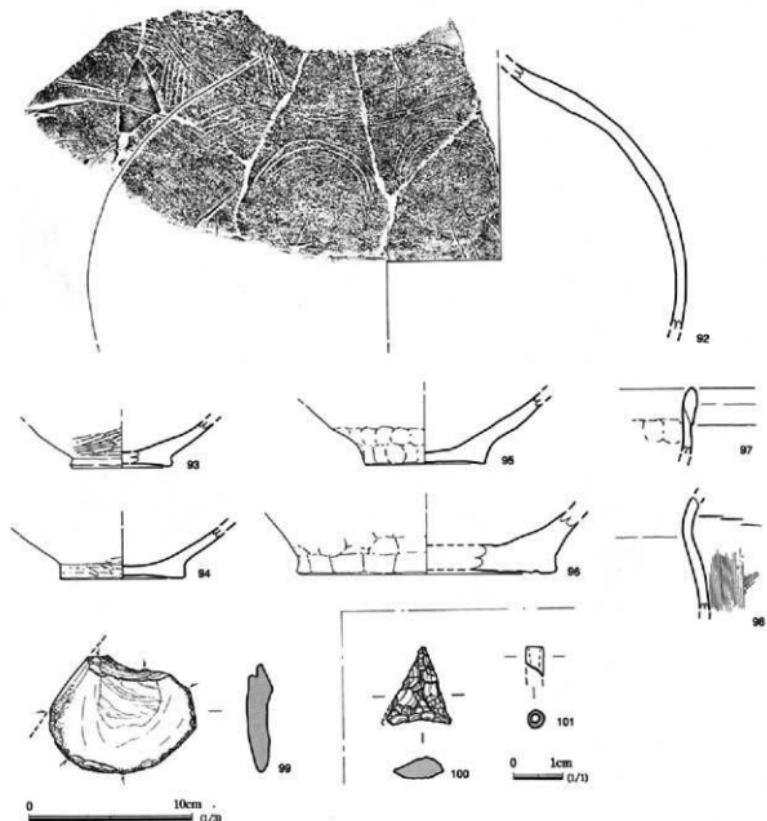
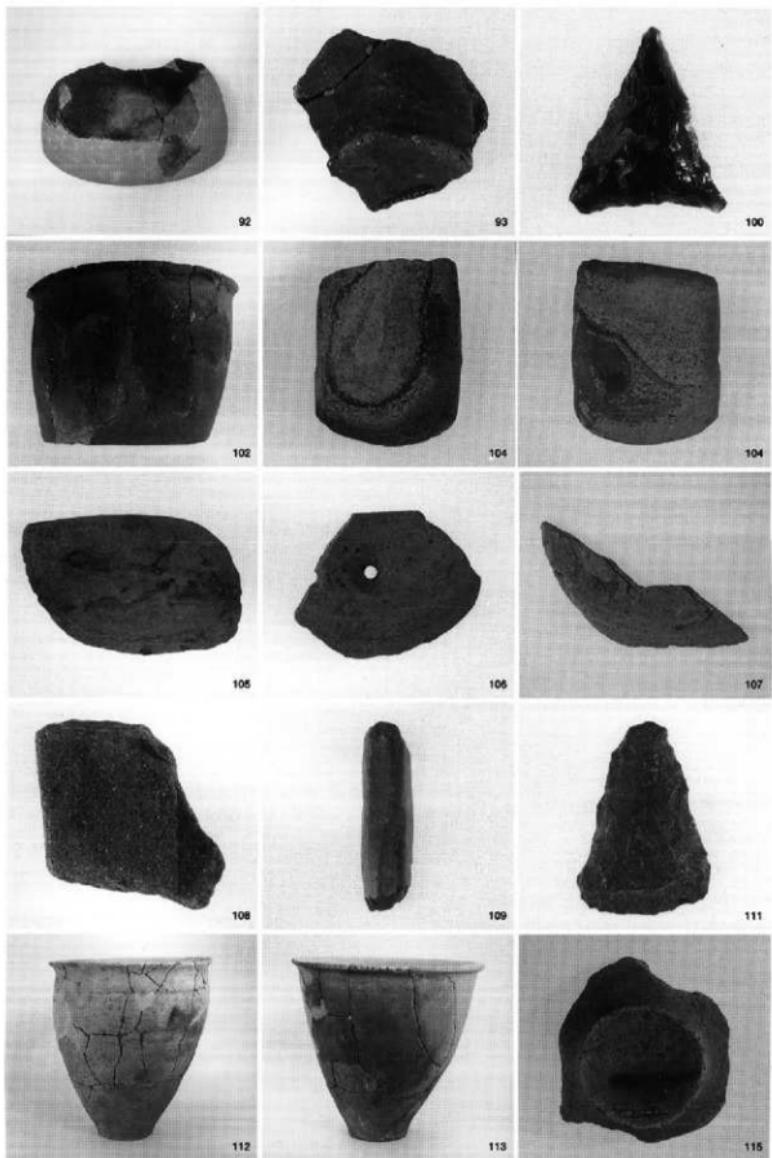


Fig.22 貯藏穴SU07出土遺物実測図③ (縮尺1/1・1/3)



貯蔵穴SU07・08・10出土遺物

*数字は、実測図の番号に一致する。

SU07出土遺物 (Fig.20-51~70, Fig.21-71~91, Fig.22-92~101) 51~62は、突帯文系土器で、51~60は壺、61・62は鉢である。53~57の口縁部外面には刻目突帯を張り付けている。51・52は、胴部外面上位に刻目突帯を有している。52の口縁部は、断面形が三角形状を呈している。51・56の突帯は、非常に発達して、逆くの字状を呈している。51・52の外面にはタテハケ調整がみられる。61は直口縁の鉢で、外面端部を肥厚させて、刻み目を施す。

63~96は弥生土器で、63~85は壺、87~96は壺、86は蓋である。壺の口縁部は、くの字状に外反するものと如意形に緩く外反するものの2種類がある。63~65、67~78は口縁部に刻み目を付けているが、66・79には刻み目が無い。外面はタテハケ調整で、口縁部の内側はヨコハケ調整である。82の外底部には木ノ葉の圧痕がある。87は前期前半の小型壺で、口縁部は強く外反し、且つ、外面を肥厚させているため頸部との境には強い段をもつ。90~92は、前期前半の大型壺で、91は頸部と胴部の境に沈線状の区画線を施す。90・92は胴部が球体を呈し、頸部との境にはヘラ描きの沈線を施し、頸部と胴部上位にはヘラ描き文様がある。92は重弧文と複線山形文の組み合わせである。93・94の外面には

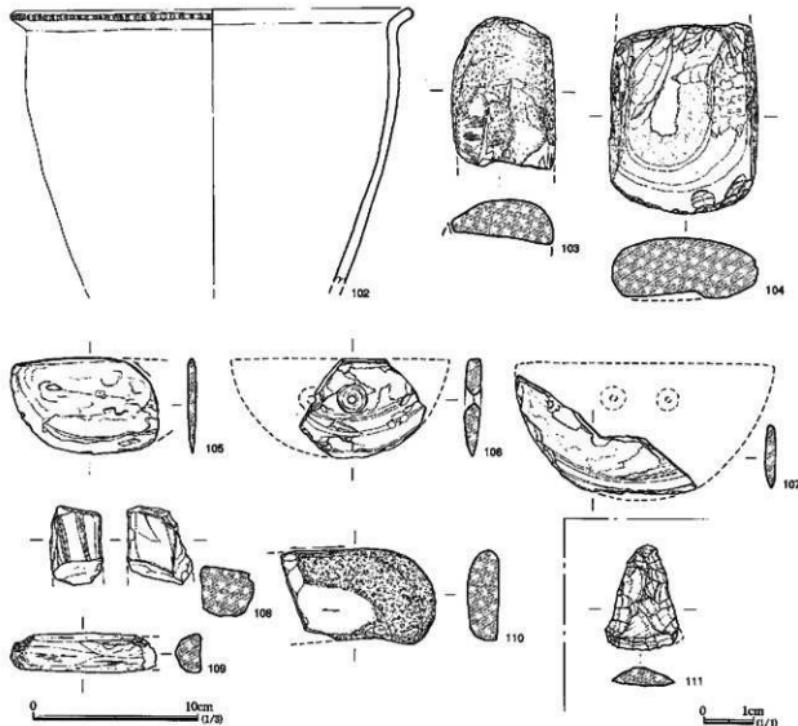


Fig.23 貯藏穴SU07出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3)

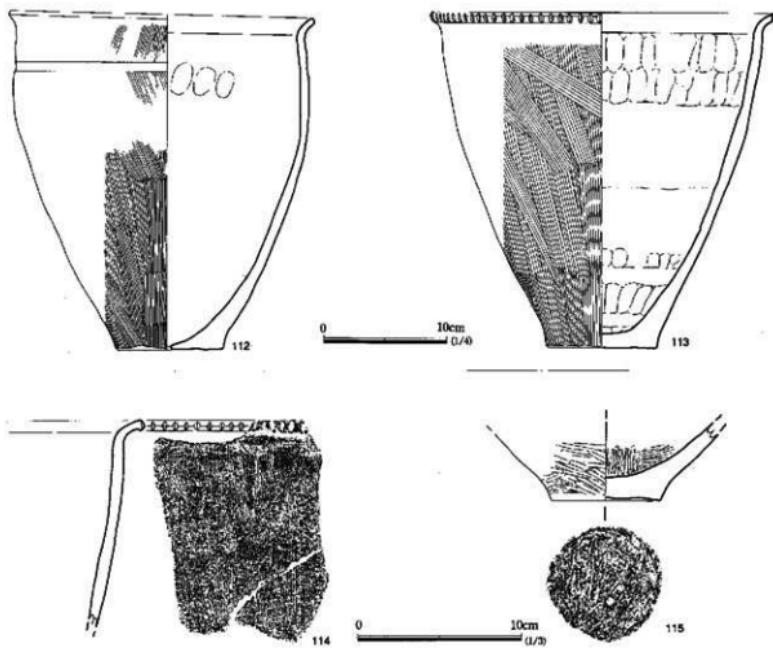


Fig.24 貯藏穴SU10出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/4)

丁寧なハラミガキ調整がみられる。88は広口壺と考えられる。89は中期初頭の壺で、口縁部の内面を肥厚させている。外面はハラミガキ調整である。97は無文土器で、口縁部は折り返して形成している。99～100は石製品で、100は黒曜石製の打製石鎌である。99は磨製石斧の破片を再加工途中である。101は碧玉製の管玉である。

SU08出土遺物 (Fig.23-102~111) 102は、弥生土器の壺で、くの字状の口縁部である。端部に刻み目を施す。103-111は石製品で、103・104は磨製石斧で、103の表面は磨減が著しい。103の縁辺には、再加工痕がある。105~107は右庵丁、108~110は砥石である。111は黒曜石製の打製石鎌で、未製品であろう。

SU10出土遺物 (Fig.24-112~115) 112~114は、弥生土器の壺で、口縁部は如意形を呈している。113・114の口縁端部には刻み目を施す。112の口縁端部には刻み目がなく、又、腹部上位に沈線がある。外面はタテハケ調整である。115は鉢の底部で、丁寧なハラミガキ調整を施す。



土壤墓SX14（北から）



土壤墓SX15（東から）



土壤墓SX15遺物出土状態（東から）

土壤墓SX16（南から）



(7) 土壙墓 (SX)

平安時代から鎌倉時代までの土壙墓を3基を検出した。溝SD01～04に切られるため、遺存状態は悪い。第77次調査で検出した土壙墓の分布状況等からこの周辺に中世墓が集中していたことが推測できる。

SX04 (Fig.26) 長軸方向を大略東西方向にとっている。上部は、浅い溝に削平されているため波を打っている。墓壙の平面形は隅丸長方形、断面形は逆梯形を呈している。底は東側が高くなっている。現存長120cm、幅73cm、内底の長さ90cm、深さ45cmを測る。

遺物は、いずれも細片であるが、覆土から中国青磁の碗・皿の破片が出土している。

SX15 (Fig.26) 長軸方向を大略南北方向にとる。土壙墓の平面形は、梢円形に近い不整の隅丸長方形、底面は不整の隅丸長方形を呈している。断面形は逆梯形であるが、墓壙の小口壁と側壁の一部が二段掘りになっているので、棺蓋の位置を示すものかもしれない。墓壙の長さ130cm、幅58cm、底面の長さ90cm、深さ70cmを測る。

遺物は、土師器坏2点が墓壙中位から出土した。

SX16 (Fig.26) 境界地に位置するため墓壙の全体形は不明である。長軸方向を大略東西方向にとっている。上面の平面形は隅丸長方形、底面はやや不整の長方形を呈している。断面形は逆梯形を呈し、長さ101cm、幅45cmを測る。

遺物の出土はない。

(8) 土壙墓出土遺物 (Fig.27)

SX04出土遺物 (1・2) 1・2は中国青磁皿の破片である。2は同安窯系で、内面に櫛描文と片切彫りの雲文を施す。

SX15出土遺物 (3～5) 3・4は糸切り底の土師器の坏で、体部は丸みをもつ。3の外底部には板状圧痕が見られる。5は須恵器で器台、又は高坏の破片である。外面に竹管状の刺突文を施す。

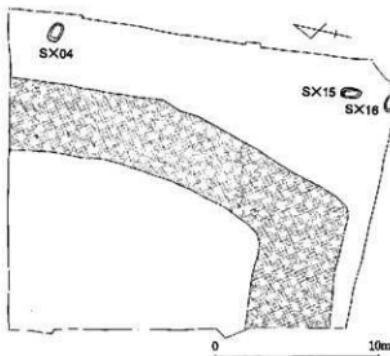


Fig.25 第78次調査土壙墓配置図（縮尺1/300）

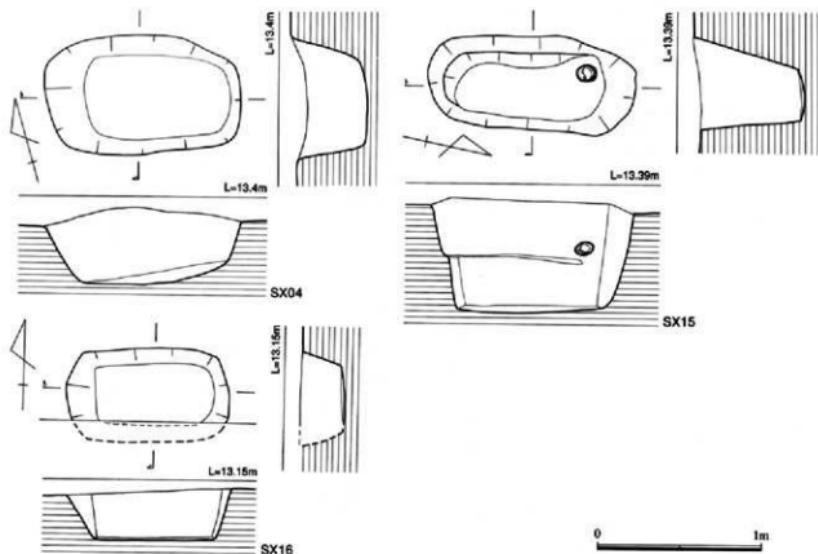


Fig.26 土壇墓SX04・15・16実測図（縮尺1/30）

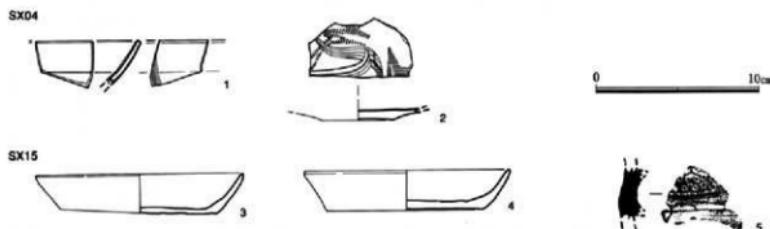


Fig.27 土壇墓SX04・15出土遺物実測図（縮尺1/3）



土壇墓SX04・15出土遺物実測図

*数字は、実測図の番号に一致する

(9) 掘立柱建物 (SB)

調査区の北側において東西方向の掘立柱建物2棟、及び柵1条を検出した。いずれも溝SD02に切られている。柱穴はいずれもローム層に掘り込まれている。

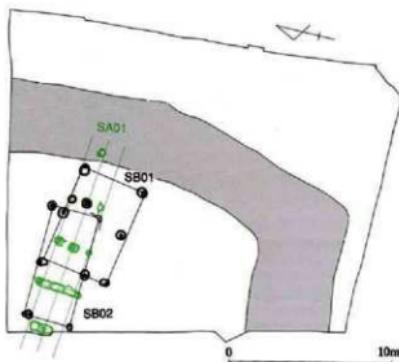


Fig.28 第78次調査 掘立柱建物、柵配置図（縮尺1/300）

SB01 (Fig.29) 上面は削平を受けており、また、柵SA01、溝SD02、土壌SK09、貯蔵穴SU07と切り合っている。溝SD02には切られてる。東西方向の建物で、柵SA01、溝SD02と主軸方向がほぼ一致している。梁行1間、桁行2間の規模を有し、梁間は395cm (13尺) で、桁間616cm、桁間平均は308cm (10.1尺) を測る。北西側の柱穴掘方は削平を受け、柱根のみ遺存している。掘方の平面形は隅丸方形又は、梢円形を呈し、径40cm~65cmを、柱根径は23cmを測る。

遺物は縄文土器が出土している。

SB02 (Fig.29) 上面は削平を受けており、また、柵SA01、溝SD02、土壌09と切り合っている。溝SD02には切られている。SB01との先後関係は不明である。東西方向の建物で、柵SA01、溝SD02と主軸方向がほぼ一致している。梁行1間、桁行2間の規模を有し、梁間は283cm (9.3尺) で、桁間680cm、

Tab. 2 第78次調査 掘立柱建物一覧表

遺跡名	規 模	桁 行		梁 行		方 位	面積 (m ²)	柱 大 状 態						出 土 著 物	備 考
		実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			Pit数	深さ	長	幅	柱根径	柱根径		
SB01	1×2	616(20.5)	300(9.9) 316(10.4)	395(13.0)	395(13.0)	NNEW	24.33	6	29~47	56~65	49~60	23	縄文土器	SP15 SP27 SP29 SP30 が相当する	
SB02	1×2	680(22.4)	385(11.7) 325(10.7)	283(9.3)	283(9.3)	NNNW	19.34	6	28~48	45~60	43~50	17	熱水土器・丹波土器 土器器、灰窓器、黒曜石	SP 14 SP 24 SP 39 SP104 SP106 が相当する	

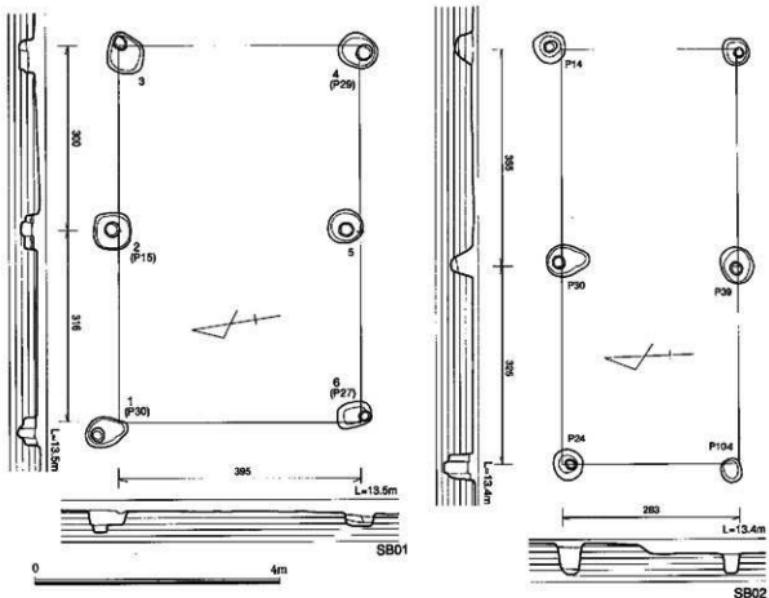


Fig.29 挖立柱建物SB01・02実測図（縮尺1/80）

*SB01の番号は任意である。

桁間平均は340cm(11.2尺)を測る。柱穴掘方の平面形は、梢円形を呈し、径40cm～60cmを、柱根径は17cmを測る。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器等が出土している。

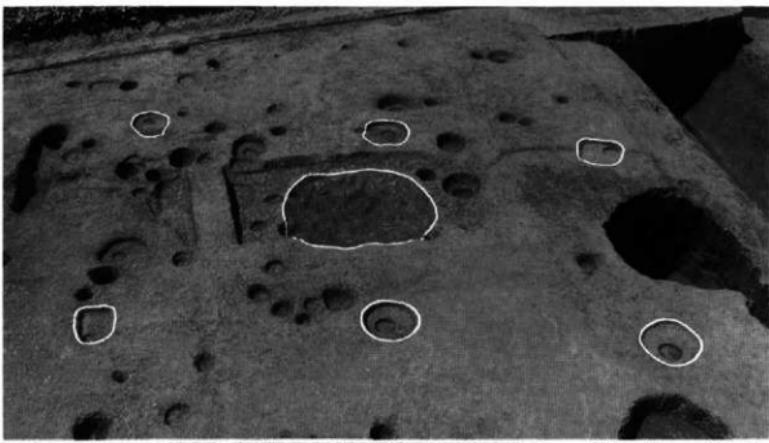
(10) 桁 (SA)

1条の樋を検出したが、上面を溝SD02に削平されているため、柱穴をきちんと把握できなかった。3本の柱穴で構成された樋の主軸方向は、東西方向である。溝SD03は樋柱穴の布振り塙である。

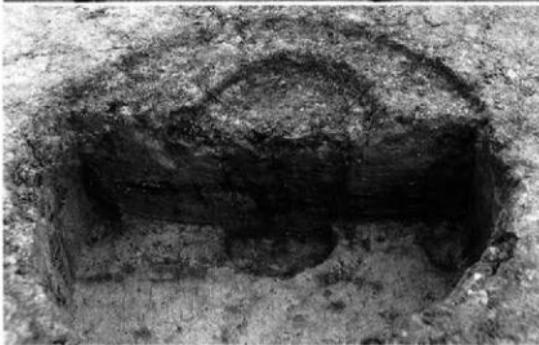
SA01 (Fig.30) 挖立柱建物SB01・02、溝SD02、土壤SK09、貯藏穴SU07と切り合っている。大略東西方向の樋で、主軸方位はN98°Eである。溝SD02に切られるため樋の南側は不明である。樋の柱穴道構は、削平と造構切り合いのため遺存状態が悪い。樋は、幅50～60cmの布振り塙を施したのち、主柱と2本の支柱で構成されるもので、6ヶ所の柱穴列を検出した。現状で把握できた樋の長さは11.8mを測る。主柱と支柱の間隔は約90cmで、各柱間の平均値は280cmである。柱穴掘り方は不整円形を呈している。柱穴径は45～58cm、柱根径は20～28cmである。

覆土は黒褐色粘質土、もしくは黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合土である。

遺物は、弥生土器、土師器、黒曜石等が出土している。



掘立柱建物SB01（南から）



SB01-P4(SP29)の土層状態
(北から)



SB01-P5の土層状態 (北から)

SB02-P24の土層状態（北から）



SB02-P39の土層状態（北から）



SB02-P104の土層状態（北から）



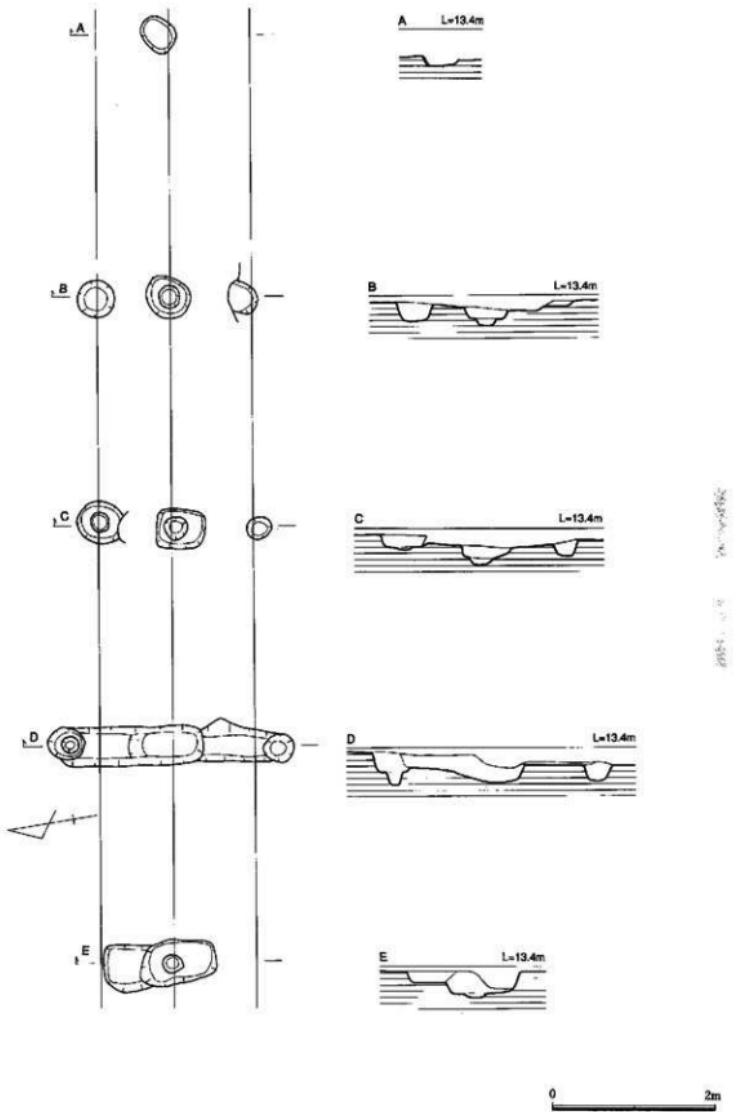


Fig.30 横SA01実測図 (縮尺1/60)

(11) 古代から近世の溝 (SD)

調査区においては東西方向、或いは南北方向に数条の溝が走っており、奈良時代から江戸時代までの溝7条を検出した。奈良～平安時代の溝1条、戦国時代の溝1条、江戸時代の溝3条、その他2条である。

戦国時代の溝は幅4～6mの規模をもち、濠としての要素が強い。江戸時代の溝は、浅く、矩形に溝が曲がっているところから屋敷区画、又は雨落ち溝を示す溝と考えられる。

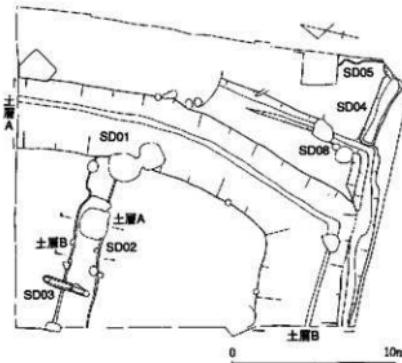


Fig.31 第78次調査 溝配置図 (縮尺1/300)

SD01 (Fig. 32) 調査区の中央に位置しており、長さ25.5mまでを確認した。大略南北方向から東西方向の矩形を呈した溝である。江戸時代の溝SD08が、この溝に沿うように切り合っている。溝底は北方向から西方向に下っている。南側コーナー部分の溝底には幅70cm、高さ33cmの障壁が存在する。

溝の断面形は箱型研削状であるが、北側の東壁では2段掘りに、西側の北壁では4段掘りになっており、西側の上部は逆梯形状を呈している。溝上面の幅は513cm、底面の幅は30cm、深さ225cmを測る。底面には湧水がある。

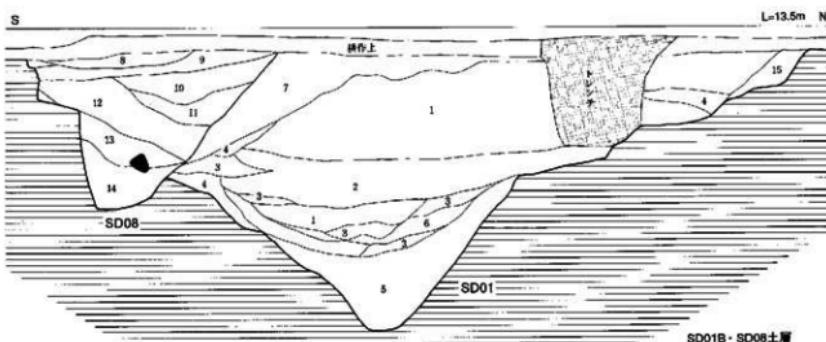
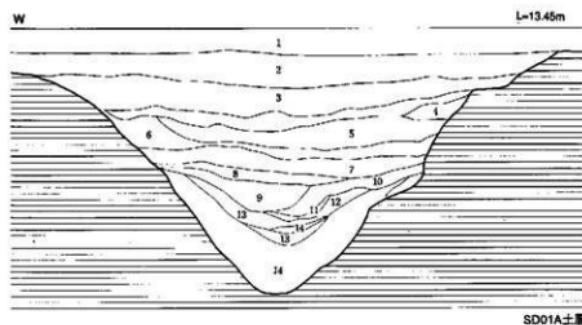
覆土は暗い褐色土、又は茶褐色土を主体としている。

遺物は、覆土から土師質土器、瓦質土器、東播系須恵器鉢、中国青磁・白磁・陶器・染付、備前焼鉢、瓦類、石塔、滑石製石鍋、鐵滓等が出でており、戦国時代の遺構と考えられる。

SD02 (Fig.33) 調査区の北寄りに位置しており、堀立柱建物SB01・02、櫛SA01、土壌SK09を切つておらず、溝SD01に切られる。西側境界地から直線的に東側に延びる溝で、東側は他の遺構に削平を受け消滅している。断面形は逆梯形状を呈し、上部の幅は一定していない。溝の長さ10.8m、上面の幅は200cm、底面の幅180cmを測る。溝の底は凸凹しており水の流れが有った事を示している。

覆土は黒褐色粘土を主体としている。

遺物は、覆土から繩文土器、弥生土器、土師器壺、須恵器、土師質土器、瓦器、瓦質土器鉢、中国青磁・白磁碗・陶器、瓦類、鐵製釘、鐵滓、ガラス製小玉、石器等が出でている。



SD01A土層名

1. 暗赤褐色粘土
2. イリヤや明るい
3. 暗赤褐色粘土に黄褐色粘土を少し、暗褐色粘土ブロック多く含む(炭化物含む)
4. 黄褐色粘土
5. 暗赤褐色粘土に黄褐色粘土を少し含む(炭化物少し含む)
6. 同じ(炭化物少し含む)
7. 同じ(炭化物少し含む)
7. 6に黄褐色粘土混入
8. 5に黄褐色粘土多く含む
9. 黄褐色粘土
10. 暗褐色粘土に黄褐色粘土多く含む
11. 暗褐色粘土(炭化物多く含む)
12. 茶褐色粘土
13. 暗褐色粘土
14. 黑灰褐色粘土

SD01B - SD08上層名

1. 暗赤褐色粘土に黄褐色粘土ブロック少し含む
2. 1に黄褐色土のブロック多く含む
3. 黄褐色粘土層上に暗赤褐色粘土含む
4. 黄褐色粘土層上に褐色砂質土含む
5. 暗赤褐色粘土
6. 5に黄褐色粘土ブロック少し含む
7. 1より新しい暗赤褐色粘土
8. 灰土
9. 黑灰褐色粘土
10. 黑灰褐色粘土(炭化物含む)
11. 黑灰褐色粘土(炭化物多く含む)
12. 黑灰褐色粘土と褐色粘土の混合土(堆、陶器含む)
13. 黄褐色粘土(ガラス含む)
14. 黑灰褐色粘土
15. 深褐色粘土

Fig.32 棚SD01上層断面実測図 (縮尺1/40)

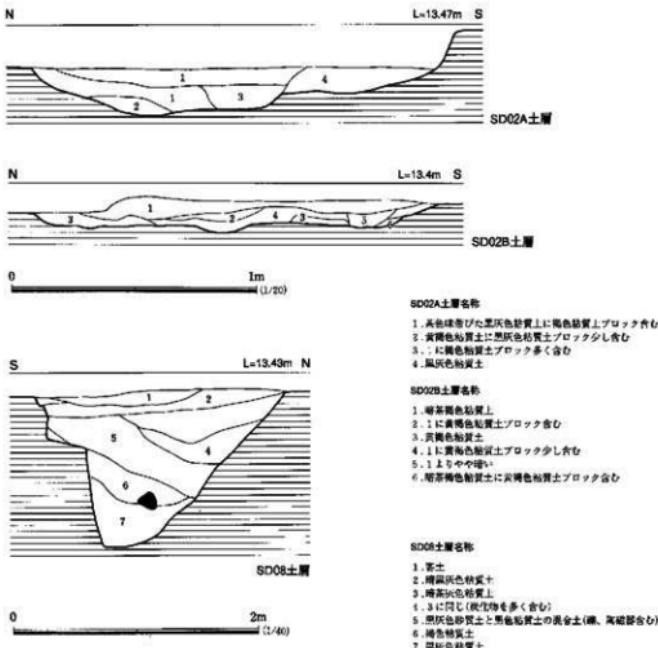


Fig.33 標SD02・08土層断面実測図（縮尺1/20・1/40）

SD03 (Fig.31) 調査区の北寄りに位置している。櫛SA01の布掘り擴を、当初は溝と見做していた。覆土から弥生土器高环・甕、土師器高环・甕、須恵器甕、瓦質土器鉢・火舍、陶器皿・碗、窯道具、染付皿・碗、石製品、土製品、鐵製品、炭化物等が出土している。

SD04 (Fig.31) 調査区の東南側に位置しており、大略東西方向の溝である。溝の西側はSD08とSD01に切られている。長さ430cmまで確認した。断面形は逆梯形、又は浅い舟底状を呈し、底面は東に向かって低くなる。溝上面の幅は100cm、底面の幅は68cm、最大の深さは47cmを測る。

覆土は暗褐色粘質土を主体としている。

遺物は、覆土から土師器壺、土師質土器培焰、七輪、須恵器壺・甕、瓦質土器鉢・火舎、中国青磁碗・白磁皿・陶器、国産陶器皿・碗・鉢・甕・染付皿・碗・瓦類、上製品、砥石・骨・炭化物等が出土している。江戸時代の構造と考えられる。

SD05 (Fig.31) 調査区の東側境界において南北方向の溝の一部を検出した。溝の規模・形状共に不明である。溝の長さは2.8mを確認した。幅は60cm以上である。覆土は暗褐色粘質土である。

覆上から土師器、土師質土器鉢・壺鉢、陶器、黒曜石等が出土している。江戸時代の遺構と考えられる。



溝SD01（南から）

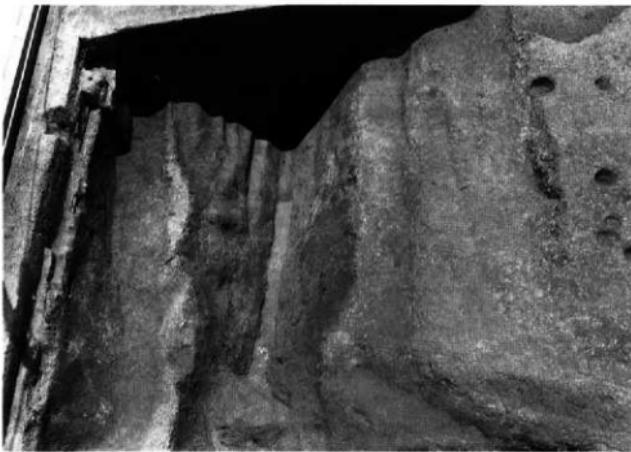


溝SD01北側部分（南から）



溝SD01陸橋部（西から）

溝SD01西側部分（東から）



溝SD01西壁土層状態（東から）

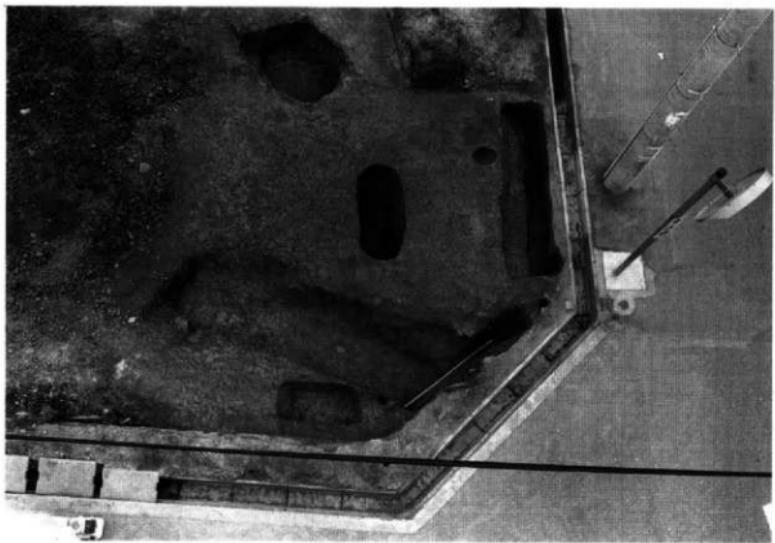


溝SD01北壁土層状態（南から）





溝SD02、掘立柱遺物SB01（東から）



溝SD04・05（南から）

溝SD05
(西から)



溝SD05
(西から)



SD08 (Fig.33) 調査区の南側に位置しており、大略南北方向から東西方向に曲がる矩形に曲がる溝である。溝SD01を切っている。溝は南北方向では北側に長さ10.8mのところで終わり、東西方向は西側境界地まで延び、長さ11.2mを測る。溝底は東から西方向に深くなる。断面形は逆梯形もしくは薬研堀状を呈し、溝上面の幅160cm、底面の幅30cm～70cm、最大の深さ130cmを測る。

覆土は暗褐色粘質土、又は暗灰色粘質土を主体としている。

遺物は、覆土から繩文土器片、弥生土器高坏・甕・須恵器甕・坏・坏蓋、土師器甕、土師質土器鉢・七輪・焰焰、瓦質土器甕・鉢・摺鉢・火舍・鍋、中国青磁・白磁、李朝陶器、国産陶器、磁器等が出土している。江戸時代の溝と考えられる。

(12) 溝出土遺物 (Fig.34~41)

SD01 (Fig.34-1~24) 出土遺物を上・下の2層に分離した。1・5・7~10・19・22は上層出土。

1は土師器の坏で、口径11cmを測る。2~4・7は中国製で、2・3は白磁碗、4は青磁皿である。5・6は李朝陶器の皿、7は染付皿である。8は瓦質土器の鉢で、外面はタテハケ調整である。9は瓦質土器の摺鉢で、下し目は4本単位である。10は方形壇で、谷部は丁寧なナデ調整を行っている。焼しは施されていない。

その他に上層からは、弥生土器、繩の羽口片等がある。

11~13・15~17・23は溝の下層から出土した。11は土師器の皿、12は東播系須恵器の鉢、14は備前焼のV期摺鉢である。13・15~17は須恵器で、13は横瓶、他は壺である。

18~24は石製品で、18は石鍋、19は石臼、20は砥石、21は石塔宝輪の一部である。22・23は打製石鎌で、22はサヌカイト、23は黒曜石である。24は黒曜石製のスクレイバーである。

SD02出土遺物 (Fig.35-25~40) 25~28は須恵器で、25は坏蓋、26・28は坏身、27は皿で、26・28の外底部には低い高台が貼り付く。30は、飯壼用の鉢蓋である。31は中国白磁の碗、32は瓦質土器の摺鉢で、下ろし目は8本単位である。34は土師質土器の把手付き鍋で、把手の外面には型押しの鋸歯文がある。33は陶器の瓶である。

38・39は石製品で、38は砾岩製磨石斧の未製品、39は黒曜石製の打製石鎌である。40はガラス小玉で、淡緑色を呈する。35は平瓦、36は方形壇、37は丸瓦である。37の谷部には粗目の布目痕がある。焼しは甘い。

SD03出土遺物 (Fig.36-41~48) 41は弥生土器で、上げ底の底部である。42~44は上師器で、42・43は高坏、44は盤の把手である。45は瓦質土器の摺鉢である。46は伊万里焼の皿で、蛇ノ目凹型底部である。外底部の中央部を円形に削り取っている。48は玄武岩製の敲石である。

SD04出土遺物 (Fig.36-49~59) 49は中国青磁碗、50は国産陶器の灯明皿、51は伊万里焼の皿である。52~54は瓦質土器で、52・54は火舎、53は壺である。52の外面は黒灰色に焼されている。55は土製品で、紡錘車と考えられるが、穿孔が完了していない。56は平瓦で、谷・背部共にナデ調整である。

57~59は石製品で、57は砥石、58は磨製石斧、59は黒曜石製の打製石鎌である。

SD05出土遺物 (Fig.36-60) 60は土師質土器の鉢で、口縁端部に沈線がある。内面はヨコハケ調整、外面はナデ調整の後に上位にはヨコハケ調整、下位にはタテハケ調整を施す。

SD08出土遺物 (Fig.37-61~66、Fig.38-67~84、Fig.39-85~91、Fig.40-92~103、Fig.41-104~110) 61・62は弥生土器の底部である。63~66は須恵器で、63は坏蓋、64は坏身、65・66は壺である。75~80は国産陶磁器で、伊万里焼である。67~74は中国製で、67・72は龍泉窯系の碗、70は同安窯系の皿である。73・74の内底見込みには目痕があるので、越州窯系の碗であろう。68は李朝の碗である。83・84は瓦質土器で、83は足鍋、84は直口縁の壺である。84の体部内面には、青海波の叩き痕が、底面にはヨコハケ調整が施される。81・82は土師質土器の鉢である。85~89は国産陶器の摺鉢で、85・88・89は高台を有している。90は瓶で、内外面共に緑灰色と黒褐色の釉を施し、外底部まで施釉している。外面の肩部に黒褐色を呈した釉垂れがみられる。

91~95は瓦類で、91・92は丸瓦、93は軒平瓦（平瓦部は棟瓦）、94は平瓦、95は軒丸瓦である。91は谷部に布目痕、背部に粗目の格子目叩き痕がある。須恵質の焼成である。93の軒平瓦の轍区には瓦

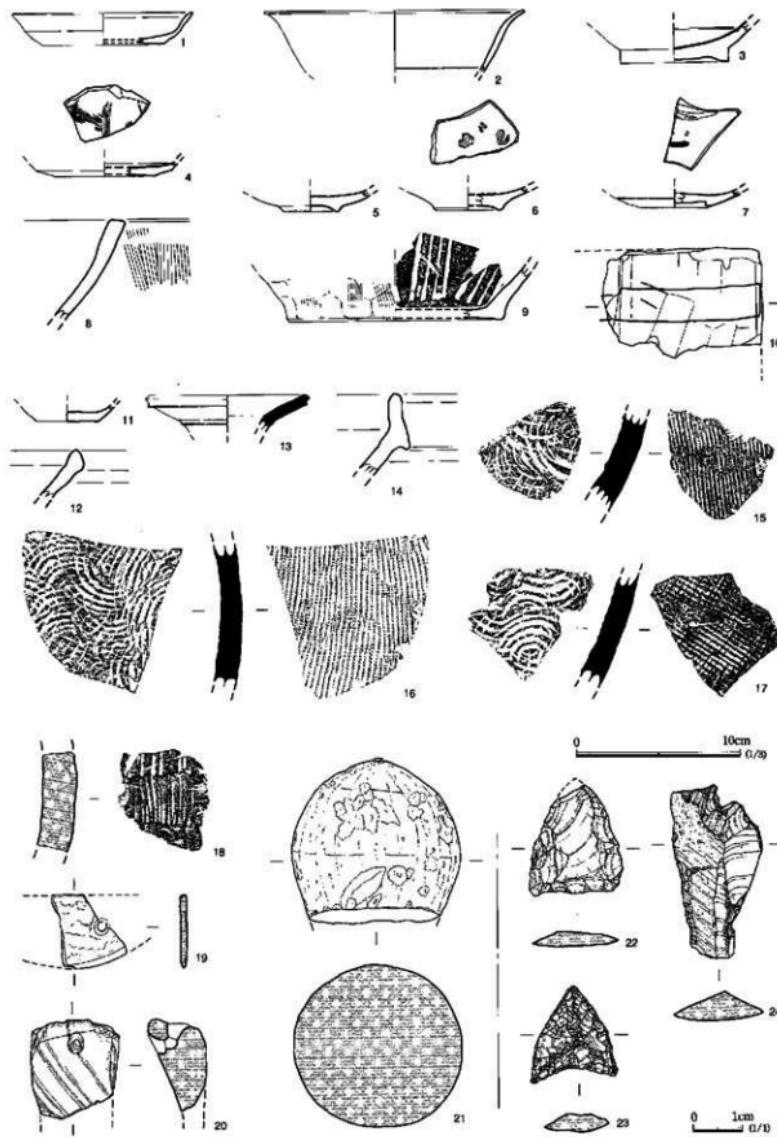


Fig.34 溝SD01出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3)

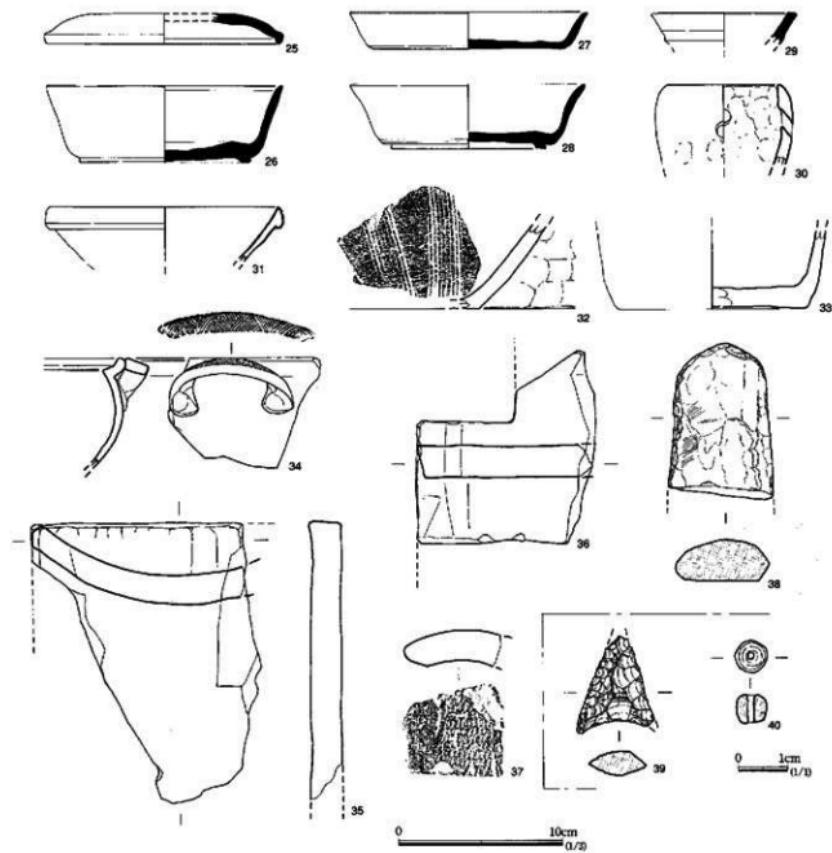


Fig.35 溝SD02出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3)

師名の「□□□八」銘が、94の平瓦の側面には瓦師「今宿市右衛門」銘のスタンプがある。92の谷部に糸切り痕のコビキBと布目痕がある。92-95には丁寧な焼しが施される。

96-110は石製品である。96-102は磨製石斧で、99は未製品である。96・101は再加工品である。96・97・99-101・102は玄武岩製、98は蛇紋岩製である。104・105は敲石、106は磨石、107-109は砥石、110は板碑の三角形頭部の首部・頸部である。

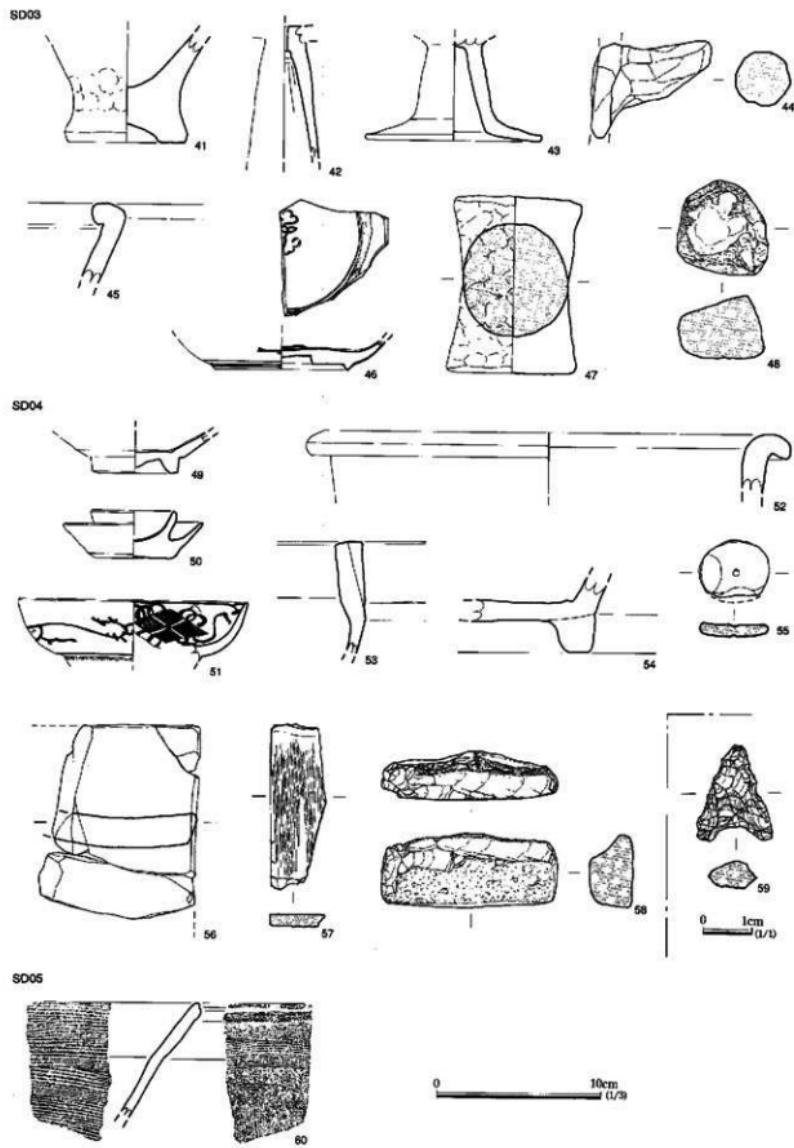
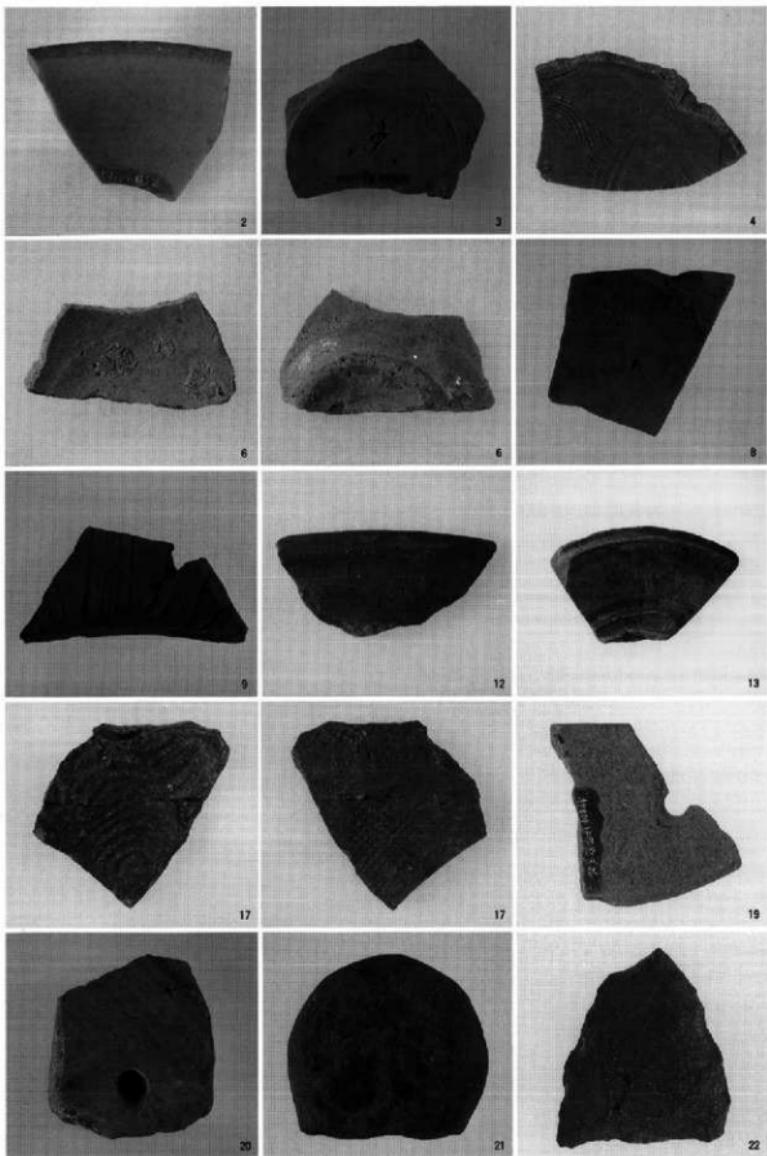
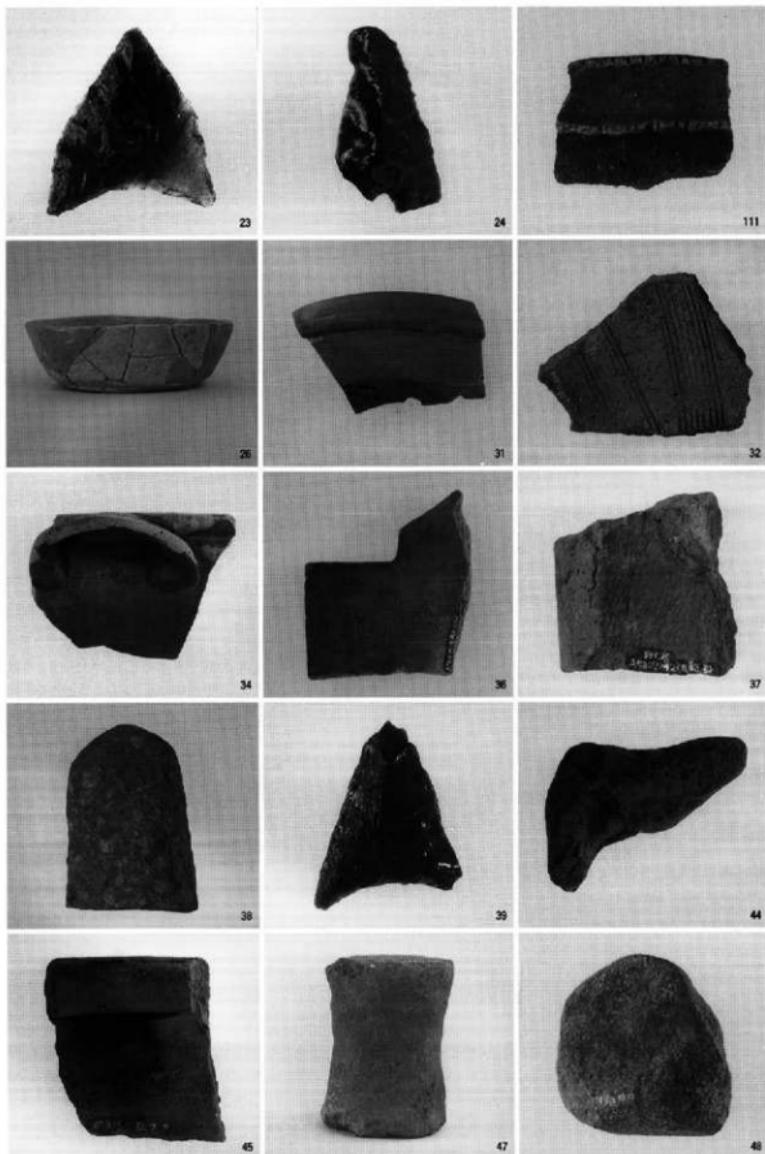


Fig.36 漢SD03~05出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3)



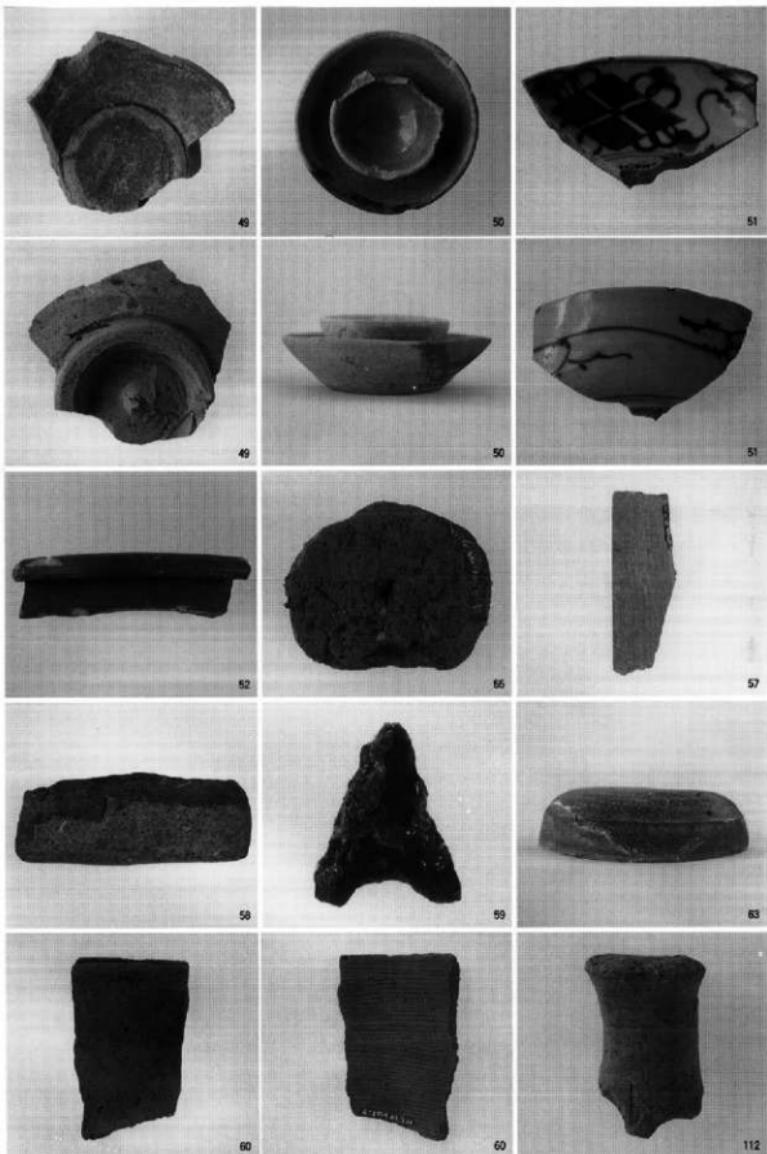
溝SD01出土遺物

※数字は、実測図の番号に一致する



清SD01~03出土遺物

來数字は、実測図の番号に一致する
111は、清SD02出土



溝SD04・05・08出土遺物

*数字は、実測図の番号に一致する
112は、溝SD08出土

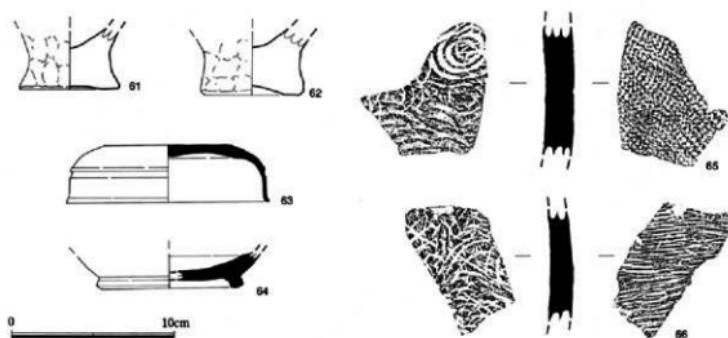
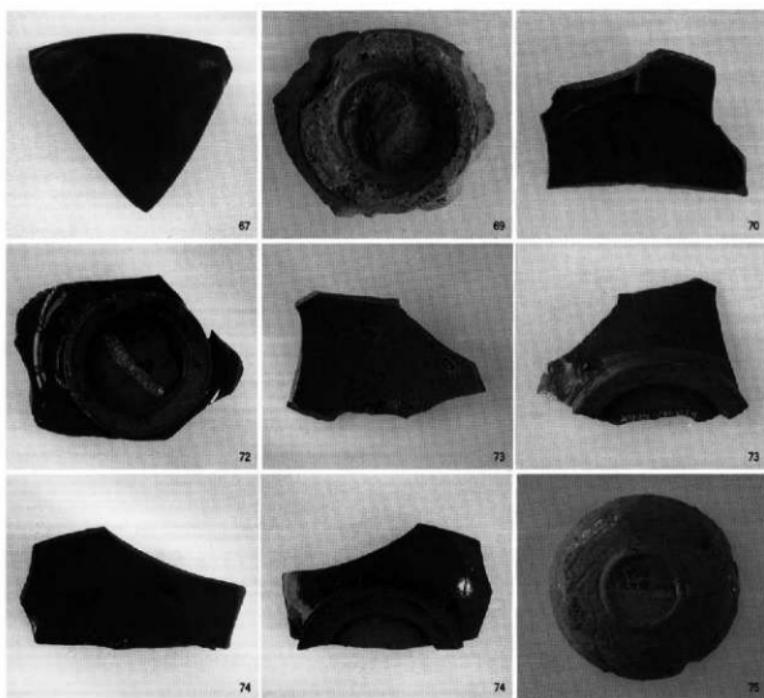


Fig. 37 潟SD08出土遺物実測図① (縮尺1/3)



溝SD08出土遺物①

*数字は、実測図の番号に一致する

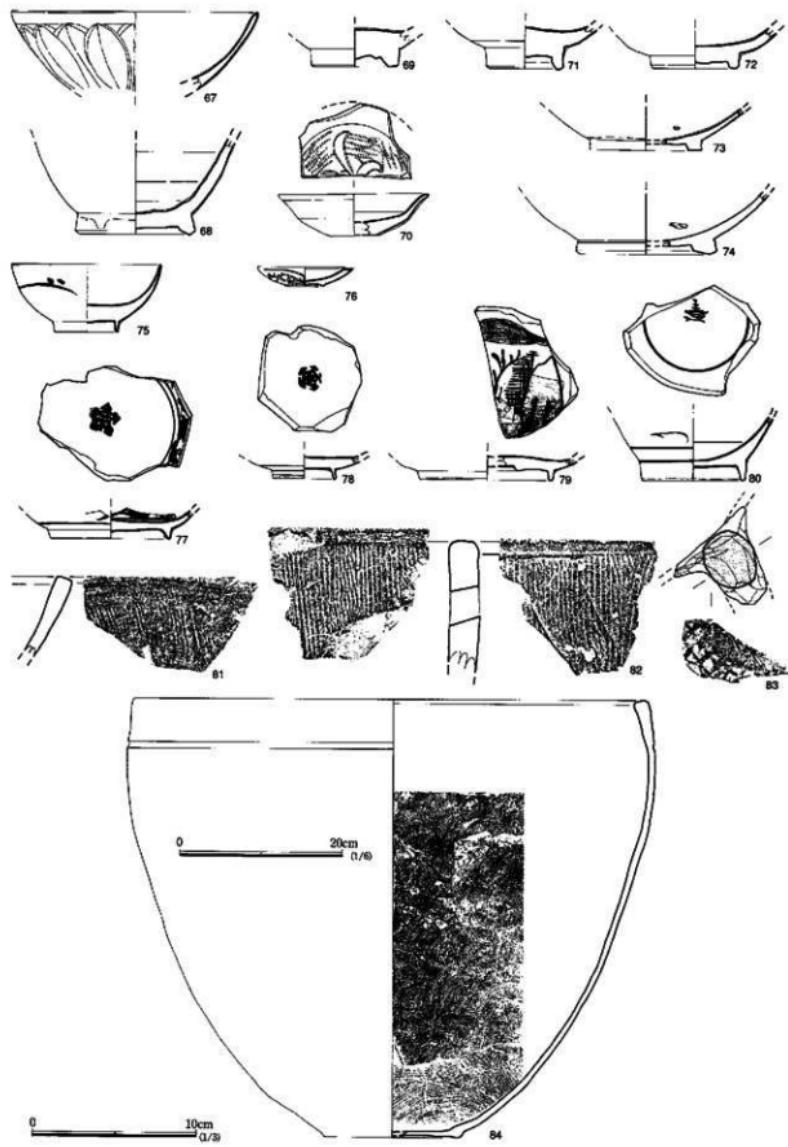
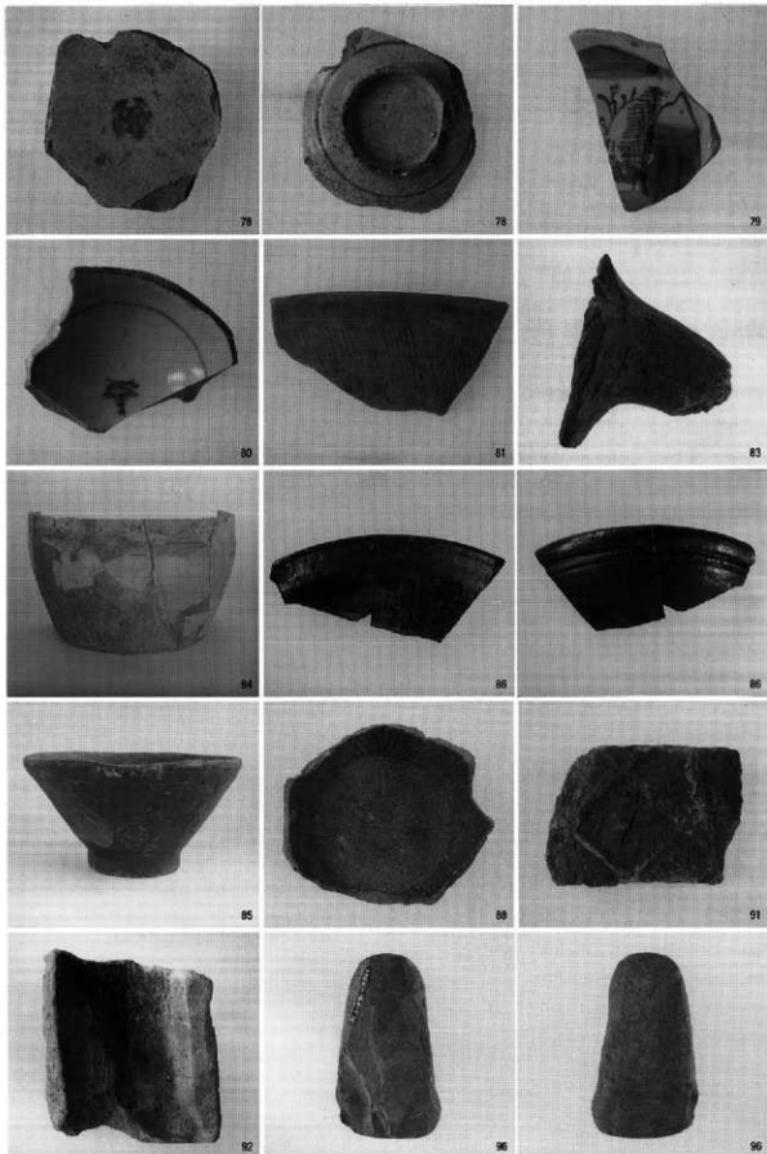


Fig.38 洪SD08出土遺物実測図② (縮尺1/3・1/6)



溝SD08出土遺物②

※数字は、実面図の番号に一致する

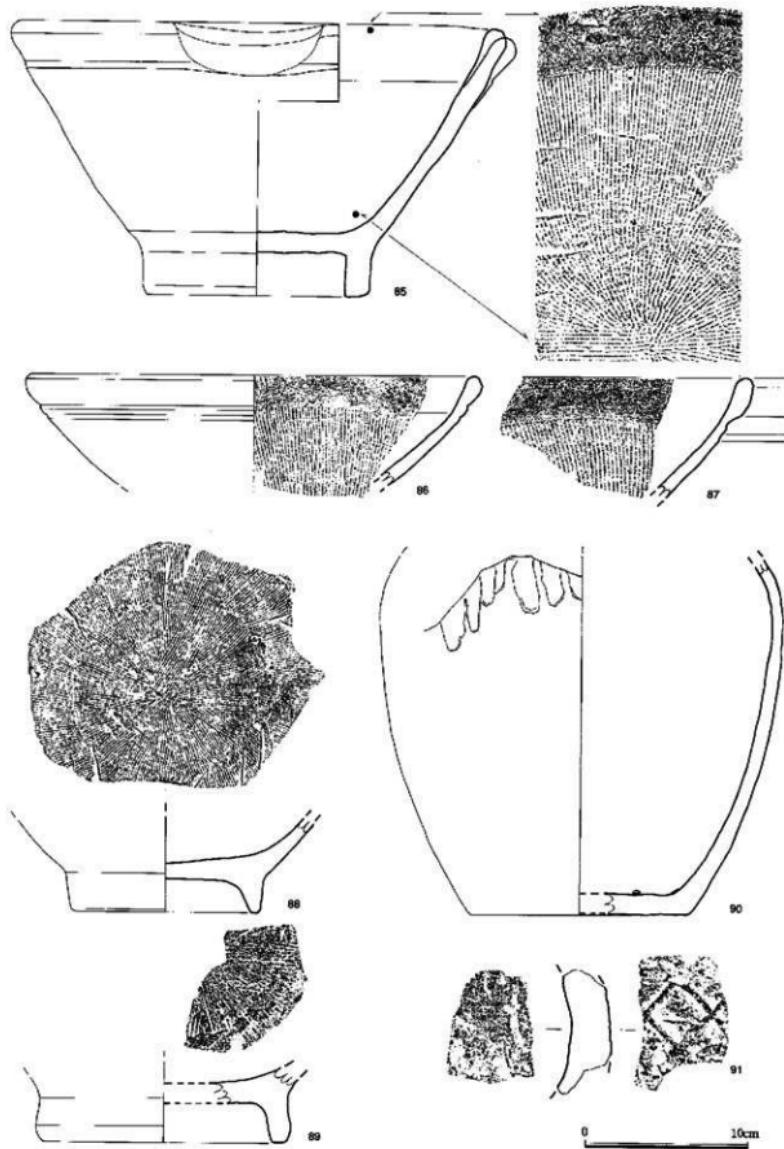


Fig.39 漢SD08出土遺物実測図③ (縮尺1/3)

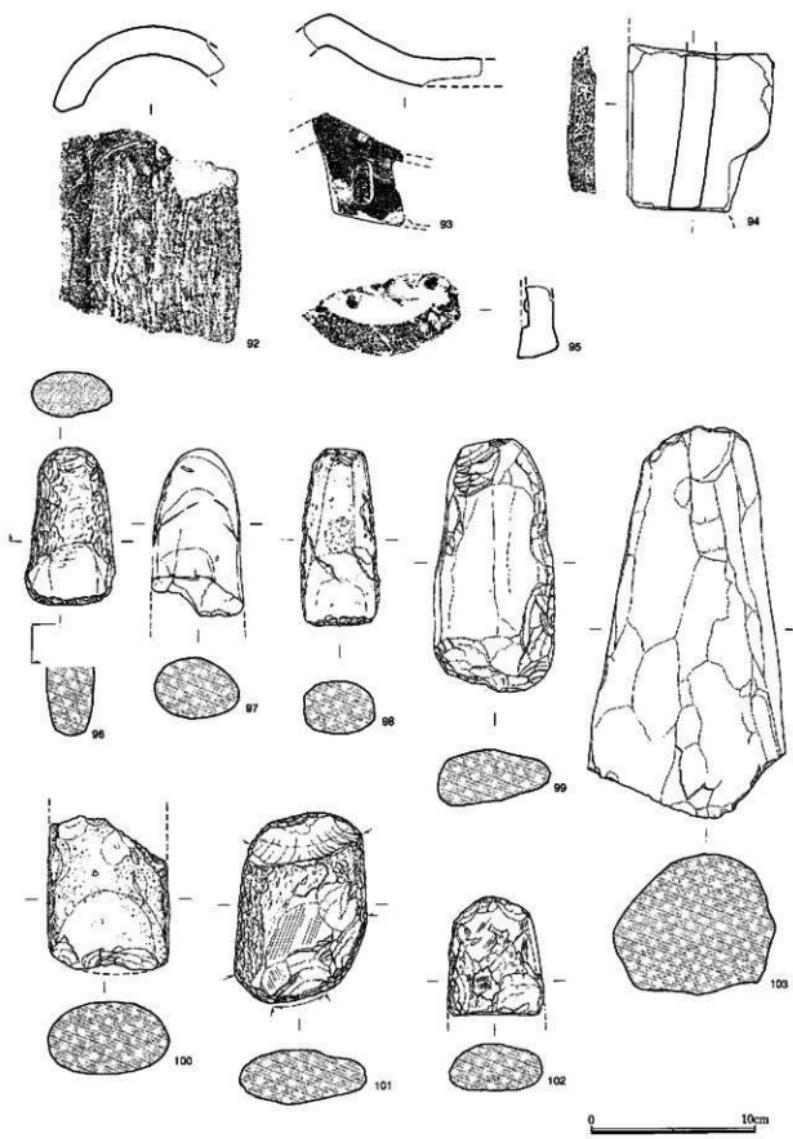


Fig.40 溝SD08出土遺物実測図④ (縮尺1/3)

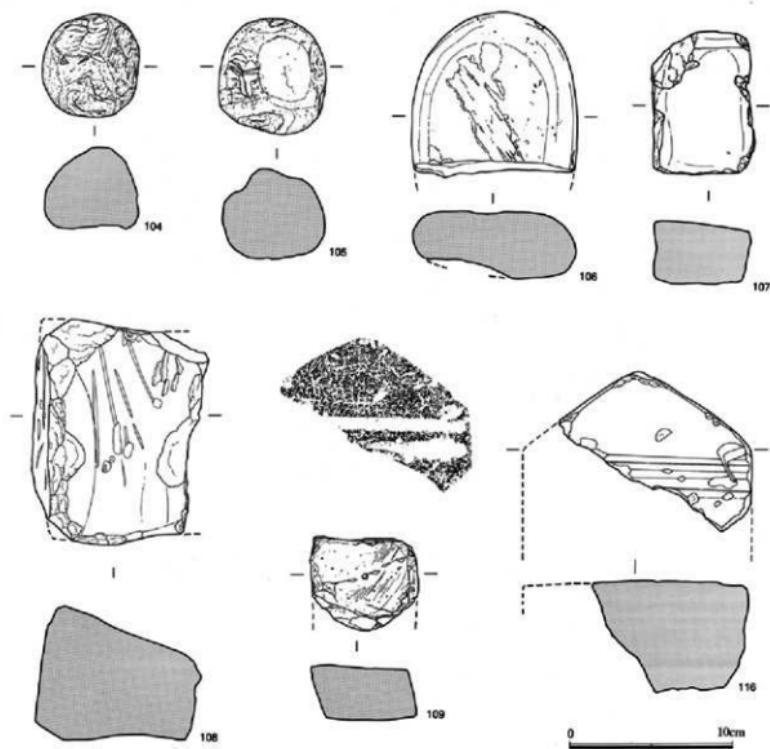
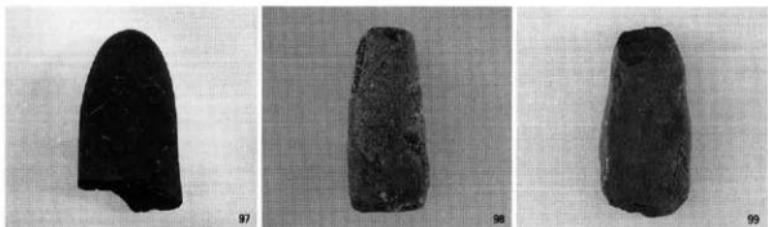
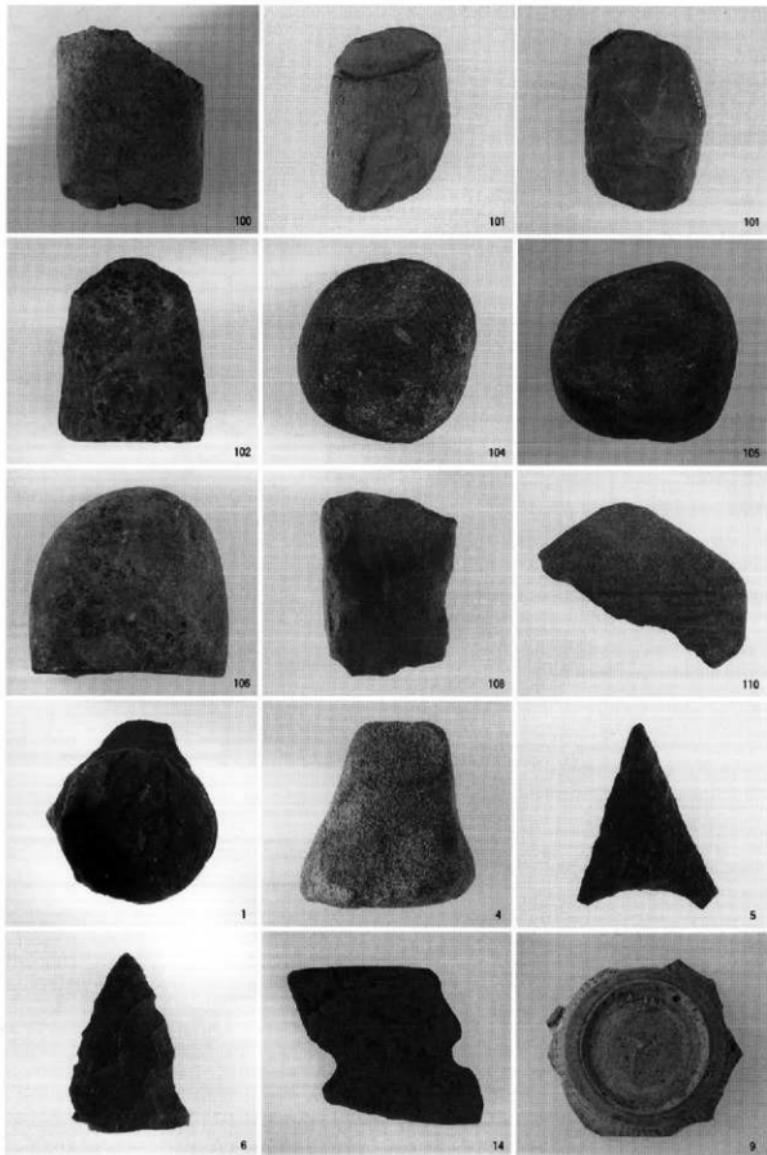


Fig.41 溝SD08出土遺物実測図⑤ (縮尺1/3)



溝SD08出土遺物③

*数字は、実測図の番号に一致する



溝SD08、Pit、表土出土遺物

*数字は、実測図の番号に一致する
14は、SP81の出土

(13) Pit(SP)、表土出土遺物 (Fig. 42)

Pit出土遺物 (Fig. 42-1~8) 1はSP07、2はSP15、3はSP89、4・8はSP66、5はSP35、6はSP74、7はSP65からの出土である。

1・2は縄文時代晩期の土器底部で、1は鉢、2は壺である。1の外底部には木ノ葉の圧痕がある。3は土師器の鉢で、体部外面の過半はヨコハケ調整である。4は砥石、5・6は打製石器で、5・6の石材はサヌカイトである。7・8は碧玉製の管玉で、7は一部を欠いてる。

表土出土遺物 (Fig. 42-9~8) 9・10は中国製白磁碗のIV類、11は李朝陶器のIII、12は伊万里焼の紅皿である。12の外面には型押しによるタコ足唐草文が施される。13は土師器櫃の把手で、上部に縱長の溝が切り込まれる。

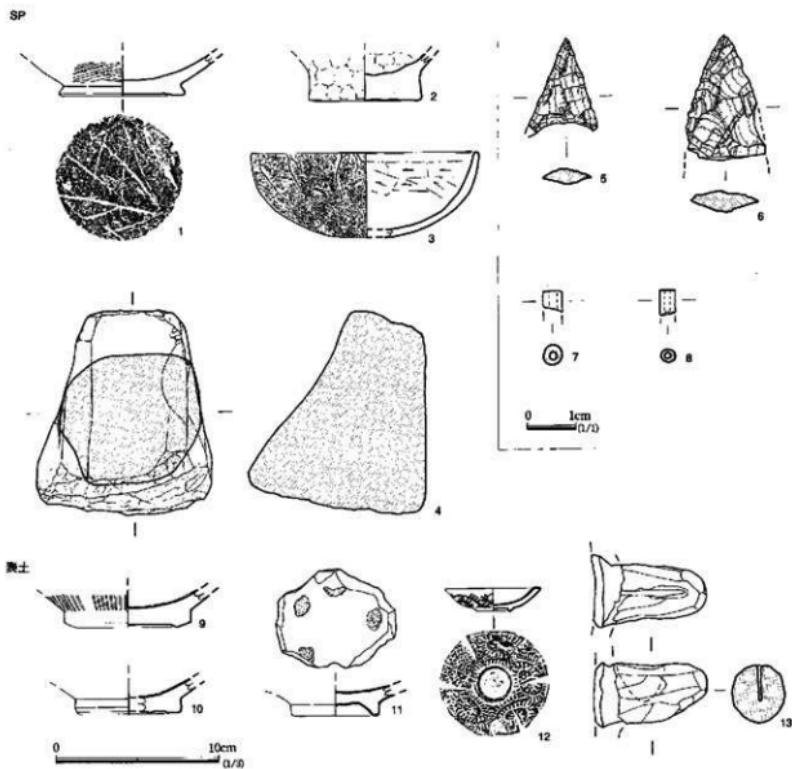
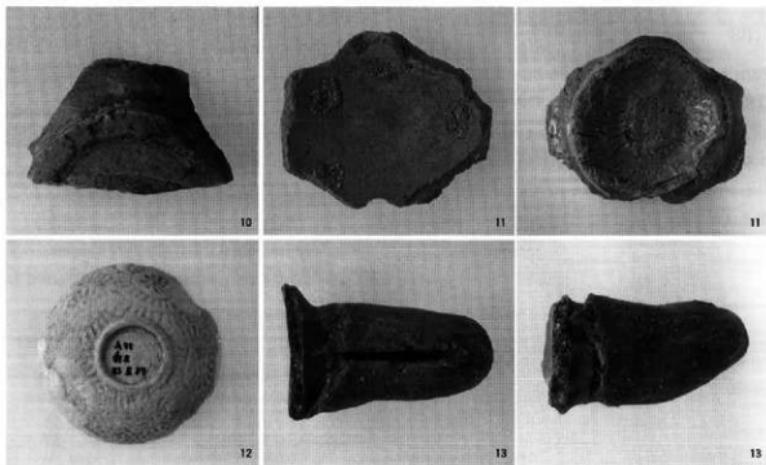


Fig.42 Pit、表土出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3)



表土出土遺物

*数字は、実測図の番号に一致する
14は、SP61の出土

3.まとめ

今回の調査では、弥生時代初頭から江戸時代までの遺構・遺物を検出した。当該地周辺地域は有田台地の最高所の平坦地域に相当するため、開発を進めるのに有効な地形をなしている一方で、室見・原・橋本地域へ至る交通の要衝でもあり、縄文時代以来の重要な位置を占めている。昭和50年代の後半において、この地域は集中的に開発が行われており、第78次調査の対象となった開発もこの1例である。

当該調査で検出した遺構は、大別するとⅠ期は弥生時代前期、Ⅱ期は古墳時代、Ⅲ期は奈良～平安時代、Ⅳ期は平安時代終わりから鎌倉時代、Ⅴ期は戦国時代、Ⅵ期は江戸時代となる。

Ⅰ期は、弥生時代前期の遺構で、竪穴住居跡SC02・03、貯蔵穴SU02・03・05・06・07・08・12が相当する。住居跡SC02・03は住居跡SC01と溝SD01に切られ、又、削平のため全体の形状は不明だが、住居跡中央に存在する土壤が、両側の小口部分に棟持柱を持つ構造は、韓国の松葉里遺跡の住居跡に共通するものである。時期については出土遺物が少なく、又、破片のため確定できないが、SC02は弥生前期初頭に遡ることも考えられる。これらの住居跡に伴う貯蔵穴には、平面形が隅丸長方形と不整円形の2種類があるが、前者は貯蔵穴SU02・06の出土の甕・鉢から前期初頭に位置付けられる。後者は概ね前半から後半に至る時期幅を持っており、住居跡SC03に伴うものと考えられる。有田遺跡における弥生時代の貯蔵穴は現在のところ3箇所で発見されている。第3次調査では隅丸長方形の貯蔵穴を2基、第66次調査（九州大学考古学研究室第2次調査）では、断面形がフラスコ状の貯蔵穴2基が存在していた。第100次調査では隅丸長方形の貯蔵穴を3基検出している。これらの貯蔵穴の位置関係をみると台地中央部の平坦地を環状に配置されている状況を呈している。

Ⅱ期の遺構は、竪穴住居跡SC01・05、土壤SK09が相当する。住居跡は削平を受けて全体形状が不

明であるが、いずれも長方形プランと考えられ、両袖にベッドを有する住居跡であろう。住居跡SC01は両袖にL字形のベットを設けているものと考えられる。SC01・05は土壙SK11より出土した上部器により、古墳時代初頭に比定できる。

III期は奈良～平安時代で、柵SA01が相当する。この柵は第107次調査で検出した柵の方向と一致しているので、同様に方形区画を形成する柵と考えられる。掘立柱建物SB01・02はこの柵と切り合った関係にあるが、同一の主軸方向であるため、時期的には大きな隔たりはないものと考えられる。SB01・02は互いに切り合い関係になるが、建物方向が一致することから、同時期の可能性を考えられる。

IV期は鎌倉時代で、これには土壙墓SX04・15・16が相当する。從来からもこの地域では土壙墓が集中的に検出されており、特に、第77次調査では糸切り底の上部器壺や龍泉窯系鍋蓮弁文鏡を副葬した土壙墓を5基発見している。又、第100次調査でも4基の土壙墓を検出しておらず、この一帯に中世墓地を形成していたことが推測できる。SX15からは副葬された土部器壺2点が出土しているが、時期は13世紀頃が推定できる。これら資料により土壙墓が形成された時期は12世紀から13世紀の後半の幅が比定できる。

V期は戦国時代で、溝SD01が相当する。周辺の調査においては同様な規模の濠を多く検出しており、特に第77次調査で検出したこれらの濠はFig. 4に示したように矩形、もしくは直線的に連続するもので、中世城郭の曲輪を構成するものと考えられる。溝SD01も同様な機能を果たしたものと考えられる。これららの溝が全て同時期に併存したのか、若干疑問が残るところであるが、時期については大略16世紀としておきたい。「筑前歴風土記付録」によれば、有田に「堀ノ内」という城があったことが伝えられており、これらの溝が相当するものかもしれない。

VI期は江戸時代で、溝SD04・08が相当する。SD04は東西方向の溝で、SD08は南北方向から東西方向に曲がる溝で、互いに重なりあっている。これらの溝底は、SD04が東側に、SD08は西側に傾斜しており、排水溝の機能を持っていたのである。矩形に曲がる溝SD08は、屋敷地の区画又は建物を廻る雨落ち溝を構成するものであろう。いずれも18世紀代が推定できる。

以上、今回の調査で検出した遺構については、I期～VI期に概ね時期区分したが、狭い範囲の調査のため遺構の規模や時期、性格に不明確な点も多くのことだ。今後の調査結果を待って再度検討を行いたい。

参考文献

有田遺跡第77次調査	「有田・小田部 第24集」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第471集	福岡市教育委員会 1996年
有田遺跡第100次調査	「有田・小田部 第10集」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第212集	福岡市教育委員会 1989年
有田遺跡第101次調査	「有田・小田部 第7集」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集	福岡市教育委員会 1986年
有田遺跡第107次調査	「有田・小田部 第11集」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集	福岡市教育委員会 1990年



Tab. 3 第78次調査 遺構一覧表

(単位: cm)

遺構名	旧遺構名	種類	形態		現存長	現存幅	深さ	出土遺物	時期	備考
			平面形	断面形						
SK01	D1	土壙	不整円形	逆梯形	245	214	13	夜白式土器、灰生土器、土鉢器、須恵器、黒曜石		
SU02	D2	貯藏穴	隅丸長方形	逆梯形	185	137	29	夜白式土器裏、縁、灰生土器体、蓋、丹波土器片、打製石器、骨子	弥生時代	
SU03	D3	貯藏穴	小整隅丸方形	筒形	115	100	87	夜白式土器裏、灰生土器裏、丹波土器片、硯石、黒曜石	弥生時代	
SX04	D4	土壙裏	隅丸長方形	逆梯形	120	73	45	土器裏、須恵器、中国製青磁皿・碗、陶器片、瓦砾石、鐵斧	秦晉時代	
SU05	D5	貯藏穴	不整円形	袋状	90 (丁度30)	85 (丁度20)	145	夜白式土器裏、灰生土器裏、縁、丹波土器片、土製筋縫草、紋錐、石庖丁、磨製石斧、石鍬、硯石、瓦砾石、底石、黒曜石、玄武岩製片、炭化米、炭化物、骨	弥生時代	
SU06	D6	貯藏穴	隅丸長方形	逆梯形	200 +*	190	64	夜白式土器裏、灰生土器裏、縁、土器裏高坏、須恵器、黒曜石、鐵斧	弥生時代	土器裏、須恵器、鐵斧等は上層から混入
SU07	D7	貯藏穴	不整円形	袋狀	182	180	155	夜白式土器裏、縁、灰生土器裏、縁、縁、蓋、丹波土器片、無文土器体、磨製石斧、打製石器、管玉	弥生時代	
SU08	D8	貯藏穴	小整隅丸長方形	逆梯形	165	137	137	夜白式土器裏、灰生土器裏、縁、丹波土器片、石庖丁、磨製石斧、底石、打製石器、硯石、黒曜石	弥生時代	
SK09	D9	土壙	不整隅丸方形	船底状	183	178	81	灰生土器裏、土器裏高坏、縁、須恵器高坏、蓋、縁、筒石、ガラス瓶小玉、黒曜石	古墳時代	
SU10	D10	貯藏穴	不整隅丸長方形	逆梯形	68	40	63	灰生土器裏、縁、丹波土器片、黒曜石	弥生時代	
SK11	D11	土壙	不整形	逆梯形	68 + *	105	22	一任房跡SC01内土壙 -	古墳時代	住居跡一任房跡を参照
SU12	D12	貯藏穴	隅丸長方形	逆梯形	255	135 +*	30	灰生土器、黒曜石	弥生時代	
SK13	D13	土壙	小整隅丸方形	逆梯形	110	100	44	夜白式土器、灰生土器、黒曜石		
SK14	D14	土壙	-	-	-	-	-	灰生土器、土鉢器、黒曜石		計測不可
SX15	D15	土壙裏	隅丸長方形	逆梯形	130	58	70	土器裏高坏、須恵器裏、蓋台、中国製白磁片、陶器片、鉢脚	秦晉時代	
SX16	D16	土壙裏	隅丸長方形	逆梯形	101	45 + *	26	土鉢器、須恵器、中國製白磁碗、伊万里焼茶碗、鉢脚	秦晉時代	南側境界地
SK17		土壙	隅丸方形	逆梯形	125	123	10	なし		

遺構名	旧遺構名	種類	形態		既存長	既存幅	深さ	出土遺物	時期	備考
			平面形	断面形						
SD01	M 1	溝		箱型断面	2550 + e	513	225	夜白式土器甕、淤生土器甕、壺、土師器甕、坏、甕、甌、領毛器鉢、鉢、模版、東漢系灰陶器鉢、土師質土器鉢、瓦質土器鉢、罐体、火舟、中國製青磁甕、瓶、中葉瓶、白磁甕、瓶、中國製青付瓦、李朝制陶器皿、唐津燒碗、椎筒形器鉢、玉器胸掛器皿、平丸、瓶、器皿口、石板丁、石塔片、磨石製石鉢片、打製石器、石刀、砾石、铁棒	戰國時代	江戸時代の後SD02の遺物が多数混入。
SD02	M 2	溝		逆梯形	1080 + e	200	22	夜白式土器甕、赤朱土器甕、丹施土器片、土器器坏、高不、甕、模毛器鉢、坏、甕、甌、壺、瓶、中葉土器甕、甌、把手付瓶、淡墨瓷、罐底、瓦器、瓦質土器片、瓶、中國製青釉、中國製白磁瓶、國產陶器瓶、平瓦、瓦片、石斧（朱製品）、打製石器、玄武岩剥片、鐵鉗、ガラス製小玉、鍛製鉢、鍛棒		
SD03	M 3	溝		逆梯形	170	50	17	淤生土器高坏、壺、土師器高坏、瓶、罐片、模毛器甕、瓦質土器鉢、火盆、陶器皿、甕、甌、伊万里燒杂付瓦、瓶、砾石、砾石、麻糬片、铁製品、炭化物、黑曜石		備SD01の牽引縫である。 SD02の遺物が多く混入。
SD04	M 4	溝		逆梯形	430 + e	100	47	土器器坏、模毛器甕、甌、土師質土器洛洛、七輪、瓦質土器器、瓶、火舟、中国製青釉、國產白釉小皿、紅皿、圈足陶器鉢、瓶、罐口、平丸、铁瓦、土器製造奉手、石斧（朱製品）、打製石器（朱製品）、砾石、炭化物、骨	江戸時代	
SD05	M 5	溝		逆梯形	280 + e	60+e	80	土器器、土師質土器鉢、罐体、圈足陶器、黑曜石		
SD06	M 6	溝		逆梯形	2200 + e	100 + e	130	夜白式土器甕、淤生土器高坏、壺、甌、土師器高坏、模毛器甕、瓦質高坏、甌、火舟、模格、七輪、瓦質土器器、瓶、罐体、火舟、足鍋、中葉青白磁甕、瓶、中國製白磁瓶、李朝白磁瓶、伊万里燒杂付瓦、瓶、罐口、瓶、圈足白磁紅皿、國產陶器甕、甌、甕、甌、壺、甌、壺、甌、大朴、甕、甌、急須、灯明庄、樂器、漆椀、軒平瓦、新丸瓦、平丸、瓦、九瓦、敲石、磨石、磨製石茶、板片、砾石、黑曜石、玄武岩原石、鐵製鉢、炭化物、铁淨	江戸時代	
SD11	M11	溝			-	-	-	黑曜石		場所不明

Tab. 4 第78次調査 遺物・観察

(単位: cm)

測定番号	出土遺物	形態	部類	口径	高径 (高台径)	高さ (瓶身高)	形態の特徴・調整・文様	施脂・色調・素地等	備考
10 1	SC01 蓋土	土器部	二重口 縦縫	12.8	—	(5.3)	口縫部は内寄気味に外反する。口縫部内面はヨコハケ調整。外表面はナガ調整。体部内面はヘラケゼリ調整。	施脂上に砂粒を多く含む。焼成良好。茶褐色。	老健系
10 2	SC01	土器部	小型 丸底壺	10.5	—	(9.1)	口縫部は内寄に開く。体部は球形。内面はヘラケゼリ調整。	施脂上に砂粒を多く含む。焼成不良。明淡茶褐色。	外向型
10 3	SC01内 SK1	土器部	小型 丸底壺	9.4	—	11.1	口縫部は直線的に開く。体部は球形。内面はヨコハケ調整。外表面はナガ調整。施脂上に砂粒を多く含む。焼成やや良。茶褐色。	施脂上に砂粒を多く含む。焼成やや良。茶褐色。	老健系
10 4	SC01内 SK1	土器部	小型 丸底壺	9.4	—	10.2	口縫部は直線的に開く。体部は球形。内面はヨコハケ調整。外表面はナガ調整。施脂上に砂粒を多く含む。焼成やや良。茶褐色。	施脂上に砂粒を多く含む。焼成やや良。茶褐色。	老健系
10 5	SC01内 SK1	土器部	高壺	19.6	—	(6.3)	口縫部は緩やかに外反する。外表面はナガ。施脂上に砂粒を多く含む。焼成良好。茶褐色。	施脂上に砂粒を多く含む。焼成良好。茶褐色。	内向型
10 8	C02	夜白式 十唇	蓋	—	—	(3.0)	口縫部外匠に削目突帯。体部外面は条状に砂粒を多く含む。焼成良好。茶褐色。	施脂上に砂粒を多く含む。焼成良好。茶褐色。	有り。
10 9	SC02	夜白式 土器	蓋	—	—	(4.9)	口縫部外面端部に削目突帯。	施脂上に砂粒を多く含む。焼成やや不良。茶褐色。	内外向型
10 10	SC02	弦牛土器	蓋	—	—	(2.7)	肩部の破片。外表面に貝殻取模による文様を施す。	施脂上に砂粒を少し含む。焼成良好。茶褐色。	有り。
10 11	SC02- 03	土製品	不明	(裏付長) 4.2	(幅) 1.0	(厚さ) 1.0	外面は指ナガ仕上げ。指圧痕残る。	施脂上は繊細。焼成良好。茶褐色。	有り。
10 12	SC02	土製品	投擲	(裏付) 4.3	(幅) 2.2	(厚さ) 2.1	外面はナガ仕上げ。	施脂上に白い砂粒を含む。焼成良好。茶褐色。	有り。
13 1	SK09	土器部	高壺	15.9	—	(5.9)	口縫部は緩やかに外反し、端部は尖る。端部と筒部の内面に凹凸をもつ。外表面はナガ調整。	施脂上に砂粒を少し含む。焼成やや良。外表面は明淡茶褐色。内面は茶褐色。	内向型
13 2	SK09	土器部	高壺	—	—	(6.0)	筒部は強く開く。筒部と筒部の内面に凹凸をもつ。筒部内面は横方向のヘラケゼリ調整。	施脂上に砂粒を少し含む。焼成やや良。明淡茶褐色。	外向型
13 3	SK09	須恵器	蓋	—	—	(2.9)	井井頭と体部の端に跡をもつ。口縫部内面に凹凸をもつ。外表面はナガ調整。	施脂上は繊細。焼成良好。茶褐色。	有り。
13 4	SK09 蓋土	須恵器	蓋	—	—	(4.2)	肩部に3つの法螺上に螺旋紋による文様を施す。外表面はタケキの後ナガ調整。内面には自然釉がかかる。	施脂上に砂粒を少し含み、やや粗い。焼成良好。外表面は暗茶褐色。内面は茶褐色。	有り。
17 1	SU02宋	夜白式 土器	蓋	15.3	6.3	(19.0)	口縫部外面に突帯。体部は内寄氣味に立ち上がる。蓋部はやや上げ底。	施脂上に砂粒を含み、やや粗い。焼成やや不良。外表面は暗茶褐色。内面は茶褐色。	内外向型
17 2	SU02	夜白式 土器	蓋	—	—	(2.1)	口縫部外面に削目突帯。内面はナガ調整。	施脂上に砂粒を多く含み、やや粗い。焼成良好。茶褐色。	外向型
17 3	SU02	夜白式 土器	蓋	—	—	(2.1)	口縫部外面に削目突帯。外面上に条状。内面はナガ病。	施脂上に砂粒を含み、やや粗い。焼成良好。茶褐色。	外向型
17 4	SU02	夜白式 土器	蓋	—	—	(3.5)	口縫部外面に削目突帯。内面はナガ調整。	施脂上に砂粒を含み、やや粗い。焼成良好。外表面は暗茶褐色。内面は明茶色。	外向型
17 5	SU02	夜白式 土器	蓋	—	—	(2.8)	口縫部外面端部に削目突帯。内面はナガ調整。	施脂上に大粒の砂を多く含み、やや粗い。焼成良好。茶褐色。	外向型
17 6	SU02	弦生土器	蓋	9.0	—	(5.3)	口縫部は外反する。内外面ともヘラミガミ調整。	施脂上は細かい砂を含むが粗い。焼成やや良。茶褐色。	有り。
17 7	SU02宋	弦牛土器	蓋	23.2	7.3	13.2	平底。体部は丸味をもつ。口縫部は緩やかに外反する。内面にヘラミガミ調整。外表面に焼付斑。	施脂上に白い砂粒を多く含む。焼成良好。茶褐色。	外向型
17 11	SU03	夜白式 土器	蓋	—	—	(2.5)	口縫部外面端部に削目突帯。外面上は条状。内面はヨコナガ調整。	施脂上に砂粒を多く含み、やや粗い。焼成良好。茶褐色。	内向型
17 12	SU03	弦生土器	蓋	—	7.4	(4.0)	平底。体部は直線的に開く。外表面は丁寧なナガ調整。一部指圧痕残る。	施脂上に砂粒を含み、やや粗い。焼成良好。茶褐色。	内向型
18 14	SU05	夜白式 土器	蓋	—	—	(2.5)	口縫部外面に削目突帯。内外面ともナガ調整。	施脂上に砂粒を含み、やや粗い。焼成良好。外表面は淡茶色。内面は淡茶色。	外向型
18 15	SU05 上	弦生土器	蓋	—	—	(4.8)	やや肥厚した口縫部は強く外反し、端部は平坦。外表面はナガ調整。内面はナガ調整。	施脂上に砂粒を含み、やや粗い。焼成良好。茶褐色。	内向型
18 16	SU05 上	弦生土器	蓋	—	—	(6.7)	やや肥厚した口縫部は強く外反し、端部は平坦。外表面はナガ調整。内面はナガ調整。	施脂上に大粒の砂を多く含み、粗い。焼成良好。外表面は明淡茶褐色。内面は明茶褐色。	外向型

(単位: cm)

井田	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径(高台付)	器高(現存高)	形態の特徴・調査・文様	施釉・色調・素地等	備考	
18	17	SU06下層	弥生土器	甕	-	-	(4.6)	口縁部はくの字状に外反し、端部は平底。口縁部内面はヨコハケ調査。	胎土に大粒の砂を多く含み、粗い。焼成良好。深茶色。	外因磨滅	
18	18	SU05下層	夜臼式土器	盆	-	7.0	(3.9)	上げ底。外面に唇頭底痕が残る。	胎土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。明系褐色。	内因磨滅	
18	19	SU05上層	弥生土器	甕	-	(6.2)	(4.6)	上げ底。外面はタケハケ調査。ハケの部位は5本以上。内面に唇頭底痕が残る。	胎土に3~4mmの砂粒を含み、粗い。焼成良好。深茶褐色。	外因磨滅	
18	20	SU05底	弥生土器	甕	-	7.8	(6.0)	平底。体部は外反味に近く。内面に唇頭底痕が多く残る。	胎土に大粒の砂を多く含み、粗い。焼成良好。深茶色、一部黒茶色。	外因磨滅	
18	21	SU05底	弥生土器	甕	-	6.0	(9.7)	平底。体部は丸底をもつ。外面はタケハケ調査。内面にはナナフジ文。	胎土に砂粒を少し含む。焼成良好。外囲は淡茶褐色、内面は淡茶色。		
18	22	SU05中層	弥生土器	甕	-	8.0	(17.8)	平底。体部はやや膨らみをもつ。外側はタケハケ調査。内面にはナナフジ文。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。		
18	23	SU05最下層	弥生土器	甕	-	19.2	-	口縁部はやや肥厚し、外反する。外側の口縁部と腹部の間に無い段をもつ。口縁部内外部には2ヶ所窓孔。	胎土に人粒の砂を多く含み、粗い。焼成良好。明系褐色。		
18	24	SU05最下層	弥生土器	甕	-	-	(4.9)	脛足した時に縁部は外反し、縁部に二重の口縁部を施す。外側は口縁部と腹部の間に無い段をもつ。内面にはヨコハケ調査。	胎土に5mmの砂粒を含み、粗い。焼成良好。外囲は淡茶褐色。	外因磨滅	
18	25	SU05中層	弥生土器	甕	-	-	(5.2)	口縁部は肥厚し、傾斜か外反する。外側の口縁部と腹部の間に無い段をもつ。内面にはヨコハケ調査。外側には低いミダラ文。	胎土に3~4mmの砂粒を多く含み、粗い。焼成良好。外囲は淡茶褐色。		
18	26	SU05中層	弥生土器	甕	-	-	(2.3)	口縁部は強烈的に外反し、縁部に粗目を施す。	胎土に大粒の砂を含み、粗い。焼成良好。内面は淡茶色。	内因磨滅	
18	27	SU05下層	弥生土器	甕	-	-	(4.8)	口縁部は強く外反し、縁部に割目を施す。表面に墨書きを施すため縁部との境に砂をまつ。内面にはハマヒガキ調査。	胎土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。淡茶色。		
18	28	SU05底	弥生土器	甕	-	11.0	-	口縁部は強烈に外反し、外縁部は九くおさめ。胎土は白い。外縁部にはハマヒガキ調査。体部内面にはナナフジ文。	胎土は祐。胎土は白い。外縁部にはハマヒガキ調査。体部内面にはナナフジ文。		
18	29	SU05下層	弥生土器	甕	-	10.4	6.4	18.4	縁部はやや外反し、外縁部は九くおさめ。胎土は白い。外縁部にはハマヒガキ調査。内面にはナナフジ文。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。外囲は淡茶色、内面は黒茶色。	
18	30	SU05最下層	弥生土器	甕	-	6.4	(2.7)	平底。内底に唇頭底痕が残る。	胎土に大粒の砂を含み、粗い。焼成良好。淡茶色、一部黒茶色。	外因磨滅	
19	46	SU05土製品	樹籬?	(最大径) 3.7	(厚さ) 0.7	-	-	土器片の周囲を打ち欠いた不整円盤。孔は貫通していない。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。淡茶色。		
19	47	SU06下層	弥生土器	甕	-	-	13.0	体部は丸くとも、口縁部は外反する。内面はヨコハケ調査。内面にはハマヒガキ調査。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。外囲は淡茶褐色、内面は茶褐色。		
19	48	SU06	夜臼式土器	甕	-	-	3.9	口縁部外面に割目突帯。内面はナナフジ文。	胎土に砂粒を含み、やや粗い。焼成良好。明系褐色。	外因磨滅	
19	49	SU06	夜臼式土器	甕	-	-	4.1	口縁部外側に割目突帯。	胎土に砂粒・貝殻を少し含み、やや粗い。焼成やや良。暗茶褐色。	内因磨滅	
19	50	SU06	弥生土器	壺	-	-	-	壺部・肩部の大部分を欠く。壺部と肩部の境に刻目を付ける。	胎土に大粒の砂を含み、粗い。焼成良好。外囲は淡茶褐色、内面は茶褐色。	内因磨滅	
20	51	SU07	夜臼式土器	甕	亮	24.2	-	(18.8)	体部は丸くとも、口縁部外側と体部外側に粗目を施す。内面にはナナフジ文。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。外囲は淡茶褐色、肩部下部は暗茶褐色。	
20	52	SU07第1層	夜臼式土器	甕	-	-	(9.1)	口縁部外側に三角突帯。口縁部内面は半球形に削り取られた跡を残す。内面にはナナフジ文。	胎土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。外囲は淡茶褐色、内面は淡茶色。	外因磨滅	
20	53	SU07底	夜臼式土器	甕	-	-	(9.2)	口縁部外側に割目突帯。外側はヨコナナフジ文。内面はナナフジ文。	胎土に2~3mmの砂粒を多く含み、粗い。焼成良好。外囲は淡茶褐色、内面は淡茶色。		
20	54	SU07第5層	夜臼式土器	甕	-	-	(3.0)	口縁部外側に粗目突帯。外側は右下がりの条状、内面はナナフジ文。	胎土に砂粒・貝殻粒を含み、やや粗い。焼成良好。明系褐色。		
20	55	SU07	夜臼式土器	甕	-	-	(3.2)	口縁部外側に粗目突帯。口縁部は平坦である。内面にはナナフジ文。	胎土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成やや良。暗茶褐色。	1層と5層出合	
20	56	SU07下層	夜臼式土器	甕	-	-	(2.4)	口縁部外側に粗目突帯。内面ナナフジ文。	胎土に砂粒を含み、やや粗い。焼成良好。淡茶色。		
20	57	SU07	夜臼式土器	甕	-	-	(3.9)	口縁部外側に粗目突帯。	胎土に砂粒を含み、やや粗い。焼成良好。淡茶色。	内因磨滅	

(単位: cm)

番号	遺物 番号	出土 場所	種類	器機	口径	底径 (高台性) (窓有無)	形態の特徴・調査・文様	施釉・色調・素地等	備考
20	58	SU07 第5層	夜白式 土器	壺	-	7.0 (2.7)	やや上げ底。底部外側は削り調整を施す。 内面はナデ調整。外面はヘラミガキ調整。	施土に大粒の砂を含み、やや粗 い。焼成良好。外側は淡茶褐色。 内面は暗茶色。	
20	59	SU07 夜白式 上器	壺	-	7.2 (3.8)	やや上げ底。 内面はナデ調整。外側に指 壓痕跡が残る。		施土に大粒の砂を多く含み、や や粗い。焼成良好。外側は明茶褐色。 内面は暗茶色。	
20	60	SU07 第1層	夜白式 土器	壺	-	8.2 (3.3)	上げ底。底部外側に削り調整を施す。	施土に大粒の砂を多く含み、非 常に粗。焼成良好。茹茶色。	内外面磨滅
20	61	SU07 第1層	弥生土器	鉢	-	-- (3.4)	底部は丸味をもつていて、口縁部底盤内 側を追摩き。底部を平らにする。外側には指 壓痕跡をもつて、外側面はヘラミガキ 調整。	施土に砂粒を含み、やや粗い。 焼成良好。茹茶色。	内外面磨滅
20	62	SU07 第5層	夜白式 上器	鉢	-	- (3.0)	口縁部は外反し、底部と口縁部の境は屈 曲し、残さをつく。内面はミガキ調整。	施土に砂粒を含み、やや細かい。 焼成良好。外側は淡茶色で一些 過燒色。内面は暗茶色。	外面磨滅
20	63	SU07 第1層	弥生土器	壺	22.8	- (18.9)	口縁部はくち字形に外反する。内面は17cm 位以上のタケハケ調整。内面には、口縁 部がヨコハケ調整。体部がナデ調整。	口縁部はくち字形に外反する。内面は17cm 位以上のタケハケ調整。内面には、口縁 部がヨコハケ調整。体部がナデ調整。	施土に大粒の砂を多く含み、非 常に粗。焼成やや良。茹茶色。
20	64	SU07 下層	弥生土器	壺	19.8	- (7.4)	口縁部は後く外反し、底部に削目を施す。	口縁部は後く外反し、底部に削目を施す。	施土に大粒の砂を多く含み、非 常に粗。焼成やや良。茹茶色。
20	65	SU07 第5層	弥生土器	壺	-	- (6.5)	底部はやや丸味をもつて、口縁部は外反す る。口縁部に削目を施す。内面は15cm 位以上のタケハケ調整。内面には指 壓痕跡がある。	底部はやや丸味をもつて、口縁部は外反す る。口縁部に削目を施す。内面は15cm 位以上のタケハケ調整。内面には指 壓痕跡がある。	施土に大粒の砂を多く含み、粗 い。焼成やや良。外側は淡茶色。 内面は暗茶色。
20	66	SU07 上器	弥生土器	壺	-	- (8.3)	口縁部はくの字形に外反する。内面に指 壓痕跡が残る。	口縁部はくの字形に外反する。内面に指 壓痕跡が残る。	施土に砂粒を多く含み、粗 い。焼成良好。淡茶色。
20	67	SU07 第5層	弥生土器	壺	-	- (8.8)	口縁部は後く外反し、底部に削目を施す。 外側は本单位以上のタケハケ調整。	口縁部は後く外反し、底部に削目を施す。 外側は本单位以上のタケハケ調整。	施土に大粒の砂を多く含み、粗 い。焼成やや良。外側は淡茶色。 内面は明茶褐色。
20	68	SU07 第5層	弥生土器	壺	-	- (8.0)	口縁部は後く外反し、底部に削目を 施す。外側は本单位以上のタケハケ調整。	口縁部は後く外反し、底部に削目を 施す。外側は本单位以上のタケハケ調整。	施土に大粒の砂を多く含み、粗 い。焼成良好。外側は淡茶色。 内面は淡茶色。
20	69	SU07 第5層	弥生土器	壺	-	- (2.6)	口縁部は小さく外反し、底部に削目を 施す。外側はナデ調整。	口縁部は小さく外反し、底部に削目を 施す。外側はナデ調整。	施土に大粒の砂を多く含み、やや粗 い。焼成やや良。淡茶色。
20	70	SU07	弥生土器	壺	-	- (2.7)	口縁部は後く外反し、底部に削目を施す。 外側は5本車輪以上のタケハケ調整。	口縁部は後く外反し、底部に削目を施す。 外側は5本車輪以上のタケハケ調整。	施土に大粒の砂を多く含み、粗 い。焼成良好。外側は淡茶色。 内面は淡茶色。
21	71	SU07 下層	弥生土器	壺	-	- (3.5)	口縁部は外反し、底部に削目を施す。 内面にはナデ調整。	口縁部は外反し、底部に削目を施す。 内面にはナデ調整。	施土に大粒の砂を多く含み、やや粗 い。焼成良好。外側は淡茶色。 内面は淡茶色。
21	72	SU07 上器	弥生土器	壺	-	- (3.2)	口縁部は後く外反し、底部に削目を施す。 内面にはナデ調整。	口縁部は後く外反し、底部に削目を施す。 内面にはナデ調整。	施土に大粒の砂を多く含み、やや粗 い。焼成良好。淡茶色。
21	73	SU07 第1層	弥生土器	壺	-	- (4.0)	口縁部は後く外反し、底部に削目を 施す。外側はタケハケ調整。内面はヨコ ハケ調整。	口縁部は後く外反し、底部に削目を 施す。外側はタケハケ調整。内面はヨコ ハケ調整。	施土に大粒の砂を多く含み、や や粗い。焼成良好。淡茶色。
21	74	SU07 第1層	弥生土器	壺	-	- (5.0)	口縁部は後く外反し、底部に削目を 施す。外側は本單位以上のタケハケ調整。 内面にはナデ調整。体部内面には 指圧痕跡がある。	口縁部は後く外反し、底部に削目を 施す。外側は本單位以上のタケハケ調整。 内面にはナデ調整。体部内面には 指圧痕跡がある。	施土に砂粒を含み、やや粗 い。焼成良好。外側は淡茶色。 内面は明茶褐色。
21	75	SU07 第5層	弥生土器	壺	-	- (3.2)	口縁部は後く外反し、底部に削目を 施す。外側はタケハケ調整。内面は9本車 輪のタケハケ調整。	口縁部は後く外反し、底部に削目を 施す。外側はタケハケ調整。内面は9本車 輪のタケハケ調整。	施土に大粒の砂を多く含み、粗 い。焼成良好。外側は淡茶色。 内面は明茶褐色。
21	76	SU07 第1層	弥生土器	壺	-	- (5.0)	口縁部は後く外反し、底部に削目を 施す。内面には指圧痕跡がヨコハケ調整。 体部内面にはナデ調整。	口縁部は後く外反し、底部に削目を 施す。内面には指圧痕跡がヨコハケ調整。 体部内面にはナデ調整。	施土に大粒の砂を多く含み、やや粗 い。焼成良好。外側は淡茶色。 内面は淡茶色。
21	77	SU07 第1層	弥生土器	壺	-	- (5.6)	口縁部は後く外反し、底部に削目を 施す。内面には指圧痕跡がヨコハケ調整。 体部内面にはナデ調整。	口縁部は後く外反し、底部に削目を 施す。内面には指圧痕跡がヨコハケ調整。 体部内面にはナデ調整。	施土に大粒の砂を多く含み、粗 い。焼成良好。外側は淡茶色。 内面は淡茶色。
21	78	SU07	弥生土器	壺	-	- (5.4)	口縁部はくの字形に外反する。口縁部西端 に削目を施す。外側上位に突堤をもつ。 内面に指圧痕跡が残る。	口縁部はくの字形に外反する。口縁部西端 に削目を施す。外側上位に突堤をもつ。 内面に指圧痕跡が残る。	施土に大粒の砂を多く含み、粗 い。焼成良好。外側は淡茶褐色。 内面は淡茶色。
21	79	SU07 第5層	弥生土器	壺	-	- (4.4)	口縁部は後く外反する。口器部は平行に 仕上げる。底部は丸味をもつ。外側は平面に 仕上げる。外側に指圧痕跡が残る。	口縁部は後く外反する。口器部は平行に 仕上げる。底部は丸味をもつ。外側は平面に 仕上げる。外側に指圧痕跡が残る。	施土に大粒の砂を多く含み、粗 い。焼成良好。淡茶褐色。
21	80	SU07 第5層	弥生土器	壺	-	8.0 (8.9)	上げ底。底部は直線的に圓く。外側はタ ケハケ調整。内面には指圧痕跡が残る。	上げ底。底部は直線的に圓く。外側はタ ケハケ調整。内面には指圧痕跡が残る。	施土に7mm人の砂を含み、粗 い。焼成やや良。外側は淡茶褐色。 内面は暗茶色。
21	81	SU07	弥生土器	壺	-	6.8 (8.0)	平底。底部は丸味をもつ。外側は7本車輪 以上のタケハケ調整。底部にノホ裏表が 残る。	平底。底部は丸味をもつ。外側は7本車輪 以上のタケハケ調整。底部にノホ裏表が 残る。	施土は砂粒を含み、やや粗い。 焼成良好。外側は淡茶褐色。内 面は暗茶色。
21	82	SU07 第1層	弥生土器	壺	-	6.4 (7.8)	やや上げ底。底部は丸味をもつ。外側は 本單位以上のタケハケ調整。	やや上げ底。底部は丸味をもつ。外側は 本單位以上のタケハケ調整。	施土に7-8mmの砂を多く含み、 粗い。焼成やや良。外側は淡茶褐色。 内面は淡茶色。
21	83	SU07 下層	弥生土器	壺	-	6.5 (5.0)	やや上げ底。底部は丸味をもつ。外側は 本單位以上のタケハケ調整。	やや上げ底。底部は丸味をもつ。外側は 本單位以上のタケハケ調整。	施土に7-8mmの砂を多く含み、 粗い。焼成やや良。外側は淡茶褐色。 内面は淡茶色。

(単位: cm)

南西 番号	遺物 番号	出土 遺構	種類	器種	口径	底径 (高台)	基部 (現存高)	形態の特徴・調査・文様	施釉・色調・素地等	備考
21 84	SU07 第5層	弥生土器	甕	-	7.2	(13.9)	-	やや上げ底。底部はやや丸味をもつ。外 面はタケハケ調査。内面は指印圧痕が多 く見られる。	胎土に大粒の砂が多く含み、や や粗い。焼成良好。外面は明茶 褐色。内面は淡茶色。	
21 85	SU07 第1層	弥生土器	甕	-	7.5	(9.5)	-	体部はやや丸みをもつ。外面は本單位以上 のタケハケ調査。内面に指印圧痕が残る。	胎土に大粒の砂多く含み、やや粗 い。焼成良好。外壁は茶褐色。内 面は淡茶色。	
21 86	SU07 下層	弥生土器	甕	-	-	(3.6)	-	上げ底はある。内外面はナガ調査。	胎土に3~4mmの砂粒を含み、や や粗い。焼成良好。外面は茶褐色。 内面は暗茶色。	
21 87	SU07 第5層	弥生土器	甕	8.9	-	(6.4)	-	口縁部は断面をせき、腹部との境に段をも つ。口縁部内面はヘラミガキ調査。体部 に指印圧痕が残る。	胎土に細かい砂を含む。精緻。 焼成良好。淡茶褐色。	外壁磨滅
21 88	SU07 底下層	弥生土器	甕	-	-	(6.6)	-	口縁部は大きく外寄する。腹部は厚壁 で、平底に仕上がる。外壁はヘラミガキ 調査。	胎土に砂粒を含み、やや粗 い。焼成良好。明茶褐色。	内面磨滅
21 89	SU07	弥生土器	甕	-	-	(4.1)	-	外反する口縁部内面を泥足させ、段をも つ。内外面にヘラミガキの施紋が残る。 外壁に丹振りを認める。	胎土に大粒の砂を含み、やや粗 い。焼成良好。茶褐色。	内面磨滅
21 90	SU07	弥生土器	甕	-	-	-	-	外面上に柔の状態とヘラ結みの山形文を施 す。内外面はナガ調査。	胎土に砂粒を含み、やや粗 い。焼成良好。淡茶褐色。	
21 91	SU07 上層	弥生土器	甕	-	-	-	-	外表面と体部の境に2条の沈線をもつ。	胎土に大粒の砂を多く含み、非 常に粗い。焼成良好。茶褐色。	外壁磨滅
22 92	SU07 第1層	弥生土器	甕	-	-	(16.5)	-	全体は厚壁をもつ。周辺に3つの沈線があり る。その左下に木本輪軸の跡を残す。右側は 火照り跡で、左側はカク部を露す。火照り 跡にはナガ調査。	胎土に1m以上の砂粒を多く含む。 焼成不良。外壁は茶褐色。内面は暗茶褐色。	復原最大径 37.4cm 外壁磨滅
22 93	SU07 底下層	弥生土器	甕	6.0	(2.9)	-	-	やや上げ底。体部は程よく立ち上がる。 外壁はヘラミガキ調査を施す。内面はナ ガ調査。	胎土に砂粒を含み、やや粗 い。焼成良好。淡茶褐色。	
22 94	SU07 第1層	弥生土器	甕	-	7.4	(3.1)	-	やや上げ底。底部外壁にヘラミガキ調 査を施す。内面はナガ調査。	胎土は砂粒を少し含み、粗かい。 焼成良好。淡茶褐色。一括茶褐色。	
22 95	SU07 第1層	弥生土器	甕	-	7.4	(4.3)	-	やや上げ底。体部はやや弱気き感に立ち 上がる。外壁に指紋はやや残る。	胎土に人筋の砂を多く含む。焼 成良好。淡茶褐色。	内面磨滅
22 96	SU07 下層	弥生土器	甕	-	15.5	(3.8)	-	やや上げ底。外面に指印圧痕が残る。	胎土に砂粒を多く含む。焼成好 好。淡茶褐色。	内面磨滅
22 97	SU07 第1層	陶文土器	甕	-	-	(4.1)	-	直口縁部は、外に折り返して泥足をさ る。内面に指印圧痕が残る。	胎土に砂粒を少し含む。焼成良 好。茶褐色。	外壁磨滅 朝鮮系
22 98	SU07 下層	陶文土器	甕	-	-	-	-	直口縁とされる。口縁部はわざかに外 面に凹みがある。体部は丸味をもつ。外 面はタケハケ調査。	胎土に人筋の砂を含み、粗い。 焼成良好。淡茶褐色。	内面磨滅 朝鮮系
23 102	SU08	弥生土器	甕	24.2	-	(17.1)	-	前の上辺はやや断らみ、口縁部は丸味 で外に折り返す。口縁部外壁に虹口を施す。 内面はナガ調査。	胎土に砂粒を多く含む。焼成好 好。淡茶褐色。	内面磨滅
24 112	SU10	弥生土器	甕	24.6~ 25.2	8.4~ 9.0	27.3~ 27.7	-	厚壁。体部上位は丸味をもつ。口縁部は 直口縁で、内面は丸味をもつ。外壁は虹 口調査。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良 好。明茶褐色。	
24 113	SU10 底下層	弥生土器	甕	28.1	9.2	27.1	-	厚壁。体部は丸味的に開く。口縁部は 直口縁で、内面は丸味をもつ。外壁はタ ケハケ調査。	胎土に砂粒を多く含み、やや粗 い。焼成やや良。淡茶褐色。	
24 114	SU10	弥生土器	甕	-	-	(12.8)	-	C字縫跡が認められ、腹部に崩落した 跡がある。内面は竹縫文。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良 好。淡茶褐色。	内面磨滅 板付1式
24 115	SU10	弥生土器	甕	-	6.8	(4.8)	-	底足はやや丸味。腹部は東洋的で開 いた。内面ともヘラミガキ調査を施す。	胎土に砂粒を含む。焼成良好。 淡茶褐色。	
27 1	SX04	青磁	皿	-	-	(2.8)	-	外面上に滑撚文を施す。内面見込みに滑撚。	素地は灰白色で、滑撚。焼成良好。 オリーブ色を帯びた透明白物。	中国製
27 2	SX04	青磁	皿	-	4.3	(0.7)	-	外壁は滑撚。内面に滑撚文と片切切りの 溝をもつ。	素地は灰白色で、滑撚。焼成良好。 オリーブ色を帯びた透明白物。	同安窯系
27 3	SX15	土器	壺	19.7	9.6	2.5	-	体部はやや丸味をもつ。底部外壁に半 円形の凹みがある。	胎土に砂粒を多く含む。焼成不 良。明茶褐色。	内外面磨滅
27 4	SX15	土器	壺	12.5	9.5	2.5	-	体部は丸味をもって立ち上がる。底部外 壁には赤切目。	胎土に砂粒を多く含む。焼成不 良。淡茶褐色。	内外面磨滅
27 5	SX15	被窓器	器台	-	-	-	-	外面上に竹縫状の軋糞文を施す。内面は ヨコナガ調査。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良 好。淡茶褐色。	
34 1	SD01 上層	土器	壺	11.0	7.4	2.0	-	体部の中位に段をもち、口縁部は外反す る。底部は赤切目。内面はナガ調査。	胎土に砂粒を少し含み、粗 い。焼成良好。外壁は淡茶色。内 面は淡茶褐色。	外壁磨滅

(単位: cm)	地盤 高さ 番号 番号	出土 遺物	像類	群強	口桟 (高台径)	底径 (底座高)	高さ (底座高)	形態の特徴・病害・文様	施釉・色調・質地等	備考
34 2 SD01	古器	鏡	鏡	15.0	—	(3.9)	口縁部は外反し、見込みに1条の沈線をもつ。△印墨跡は露ぬ。	素地には黒色の粒子を含む。白灰色で、施釉。焼成良好。透明感。	中国製	
34 3 SD01	白磁	鏡	鏡	—	(6.6)	(2.5)	低い割り高台。見込みに1条の沈線をもつ。△印墨跡は露ぬ。	素地は白灰色で、施釉。焼成良好。透明感。	中国製	
34 4 SD01	青磁	皿	皿	—	6.0	(0.9)	体部外周に浅きもつ。内面に墨書きを施す。外縁は露ぬ。	素地は茶灰色で、施釉。焼成良好。透明感。	雄主窯系	
34 5 SD01上層	陶器	皿	皿	—	(3.2)	(1.4)	低い割り出し高台。外面に貫入がみられる。墨書きは露ぬ。	素地は茶灰色で、施釉。焼成やや軟。透明感。李朝		
34 6 SD01中層	陶器	皿	皿	—	3.8	(1.5)	低い割り出し高台。見込みと蓋付に目抜きがある。	素地は茶灰色で、施釉。焼成良好。透明感。	李朝	
34 7 SD01上層	束付	皿	皿	—	4.1	(1.1)	高脚底。見込みに胎上目が残る。墨書きは露ぬ。内面に1条の墨書き、内底に伏兔文。	素地は白灰色で、施釉。焼成良好。透明感。露ぬ部分は褐色。		
34 8 SD01上層	瓦質上器	体	体	—	—	(6.2)	体部は丸味をもつ。口縁部は直線状。底部は平底。外縁は5~6cm単位以下のタテハケ調整。内底にはナガ調整。	胎土に砂粒を少し含み、精緻。焼成良好。淡茶灰色。		
34 9 SD01上層	瓦質土器	壺体	壺体	—	13.0	(3.4)	内底に4本単位の下し目。外縁はタテハケ調整。	胎土に細かい沙を多く含み、粗緻。焼成良好。淡茶灰色。		
34 11 SD01下層	土師器	皿	皿	—	3.8	(1.1)	あり底。内外底はナガ調整。	胎土に細かい沙を少し含み、精緻。焼成やや軟。淡茶色。		
34 12 SD01下層	頬窓器	鉢	鉢	—	—	(3.0)	内底気味の口縁部は肥厚し、底部は尖り。内外底はコヨナガ調整。	胎土に砂粒を含み、精緻。焼成良好。淡茶色。		
34 13 SD01下層	頬窓器	壺	壺	9.6	—	(2.3)	山腰部。口縫部と底部との境に小さな突起をもつ。内底面は凹凸ナガ調整。	胎土は粗緻。焼成良好。灰色。		
34 14 SD01下層	陶器	壺体	壺体	—	—	(5.0)	口縁部は直立し、底部は丸い。内外底は凹凸ナガ調整。	素地は精緻。焼成良好。小豆色で、口縁外周は灰色。	備前燒	
34 15 SD01下層	頬窓器	窓	窓	—	—	—	外縁は平行叩き、内底は背唇状の当て具状。	胎土は精緻。焼成良好。外縁は灰色、内底は暗灰色。		
34 16 SD01下層	頬窓器	窓	窓	—	—	—	外縁は平行叩き、内底は同心円状の当て具状。	胎土は精緻。焼成良好。外縁は灰色、内底は暗灰色。		
34 17 SD01下層	頬窓器	窓	窓	—	—	—	外縁は格子目叩き、内底は同心円状の当て具状。	胎土に砂粒を少し含み、精緻。焼成良好。灰色。		
35 25 SD02	頬窓器	窓	窓	14.1	—	1.9	大片脚は低く、平底。口縁部は折り返し、隙間は2箇所ある。天井部外縁は凹凸部で複数、内底と体部外縁は凹凸ナガ調整。	胎土に砂粒を含み、精緻。焼成良好。灰色。		
35 26 SD02	頬窓器	窓	窓	14.3	(10.2)	4.8	背面四角形の低い背台が底堅模様につく。体部は直線的に叩き、口縁部底部は尖らる。底部と体部の底は丸味をもつ。	胎土に細かい沙を少し含み、精緻。焼成軟。淡白色。	内外面黒感	
35 27 SD02	頬窓器	皿	皿	14.5	11.7	2.3	口縁部は小さく外反。底部は体部の境で割り離れて造る。内底部は凹凸ナガ調整。	胎土に砂粒を少し含み、精緻。焼成軟。淡茶色。		
35 28 SD02	頬窓器	窓	窓	14.2	(9.4)	4.0	背面四角形の字形の背台が底堅模様にて内側にくつく。体部向外反する。内底部は凹凸ナガ調整。内底部はナガ調整。	胎土は精緻。焼成良好。淡灰色。		
35 29 SD02	頬窓器	窓	窓	8.0	—	1.9	口縁部は直線的に叩き、内底部は凹凸ナガ調整。	胎土は精緻。焼成良好。細い小豆色。		
35 30 SD02	土師質土器	縁皿	縁皿	7.0	—	(4.9)	体部は丸味をもち、口縁に径1.5cmの孔をもつ。内外底に指擦痕が残る。	胎土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。明茶褐色。		
35 31 SD02	白磁	碗	碗	14.0	—	(3.4)	上縁口縁。体部は直線的。	素地は無施釉。焼成良好。白灰色。	中国製	
35 32 SD02	瓦質土器	壺体	壺体	—	—	(5.2)	内底に4本単位の下し目。外面に指擦痕が残る。	胎土に細かい沙を含み、やや粗い。焼成良好。外縁は灰色、内底は暗灰色。		
35 33 SD02	陶器	瓶	瓶	—	—	(4.9)	やや上げ底底模。体部は丸味をもって立ち上がる。内底面に墨書き。	素地に大きな砂の跡を含み、やや粗い。焼成やや軟。外縁は焼成で、内部表面は暗褐色、内底は薄小豆色。		
35 34 SD02	土師質土器	瓶	瓶	—	—	—	体部は丸味をもち、内底に墨書きした口縁部は4本の状態に外反する。半周状の底堅模様の底がある。体部外縁に指擦痕がある。	胎土は精緻。焼成良好。淡茶色。		
35 35 SD03	生毛土器	窓	窓	—	—	—	手の上げ窓。内底面はナガ調整。	胎土に大粒の砂を多く含み、粗い。焼成良好。明茶褐色。	外表面焼	

(単位: cm)

青瓦 番号	出土 遺物 番号	種類	器種	口径	高径 (高台径)	基高 (現存高)	形態の特徴・調査・文様	施釉・色調・発光等	備考
36 42	SD03	土器器	高杯	-	-	-	簡部上部に径0.4cmの孔をもつ。内面に網目模様。内外側はナガ調整。	胎土に砂を少し含み、緑釉。施成良好。淡茶褐色。	
36 43	SD03	土器器	高杯	-	10.2	(6.2)	器部、底盤は強く開き、内面は筒部と器部の間に隙をもつ。内面ナガ調整。	胎土に人粒の砂を多く含み、やや粗い。施成良好。明る褐色。	
36 44	SD03	土器器	瓶	(底) 3.4	-	-	把手、指揮圧痕が残る。	胎土上に砂を少し含み、暗緑。施成良好。淡茶褐色。	
36 45	SD03	瓦質土器	鉢	-	-	(4.8)	コネ部が内腹につまみ出す。口縁部内側にはヨコナガ調整。体部内面に指揮圧痕が残る。外腹はナガ調整。	胎土に砂粒を少し含み、暗緑。施成良好。淡茶灰色。	
36 46	SD03	瓦質	皿	-	8.1	(2.0)	輪ノ目凹凸台、外縁に井字模様と4条の輪縁。瓦込みに1条の輪縁。内底に文字を施す。	素地は白色で、暗緑。施成良好。伊万里式透明白。	
36 47	SD03	瓦器	笠卓具	-	6.8	10.9	トチン。而歛圧痕が残る。	胎土上に大粒の砂を含み、暗緑。施成良好。茶色。	
36 49	SD04	古器	碗	-	(5.3)	(2.6)	開り出し高台。内底見込みに沈線。外縁下部まで斜性。	素地は灰白色で、暗緑。施成不良。オーリーブ色が施成不足のため浅色。	中国製
36 50	SD04	陶器	灯明皿 (受け皿)	5.0 8.5	4.6	3.0	内部に油溶まり。底部は灰り調整。外縁は薄輪相。	素地は淡茶色で、暗緑。施成良好。透明白。	
36 51	SD04	集付	皿	14.0	-	3.6	輪花口縁部。内外面に呂須支柱。高台部に輪相。蓋付に砂粒が残る。	胎土は白色で、暗緑。施成良好。透明白。蓋付は濃藍色。	伊万里窯
36 52	SD04	瓦質土器	火鉢	27.2	-	(3.7)	口縁輪部を強く引き抑げる。内面はヨコナガ調整とケテ調整。外縁はナガ調整。外縁と口縁部の内面に施しを施す。	胎土に細かい砂を少し含み、やや粗い。施成良好。外縁は淡茶色。	
36 53	SD04	瓦質土器	臺	-	-	(7.0)	口縁部は肥厚し、内傾する。端部は平底。内外面はヨコナガ調整。	胎土に細かい砂を少し含み、やや粗い。施成良好。淡茶色。	
36 54	SD04	瓦質土器	火鉢	-	-	(4.7)	断面の字状の高台。内外面はナガ調整。	胎土に細かい砂を少し含み、暗緑。施成良好。淡茶灰色。	
36 55	SD04	土器器	切輪草 (底)	4.2	-	(6.8) 0.7	一部を欠く。土器片から加工。穿孔追加。ナガ調整。	胎土に当い砂粒を多く含む。施成良好。淡茶褐色。	
36 60	SD05	土器質 土器	鉢	-	-	(7.0)	二輪部は極く内傾し、輪脚を上につまみ出す。内底はヨコカベ裏差。外縁上辺はヨコハケ調整。下辺はチテハケ調整。	胎土に細かい砂を含み、やや粗い。施成良好。淡茶色。	
37 61	SD06	瓦質土器	火鉢	-	6.1	(8.9)	支厚で、やや上げ形。外縁は指揮圧痕が残る。	胎土に砂を含み、暗緑。施成良好。淡茶色。	当社蔵
37 62	SD06	器皿土器	甕	-	6.4	(4.1)	向厚で、上厚底。外縁は指揮圧痕が残る。	胎土に外側の砂を多く含む。施成良好。外縁は明茶褐色。内底は内面削減。	
37 63	SD06	瓦質器	甕	12.5	6.4	3.6	天井部外周部はヨコカベ裏差。体部は丸削をもつ。口縁部の内側に砂をもつ。外縁上辺にヨコハケ調整。	胎土は暗緑。施成良好。青灰色で、外縁上辺は茶褐色。	
37 64	SD06	瓦質器	壺	-	(9.1)	(2.1)	断面の字状の高台が、底面と体部の間につく。外縁はナガチケ調整。内底はチテ調整。	胎土は暗緑。施成良好。青灰色。	
37 65	SD06	瓦質器	甕	-	-	-	外縁は扇子目凹き、内底は凹心円状の当て共模。	胎土は暗緑。施成良好。青灰色で、内底はやや含みを寄せる。	
37 66	SD06	瓦質器	甕	-	-	-	外縁は平行叩き。内底は青海波紋の当て共模。	胎土は暗緑。施成良好。青灰色。	
36 67	SD06	土器	古器	瓶	15.2	-	(4.9) 体部は丸味をもち、口縁輪部は尖る。外底に縦溝がある。	素地は茶灰色で、暗緑。施成良好。胎土は暗茶色。	龍泉窑青
38 68	SD06	土器	白器	瓶	-	(7.3)	有り高台。体部は丸味をもつ。高台上辺まで施釉。見込みに巨蟹が残る。	素地は淡灰白色で、暗緑。施成良好。乳白色。	青
38 69	SD06	白器	瓶	-	5.3	(2.4)	底盤は厚い切り出し高台。外縁は底盤。	素地は淡灰白色で、暗緑。施成良好。青灰色。	中国製
38 70	SD06	土器	古器	皿	9.3	3.0	2.6 体部中央でゆるく済出し、口縁部は外反する。外底部は底盤。見込みに1条の比較。内底部に網状文。	素地は淡茶灰色で、暗緑。施成良好。緑色を帯びた透明釉。	河安窯系
38 71	SD06	青器	碗	-	(4.5)	(2.7)	高台が高い。高台外縁の上辺まで施釉。	素地は淡茶灰色で、暗緑。施成良好。緑色を帯びた透明釉。	中国製
38 72	SD06	青器	碗	-	(5.5)	(2.5)	高台外縁の上辺まで施釉。胎は厚くかかる。	素地は灰色で、暗緑。施成良好。灰暗色を帯びた透明釉。	龍泉窯系

(単位: cm)

種別 番号	遺傳 番号	出土 場所	種類	器種	口径	底坪 (英台径)	部高 (残存高)	形態の特徴・調査・文様	地胎・色調・素地等	備考
38	73	SD08	青磁	瓶	-	(6.1)	(2.7)	新凸コの字形の高台。外縁は体部下位まで施釉。見込みに目窓が残る。	本胎は茶灰色で、精緻。焼成良好。緑灰色を帯びた透明胎。	越州窯系
38	74	SD08 上層	青磁	瓶	-	(8.7)	(3.8)	高台外壁上位まで施釉。見込みに目窓が残る。	本胎は淡茶色で、精緻。焼成良好。薄っ茶緑色。	越州窯系
38	75	SD08	白磁	瓶	9.2	(3.9)	4.2	高台は細い。体部は半球体を呈する。外壁に草花文。	本胎は灰白色で、無鉛。焼成やや軟。透明胎。朱付は淡茶色。	伊万里焼
38	76	SD08	白磁	紅口	6.0	2.1	1.2	外縁に唐草文の模押し。体部上位まで施釉。	本胎は淡茶色で、精緻。焼成やや軟。乳白色。	伊万里焼
38	77	SD08	白磁	皿	-	(7.2)	1.8	外縁に文様と園籠。内面に文様。見込みに開窓。内面にコンニャク版。	本胎は灰白色で、精緻。焼成良好。透明胎。朱付は藍色。	伊万里焼
38	78	SD08	白磁	皿	-	(3.2)	(1.5)	高台は粗く高い。蓋付は昂尾。内底にコンニャク版。外縁見込みに開窓。	本胎は淡茶色で、精緻。焼成良好。白色釉。朱付は淡金色。	伊万里焼
38	79	SD08 上層	白磁	皿	-	(8.0)	(1.5)	蛇ノ目四高台。内底に「木文面」。	本胎は白灰色で、精緻。焼成良好。透明胎。朱付は藍色。	伊万里焼
38	80	SD08	白磁	瓶	-	(6.2)	(4.0)	高台は粗く高い。体部は直線的に斜く。外縁に文様と開窓。見込みに開窓。内底に齊の文字。蓋付は昂尾。	本胎は白灰色で、精緻。焼成良好。透明胎。朱付は淡青灰色。	伊万里焼
38	81	SD08 上層	土加賀 上輪	鉢	-	-	-	口座部は肥厚し、腹部は平底。外縁はタケハク調溝。内面はヨコナガメ調溝。	胎土は精緻。焼成良好。淡茶色で、外縁はやや灰色を帯びる。	
38	82	SD08	土加賀 上器	火舎	-	-	(8.1)	口座部は肥厚し、腹部は平底。口座部下に僅2mmの孔がある。内外両面はタケハク調溝。ハマの単位は6~7mm。外縁。	胎土に砂粒を少し含む。焼成良好。茶灰色。	
38	83	SD08	瓦質土器	足絆	-	-	-	両西片。先端を尖く。底部に格子目叩きが残る。内底にはナガメ型。	胎土は精緻。焼成良好。茶灰色。	
38	84	SD08	瓦質土器	臺	62.4	17.2	54.0	下部・体部は丸地で、つぶ口縁部は肥厚し。内側する。周囲は平底。外縁口縁部に1箇所に開窓。内底に開窓。内面はヨコナガメ調溝。内底に開窓。内底に開窓。内底に開窓。	胎土は精緻。焼成良好。淡茶褐色。	
39	85	SD08	陶器	擂鉢	31.4	(14.1)	16.8	前面表面両側の貼付け芯部。体部は直線的に斜く。口座部は肥厚し。周囲は平底。内底に開窓。内底に開窓。内底に開窓。	胎土は茶灰色で、精緻。焼成良好。小豆色。	
39	86	SD08	陶器	擂鉢	28.3	-	(6.7)	口縁部は肥厚し。周囲は平底。内底に6本単位の下し目。内外面に開窓。	胎土に砂粒を少し含む。茶褐色で、精緻。焼成良好。小豆色。	
39	87	SD08	陶器	擂鉢	-	-	-	口縁部は内厚し。底足。周囲は丸い。外縁に縦溝部下に横比較的。内底に6本単位の下し目。内外面に開窓。	胎土は淡茶色で、精緻。焼成良好。小豆色。	
39	88	SD08	陶器	擂鉢	-	(11.8)	(6.9)	口縁部は肥厚し。周囲は丸い。内底に下し目。外縁は高台で施釉。	胎土は淡茶褐色で、精緻。焼成良好。小豆色。	
39	89	SD08	陶器	擂鉢	-	(15.7)	(6.6)	貼付け高台。内底に下し目。外縁は高台半位まで施釉。	胎土に砂粒を少し含む。茶褐色で、精緻。焼成良好。小豆色。	
39	90	SD08	陶器	瓶	-	13.6	(22.3)	半球。体部は丸味をもつ。刃が残る。内底部に目窓が残る。内外面に施釉。肩部に點垂れ。	胎土は茶灰色で、精緻。焼成良好。緑灰色。及び黒褐色。	
42	1	SP07	灰白式 土器	鉢	-	7.3	(2.5)	体部は丸味をもつ。内外両面はハリミガキ調溝。底部にハムノ突起。底部に墨跡。	胎土に砂粒を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
42	2	SP15	灰白式 土器	甕	-	7.0	(2.9)	体部は厚い。内外面に横幅圧痕が残る。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。外縁は白粉。内底は淡茶褐色。	
42	3	SD09	土加賀	鉢	13.7	-	5.3	半球形を呈す。内底はハラケツリ調溝。外縁はヨコハケ調溝。	胎土に砂粒を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
42	9	表七	白磁	碗	-	(7.6)	(2.3)	低い底り高台。体部まで施釉。外縁に節理文。	胎土は灰白色で、精緻。焼成良好。乳白色。	中国製
42	10	表七	白磁	碗	-	(6.6)	(2.1)	低い底り高台。外縫露底。	胎土は灰白色で、精緻。焼成良好。乳白色。	中国製
42	11	表土	陶器	皿	-	5.4	(1.6)	全体に施釉。縁は軽くかかる。見込みに目窓が残る。	胎土は淡茶色で、精緻。焼成良好。乳灰色。	小朝
42	12	表土	白磁	紅皿	5.6	2.0	1.4	外縁に施足落草文の型押し文。外縫露底。	胎土は淡茶色で、精緻。焼成良好。乳白色。	ほぼ完形 伊万里焼
42	13	表土	土加賀	瓶	(透) 3.5	-	-	上部に腹長の切れ込み。ナガ調整。	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。茶褐色。	

Tab. 5 第78次調査 軒丸瓦計測表

(単位: cm)

探査 番号	遺物 番号	出土 遺構	文様 種類	性 別	内区幅 幅	外区幅 幅	外縁		溝 厚さ	溝 高さ	側面 厚さ	側面 高さ	色 調	胎 土	燒 成	形態・製作技法	備 考
							前 縁	後 縁									
40	96	SD06	三巴文	12.6	-	-	1.9	0.4	0.9	0.3	2.3	-	茶色がかった 褐色	粘土	良好	弦文8箇、瓦当の一部 のみ。 焼しを施す。	

Tab. 6 第78次調査 軒平瓦計測表

(単位: cm)

探査 番号	遺物 番号	出土 遺構	文様 種類	性 別	上外縁		下外縁		胎区幅	腹厚さ・色 調	胎 土	燒 成	形態・製作技法	備 考	
					厚 さ	高 さ	厚 さ	高 さ							
40	93	SD06	-	-	0.7	0.4	-	-	4.2	-	暗青灰色	粘土	良好	胎区には印記。谷部、 背部はナデ調整。全体に 施しを施す。	

Tab. 7 第78次調査 丸瓦計測表

(単位: cm)

探査 番号	遺物 番号	出土 遺構	長 さ		幅		高 さ	弧 深	色 調	胎 土	燒 成	形態・製作技法	備 考	
			玉縁部	背 部	前端部	後端部								
35	37	SD02	-	-	-	-	-	-	灰色	砂粒を少し含み、やや粗い	良好	背部はナデ調整。 谷部は1.0cm幅の 施しを施す。	厚さ 1.0cm	
39	91	SD06	-	-	-	-	-	-	暗茶灰色	やや粗い	良好	背部は格子目印記。 底、谷部は粗い有目痕。	近代	
40	92	SD06	-	(現存長) 11.7	(現存幅) 10.6	-	5.3	3.5	暗茶灰色	細かい砂を含み、やや粗い	良好	背部はタテ方向の ナデ調整。谷部は 方正調整。小切込あり。 施しを施す。		

Tab. 8 第78次調査 平瓦計測表

(単位: cm)

探査 番号	遺物 番号	出土 遺構	長 さ	幅 (現存長)	厚 さ	幅		弧 深	色 調	胎 土	燒 成	形態・製作技法	備 考
						前 端部	後 端部						
35	35	SD02	(17.2)	1.3-1.6	(現存幅) 13.4	-	2.8	背部は灰色。 谷部は濃灰色	大粒の砂を含み、やや粗い	良好	谷部・背部ともナデ調整。		
36	56	SD04	(12.0)	-	(現存幅) 9.2	-	-	淡茶灰色	細かい砂を含み、粗緻	良好	谷部・背部ともナデ調整。		
40	94	SD08	(9.0)	1.9	(現存幅) 9.9	-	-	青灰色	砂粒	良好	谷部・背部ともナデ調整。側面 に「今宿市右門」の刻印。		

Tab. 9 第78次調査 瓦塙計測表

(単位: cm)

探査 番号	遺物 番号	出土 遺構	種類	長 さ (現存長)	幅 (現存幅)	幅		厚 さ	色 調	胎 土	燒 成	形態・製作技法	備 考
						前 端部	後 端部						
34	10	SD01	方形塙	(6.8)	(9.8)	2.0	茶褐色	人粒の砂を含み、 やや粗い	良好	谷部はタテ方向の ナデ調整。背部は 密緻。			
35	36	SD02	方形塙	12.0	10.8	2.0	淡灰色	砂粒を少し含み、 粗緻	良好	谷部・背部ともに ナデ調整。全体に 施しを施す。			

Tab.10 第78次調査 石製品一覧表

(単位: cm)

番号	遺物番号	出土遺構	器種	長 (保存長)	幅 (保存幅)	厚 (現存厚)	重量 (g)	石材	色調	特徴
10	6	SC01	磨製石斧	2.6	1.1	0.6	—	頁岩	灰褐色	柳葉形右側。基部先端を欠く。断面菱形。
10	7	SC01	打製石錐	2.7	1.8	6.4	—	黑曜石	黑色	横長の削片を加工。両面は丁寧な削離調整。
10	13	SC02・03	敲石	8.0	7.1	6.1	580	玄武岩	灰色	やや角ばった不整円錠で、打製面を残す。磨石としても利用。
10	14	SC02・03	敲石	8.0	7.8	5.7	630	玄武岩	灰色	やや歪な円錠で、一部に打製作を残す。磨石としても利用。
10	15	SC03	打製石錐	2.05	1.8	0.35	—	黑曜石	黑色	基部の抉りは浅い。削離調整は無い。
10	16	SC03	打製石錐	2.3	1.9	0.5	—	黑曜石	黑色	先端部と一方のかみりを欠く。削離調整は粗く、未製品と考えられる。
10	17	SC03	打製石錐	1.8	1.6	0.4	—	黑曜石	黑色	削片錐で、先端部を欠く。基部の抉りは浅い。縁辺の裏面は平。
10	18	SC03	打製石錐(未製品)	2.2	1.6	0.5	—	サヌカイト	灰褐色	先端部を欠く。表面の削離調整は粗い。
10	19	SC03	打製石錐	1.5	1.4	0.4	—	黑曜石	黑色	小型錐。基部の抉りは浅い。
10	20	SC02・03	砾石	10.8	10.3	2.9	—	細粒砂岩	茶褐色	扁平な板石を利用。両端を欠く。土としてA面と両小口面の3面を利用。
10	21	SC03	砾石	15.8	6.1	2.6	—	細粒砂岩	灰褐色	表面は馬耳方粒状を呈す。主としてA面と両小口面の3面を利用。B面は調整面のみ。
17	8	SU02	打製石錐(未製品)	2.4	1.6	0.4	—	黑曜石	黑色	鋭利な三角錐で、先端部を欠く。
17	9	SU02	打製石錐	(1.8)	1.8	0.3	—	黑曜石	黑色	扁平な削片錐である。先端部を欠く。抉りは浅い。削離調整は大きく、やや粗い。
17	10	SU02	打製石錐(未製品)	(2.7)	(1.7)	0.5	—	黑曜石	黑色	横長の削片を利用。片面に自然面を残す。
17	13	SU03	敲石	14.4	12.9	5.6	—	砂岩	淡赤色	横長長方形を呈す。A面と2側面を斜面として利用。B面と小口面は直取り整形のまま。
19	31	SU05下層	磨製石斧(未製品)	16.0	6.6	4.1	—	玄武岩	淡灰色	脇辺に削離痕、敲打痕がみられる。刃部は緩慢。
19	32	SU05下層	磨製石斧	(8.9)	8.1	3.0	—	玄武岩	灰青色	基部・刃部を欠く。再加工の途中。小口及びB面の脇辺に敲打を加える。
19	33	SU05	磨製石斧	(6.2)	7.6	4.3	—	玄武岩	灰色	刃部の残欠を再加工。破缺部分の角も敲打で処理している。敲石に軽用か。
19	34	SU05	石斧(人製品)	(14.4)	(11.0)	4.3	—	玄武岩	灰色	柳葉形からった特異な削片を利用。小口と直側面に複数の削離痕。B面に大きな削離痕。右側面は自然面を残す。
19	35	SU05下層	磨製石斧(未製品)	(6.3)	5.2	2.0	—	玄武岩	灰色	刃部を欠く。脇辺に敲打痕が残り、磨きが完了していない。
19	36	SU05下層	石斧カ	9.4	12.2	2.1	—	玄武岩	灰色	横長の削片を加二中である。B面に削離面を残す。脇辺に敲打して処理している。
19	37	SU05下層	磨石カ	6.7	7.6	2.9	—	玄武岩	灰色	扁平な削片を利用。D面に削離痕を残す。細片に敲打調整。
19	38	SU05下層	敲石	6.4	7.2	4.3	—	玄武岩	灰色	凹みのある削片を利用。圓錐を削離調整により整形。

番号	測定番号	出上遺傳	器種	長さ (現存長)	幅 (現存幅)	厚さ (現存厚)	重量 (g)	石材	色調	特徴
19	39	SU05	磨石	8.3	7.8	7.0	760	玄武岩	灰色	やや角をもった不整円錐。剝離痕を残す。磨石としても利用。
19	40	SU05下層	磨石	6.3	6.7	5.0	360	玄武岩	灰色	やや平坦な球体で。一部に剝離痕を残す。磨石としても利用。
19	41	SU05下層	磨石	5.6	5.4	5.2	260	玄武岩	灰色	不整円錐で、表面に剝離痕が残る。磨石としても利用。
19	42	SU05下層	石錐	5.3	6.1	1.8	-	玄武岩	暗茶灰色	下半を欠く。扇形な自然石を利用。3方に浅い抉りがある。
19	43	SU05下層	石錐	7.8	4.9	1.0	-	玄武岩	暗茶灰色	扇形な自然石を利用。4ヶ所に横掛けの浅い抉りを入れる。
19	44	SU05	研石	6.9	5.6	2.7	-	細粒砂岩	茶褐色	刃削面を欠く。小口・A・B面とも研取り調整。A面を弧面として利用。
19	45	SU05中層	石丸丁	(6.3)	4.2	0.4	-	粘板岩	淡茶色	表裏の風化が著しい。両刃。両方からの穿孔。
22	99	SU07第1層	石斧	7.3	9.2	1.6	-	玄武岩	暗茶色	磨製石斧の成片を再加工。B面は剝離痕を残す。1刃に刃斧の側刃を残し、3刃に施打跡を加える。
22	100	SU07	打製石錐 (未製品)	1.6	1.3	0.4	-	黑曜石	黑色	小型錐。基部の抉りは浅く、完了していない。両方の入り口の先端を欠く。B面の剝離調整は丁寧。
23	103	SU08櫛土	磨製石斧	(9.4)	(6.5)	(3.7)	-	玄武岩	淡茶青色	片面を欠損する。全体に施打痕が残る。表裏は風化。
23	104	SU08櫛土	磨製石斧	(11.8)	(9.2)	(3.7)	-	玄武岩	暗茶青色	人面石斧で、基部とB面の一部を欠く。刃部に使用痕がみられる。風化が著しい。
23	105	SU08下層	石丸丁 (未製品)	5.9	9.2	0.5	-	粘板岩	淡茶色	一端を欠く。刃部は刃刃。破損部を再加工している。刃厚はない。風化が著しい。
23	106	SU08櫛土	石丸丁	(7.6)	6.1	(0.9)	-	粘板岩	淡茶色	両端を欠く。刃部は刃刃。孔は径0.5cmで、2方向からの穿孔。風化が著しい。
23	107	SU08底	石丸丁	(7.2)	(11.3)	(0.6)	-	粘板岩	淡茶青色	風化が著しい。刃部の2/3のみ残存。刃部は刃刃だが、B面の穿しきは浅い。
23	108	SU08	砾石	4.4	4.1	2.9	-	砂岩	淡茶色	所附の不要方形。小口とB面を欠く。一方を欠く。3面を弧面として利用。左側面には、玉置きと考えられる痕跡が残る。
23	109	SU08	砾石	8.9	2.4	1.5	-	泥岩	暗灰褐色	丸味をもった三角柱状を呈する。一方を欠く。3面を弧面として利用。
23	110	SU08底	砾石	8.8	5.7	2.2	-	硬質細粒 砂岩	暗茶灰色	扁平な石を利用。両面と箇面の一部を弧面として利用。正面の2/3に施打調節が確認され施打痕が残る。
23	111	SU08	打製石錐	2.2	1.5	0.4	-	サヌカイト	墨灰色	三角錐。片面に大きな剝離痕を残す。基部は丸く菱形する。
34	18	SD01	石錐	-	-	-	-	滑石	墨灰色	成片。外周にノミ整形形。
34	19	SD01上層	石丸丁	(3.9)	4.5	0.4	-	粘板岩	淡茶灰色	両端を欠く。両刃。孔径0.6cmで、対方からの穿孔。
34	20	SD01	砾石	6.1	5.3	3.3	-	粗粒頁岩	淡茶色	手持ち砾石の成片。孔径0.5cmの鍛造し孔をもつ。主としてB面を利用。
34	21	SD01	石場空塊	9.8	10.5	9.9	-	砂岩	茶褐色	基部を欠く。宝刀印塔の空座と考えられる。
34	22	SD01上層	打製石錐	2.25	1.9	0.3	-	サヌカイト	暗灰色	扇形な三尖錐。先端部を欠く。B面に大きな剝離痕を残す。風化している。

標記番号	造物番号	出土遺物	器種	長 (横径)	幅 (横径)	厚 (現存厚)	重 量 (g)	石材	色調	特徴
34 23	SD01下層	打製石器	2.0	1.8	0.4	-	黒曜石	黒色	鋸長斜刃を用いる。一部に未加工面を残す。剝離調整は丁寧。	
34 24	SD01	石刀	3.5	1.9	0.6	-	黒曜石	黒色	背面三角形の鋸長の削片を利用。片面に自然面を残す。逆刃の一部に刃脚調整がある。	
35 38	SD02	石斧 (未製品)	9.7	6.6	2.6	-	輝岩	淡青褐色	刃部を大きく。側面には敲打痕。風化が著しい。	
35 39	SD02	打製石器	1.9	1.6	0.5	-	銀河石	黒色	両厚の三角形である。先端部と一方のかえりの先端を大きく。丁寧な調整を行う。	
36 48	SD03	轍石	6.0	5.4	3.8	230	玄武岩	灰青色	角錐を使用。おもに角部を用いる。各面に大きな自然面を残す。	
36 57	SD04	鉄石	10.1	3.4	0.7	-	霞碧岩	暗灰色	長い吸石を利用。片方の小口を大きく。両面に長い研磨痕が残る。	
36 58	SD04	磨製石斧	4.5	10.9	2.8	-	玄武岩	灰褐色	基部の鋸半分の破片を再加工。剝離調整部分は使用により残れる。	
36 59	SD04	打製石器 (未製品)	1.9	1.5	0.55	-	黒曜石	黒色	内厚の三角形である。調整は粗い。一部に自然面を残す。	
40 96	SD05	磨製石斧	9.8	5.5	2.8	230	玄武岩	暗灰色	鍛錬と基部に剝離調整痕。敲打痕が残る。刃部は磨きされている。呑呑用品。	
40 97	SD05	磨製石斧	10.2	5.2	3.7	-	玄武岩	暗灰褐色	刃部を大きく。全面に研磨を加える。	
40 98	SD05	磨製石斧	10.9	4.8	3.3	290	蛇紋岩	緑色	刃部と刃柄に長い吸石痕。両側面に敲打痕が残る。	
40 99	SD05	石斧 (未製品)	15.6	7.6	3.5	-	玄武岩	淡灰色	刃部と刃柄に長い吸石痕。右側面に敲打痕が残られる。	
40 100	SD05	磨製石斧	9.5	7.5	4.8	-	玄武岩	淡灰色	基部を大きく。無刃に丁寧な品打調整。	
40 101	SD05	磨製石斧	11.8	8.2	3.4	-	玄武岩	暗灰色	刃部と基部を大きくした刃片を両刃面。両側面に敲打痕が残る。両小口に敲打痕がある。	
40 102	SD05	磨製石斧 (未製品)	(7.4)	6.0	2.9	-	玄武岩	淡灰褐色	刃部を大きく。軋跡參形容、敲打痕が残る。研磨が一部にある。表面の風化が著しい。	
40 103	SD06上層	石斧墨石 (未完)	24.0	11.9	8.8	-	玄武岩	淡灰黑色	柱状を呈する。	
41 104	SD06上層	磨石	6.4	6.0	4.9	290	玄武岩	暗青褐色	半球状を呈する。磨石としても利用。	
41 105	SD06	磨石	6.1	6.2	5.9	520	玄武岩	暗青褐色	角をもった不規則形。一部剝離面を残す。	
41 106	SD06	磨石	9.8	10.3	4.1	-	輝紋玢岩	淡茶色	下半を大きく。全面を利用するが、側面の利用が著しい。	
41 107	SD06	磨石	8.8	6.3	3.4	-	輝紋玢岩	淡茶色	上面と下小口を弧面として利用。他の面取りのみ。	
41 108	SD06	研石	13.4	10.0	8.2	-	砂岩	淡褐色	右側面を大きく。5面を利用。主として八面を利用。万物の象徴あり。	
41 109	SD06上層	研石	5.7	6.6	3.3	-	細粒頁岩	淡茶色	3面を延ばして丸形。上小口は面取り調節。右側面は自然面を残す。	
41 110	SD06	板磚	6.6	9.7	6.9	-	砂岩	暗茶色	板磚の質感・韌性。上部の側面にノミ彫形。	
42 4	SP66	砾石	12.7	10.8	11.0	-	砂岩	淡茶色	変板石。両面及び、側面の4面を優選として利用。小口には面取りのノミ度が残る。	
42 5	SP35	打製石器	1.9	1.4	0.3	-	サスカイト	暗灰色	片方のかえりの先端を大きく。調整は丁寧である。	
42 6	SP74	打製石器	2.6	1.5	0.5	-	サスカイト	黑灰色	大型の石核。基部及び、無刃の一部を大きく。剝離痕は粗い。	

Tab.11 第78次調査 玉類計測表

(単位: cm)

辨証 番号	遺物 番号	出土遺構	器種	長	径	厚	孔径	材質	色調	特徵
13	5	SK09	小玉	—	0.35	0.2	0.1	ガラス	緑色	
22	101	SU07	管玉	0.6	0.35	—	0.2	碧玉	綠灰色	下平を欠く
35	40	SD02下附	小玉	—	0.65	0.55	0.1	ガラス	濃緑色	
42	7	SP65	管玉	0.4	0.4	—	0.15	碧玉	緑灰色	下平を欠く
42	8	SP66	管玉	0.5	0.3	—	0.1	碧玉	緑色	

第4章

有田遺跡 第79次調査

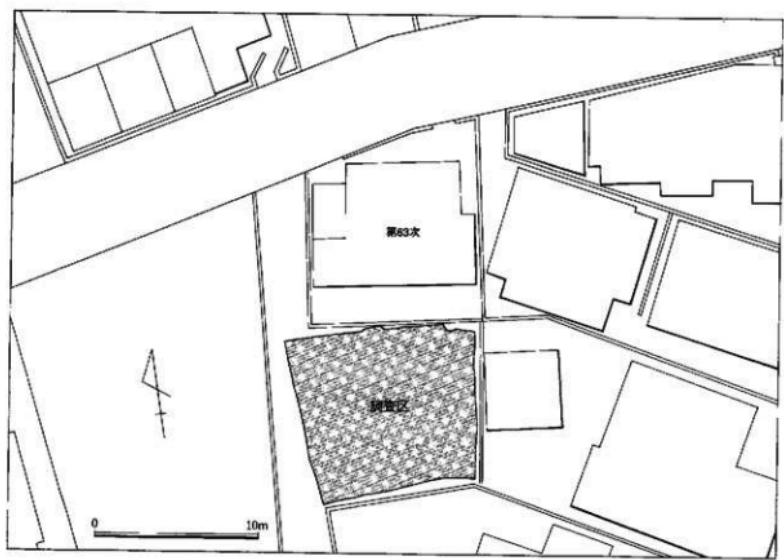


Fig.44 第79次調查地点位置図（縮尺1/300）

第4章 第79次調査 (調査番号8307)

1. 地形と概要

(1) 立地

調査対象地は、福岡市早良区小田部1丁目225-1・2番地に所在し、発掘調査面積は143m²である。有田・小田部台地は、北へ向かって伸びる舌状の分枝台地を多く派生しているが、この中でも小田部1丁目周辺の台地は、標高10m前後を割り、周辺では最も高い位置にある。台地の東側は急斜面を形成するが、西側は緩傾斜である。有田・小田部台地の北側は室見川の蛇行により小断崖を形成している。

当該地は舌状に分枝した小台地上に立地し、小断崖に近い台地尾根筋上に位置する。北側には第25・27・37次の調査が実施されている。第25・37次調査では小規模な建物群が、南側の第26次調査では、11世紀代の土壙墓や掘立柱建物群を検出している。昭和57年度に発掘調査を実施した第63次調査地は、当該地の北側に隣接しており、ここでは掘立柱建物7棟、及び構1条を検出した。当該地においては、同様な建物の存在が予想されるところであった。

(2) 概要

昭和58年に専用住宅の改築のため確認申請が行われており、試掘調査の結果、掘立柱建物跡を検出した。福岡市教育委員会は国庫補助を得て、昭和58年度事業として発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和58年6月9日～6月15日迄実施した。既存住宅の改築になるため、遺構面は擾乱が多く、良好ではなかった。表土は、厚さ約20cm程度であり、表土、擾乱土の除去によって、遺構面のローム層が表出する。

遺構は、掘立柱建物3棟、及び柱穴を検出した。柱穴の覆土はいずれも黒褐色粘質土である。

2. 遺構・遺物説明

(1) 掘立柱建物 (SB)

3棟を検出したが、主軸方向及び、規模は第63次調査に類似するものである。規模については、Tab.12第63・79次調査掘立柱建物計測表を参照されたい。

これらの建物は一群を形成するものであり、且つ、今後の建物呼称の煩雑さを避けるために通し番号とする。すなわち、第79次調査検出の掘立柱建物については、第63次調査の掘立柱建物に連続するものとしてSB08・09・10を付与する。

SB08 (Fig.46) 搪乱のため大部分の柱穴が削平を受けているが、残った柱穴の組み合わせ、柱方向により、桁行3間×梁行2間規模の倒柱だけの掘立柱建物が推定できる。主軸は南北方向で、柱穴径36～42cm、深さ7～20cmを測る。各柱間は平均で、桁行約5.8尺を測る。

SB09 (Fig.46) SB08の東側に平行している柱列で、SB08の庇とも考えられるが、柱列がSB08の桁行規模を超える長さを示しているところから、別の建物と考えた。倒柱だけの掘立柱建物が推定でき



第79次調査区全景（西から）

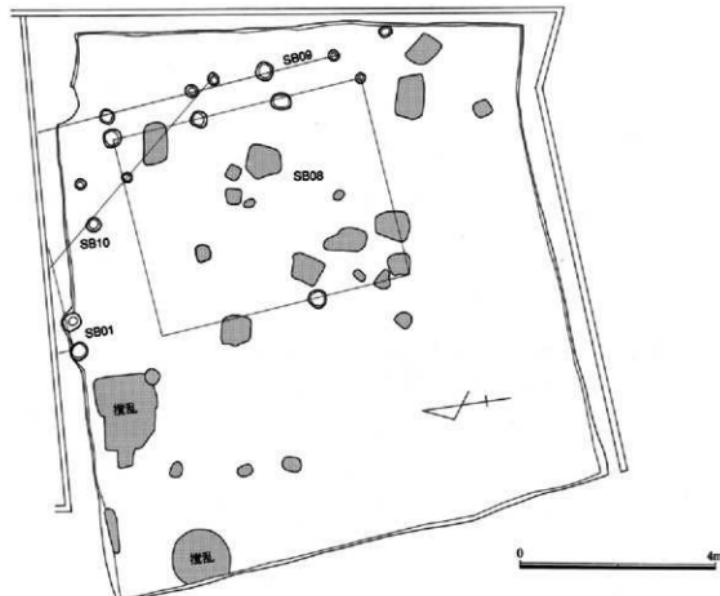


Fig.45 第79次調査造溝配置図（縮尺1/100）
※造溝番号は、第63次調査に統一する

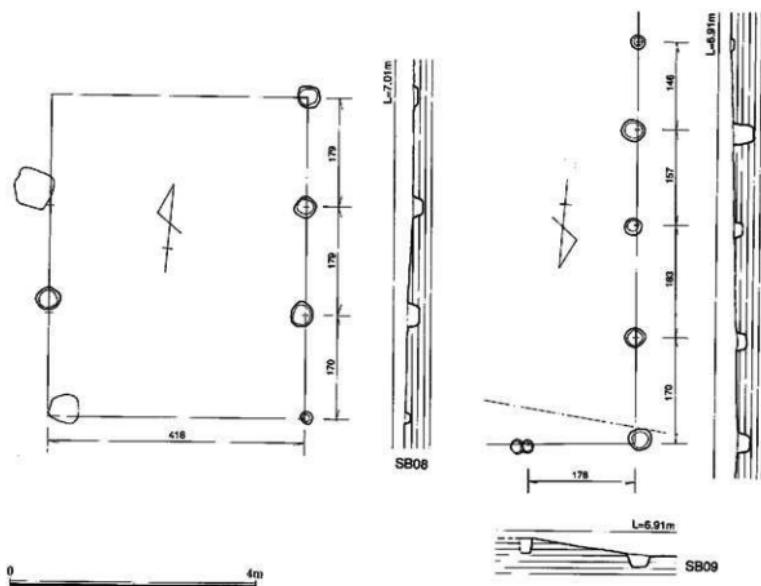
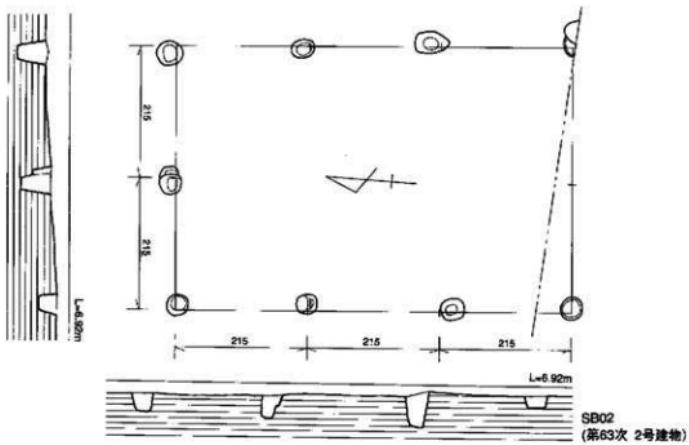


Fig.46 第63・79次調査 掘立柱建物SB02・08・09実測図 (縮尺1/80)

Tab.12 第63・79次調査 据立柱建物一覧表

(1尺=30.3cm)

遺構名	規 模	断 行		乘 さ		方 位	古墳標 (m)	柱 穴 状 況						出土遺物	備 考
		主軸(尺)	柱間寸法(尺)	奥典(尺)	柱間寸法(尺)			Pit数	深 度	長 度	幅 備	柱根幅			
SB01	3×2	600(20)	180(6) 240(8) 180(6)	465(15.5)	180(6) 285(9.5)	N4°W	27.9	9	8~26	28~30	28~29	10			第63次1号建物 と同一
SB02	3×2	625(21.5) 215(7.2) 215(7.2)	215(7.2)	430(14.3) 215(7.2)	215(7.2)	N7°W	27.74	8	30~50	28~45	28~32				SB01)と切り合 る63次2号建物 と同一
SB03	2	420(14)	210(7) 210(7)			N7°E		3	30~25	46~48	40~45	15			北側限界地。 63次3号建物 と同一
SB04	2×1	350(10.7)	160(5.3) 160(5.3)	160(5.3)	160(5.3)	N5°W	5.12	6	40~50	30~45	30~42				東側限界地。 63次4号建物 と同一
SB05	1×1	150(5)	150(5)	150(5)	150(5)	N3°E	2.25	4	25~42	18~28	18~20				63次5号建物 と同一
SB06	1×1	225(7.4)	227(7.5)	195(6.4)	197(6.5)	N81°E		4	18~50	25~40	25~30				63次5号建物 と同一
SB07	1×2	233(7.7)	236(7.8)	272(9)					12~50	30~40	30~35				東側限界地。 63次7号建物
SB08	3×2	520(7.4)	170(5.6) 179(5.9) 179(5.8)	418(13.8)		N4°W	22.1	5	7~20	36~42	31~35				田名松8号建物
SB09	4×1	480(16)	146(4.0) 157(5.2) 183(6.0) 178(5.8)	186(6.1)	186(6.1)	N5°W		6	5.3~ 31.5	22~39	20~35				東側限界地。
SB10	3×2	555(18.3)	285(9.4) 270(8.9)	530(17.5)	290(9.6) 340(9.0)	N4°W		5	6~26	30~33	26~28				東側限界地

る。主軸は南北方向である。柱穴径は22~39cm、深さ5.3~31.5cmを測る。各柱間は平均で、桁行約5.3尺である。東側は境界地のため不明である。

SB10 (Fig.45) SB01・08を斜めに切る形で並ぶ柱列である。主軸方向はSB06と同じく北西方向であるが、SB06より西に偏っている。柱穴径は26~33cm、深さ6~26cmを測る。各柱間は、平均で桁行9.1尺、梁行8.7尺である。

(2) 出土遺物 (Fig.47)

遺物の出土は非常に少なく、建物の柱穴から年代を示す遺物は出土していない。建物を構成する柱穴の他には、SP02から須恵器片が出土しており、建物群の年代を推定できるものと考えられる。

SP02出土遺物 (Fig.47-1) 1は須恵器坏で、断面がコの字形の低い輪高台を貼付けた坏である。高台は底部と体部の境に位置する。高台径10.5cmを測る。内外面ナデ調整であるが、体部外面の底部付近はヘラケズリを施している。胎土に微砂を含み、淡茶褐色を呈する。焼成はあまり。

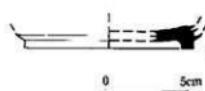


Fig.47 SP02出土遺物実測図 (縮尺1/3)

3.まとめ

今回の調査範囲は著しく狭いが、周辺では第25・26・27・37・63次調査等が実施されている。特に第63次調査検出の掘立柱建物とは一連の建物群を構成するものと考えられるところから、これらの検出遺構との関連も考えなければならない。当該調査では遺構面が著しく荒れており、そのため、わずかに3棟の掘立柱建物を検出するにとどまった。北側の第63次調査では掘立柱建物6棟、及び、柵を検出しており、これらの建物を併せて検討したい。

掘立柱建物SB02・03・04・05の主軸方位は、磁北から西に7~12°振れる範囲にある。掘立柱建物SB03の柱穴掘り方規模は大きく、北側へ延びる側柱だけの建物と思われる。掘立柱建物SB04は2間×2間の総柱建物が推定できるが、柱列が北側に2間程延びることも考えられるところから、掘立柱建物SB05と重複した桁行4間規模の建物規模になる可能性がある。掘立柱建物SB01・02は規模においてあまり差異がなく、掘立柱建物SB01がわずかに東に振れて重複している点からみて、両者は建て替えと考えられる。先後関係は不明である。南側の第79次調査において検出した建物SB08は、掘立柱建物SB02と柱筋が一致しており、同時性が強い。この建物の東側には、桁行4間規模の掘立柱建物SB09が存在するので、SB01・02・08・09はいずれも建て替えが行われた状態を示している。

以上をまとめると掘立柱建物SB01・03と第79次調査の掘立柱建物SB08は、ほぼ南北方向に連なって立地し、2間×2間の総柱建物SB04を伴っていることがいえよう。掘立柱建物SB05・06・09は、いずれも境界地に位置しており、規模、構造については再検討の必要がある。

柵SA01は東西方向に延び、西側は掘立柱建物SB01の北側梁行の中間で止まっている。この柵は、掘立柱建物SB02の柱穴を切った他の柱穴を更に後から切って作られており、少なくともSB01に後出するものである。掘立柱建物SB01・04とも切り合い関係にあるが、その前後関係は不明である。又、この柵は、掘立柱建物SB05の南側に位置し、平行な位置間隔にあるところから、掘立柱建物SB05と柵SA01は一体関係にあると見做すことができる。更に掘立柱建物SB01・02・04と切り合い関係にあることを考慮すれば、この柵は南北方向に連なる建物群に後出するものと考えられる。

以上を整理するとSB01・03・04・08=SB02・09→SB05・SA01の関係となるであろう。これらの建物の時期については遺物が少ないため明瞭ではないが、SP02出土の須恵器壺や、建物規模より奈良時代~中世初頭までの幅広い時期が考えられる。

参考文献

有田遺跡第63次調査 「有田・小出部第5集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第110集

福岡市教育委員会 1984年

*この本文中133頁のFig79、第63・79次調査掘立柱建物配置図においては、1号建物、2号建物の名称に誤植がある。本文中の1号・2号建物の説明記述及び、Fig.80・81、Tab.8の計測表において正しくは1号建物は2号建物、2号建物は1号建物である。Fig.79・81の実測図と建物名称が正しい。

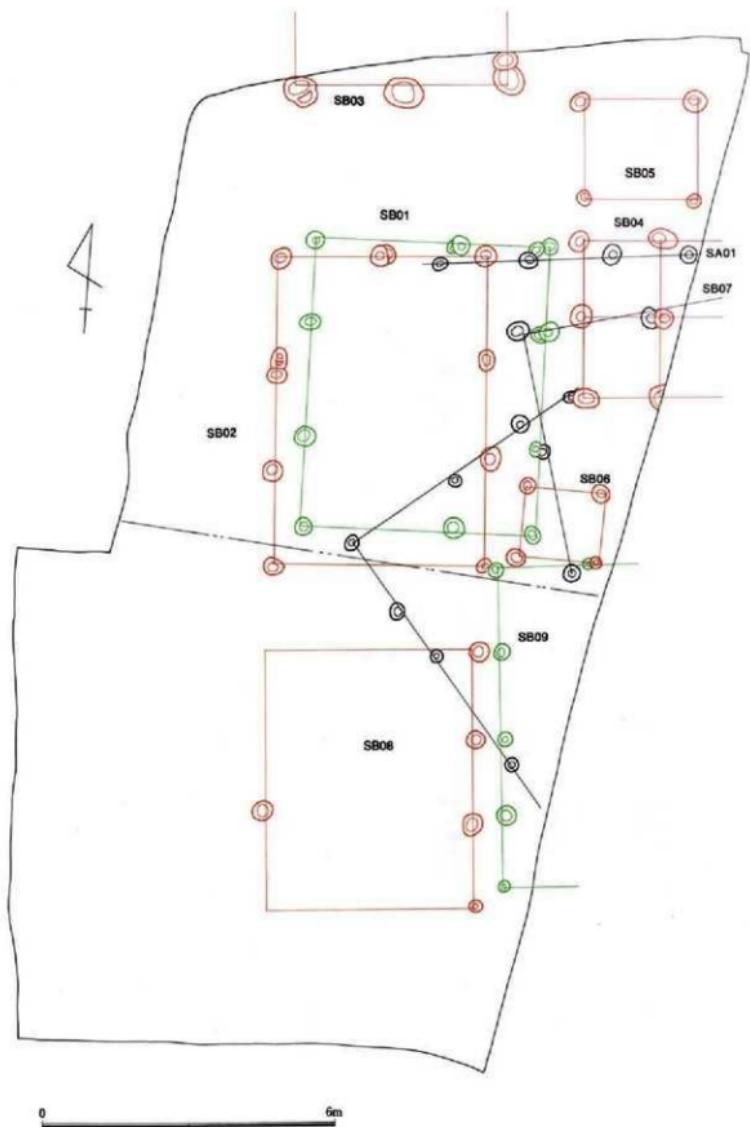


Fig.48 第63・79次調査造溝配置図（縮尺1/100）

有田・小田部

第29集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第538集

1997年（平成9年）3月31日

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

電話（092）711-4667

印 刷 正光印刷株式会社

福岡市西区周船寺3丁目28-1

電話（092）861-5708